ISSN1341－397X

年　報　平成二十一年度　財団法人　山形県埋蔵文化財センター

年　報

平成21年度

平成22年５月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

平成21年度における当センターの事業計画については、関係機関の御支援・御協力をいただきながら、計画した事業を円滑に実施することができました。その概要について、列記いたします。

はじめに、調査事業においては、９遺跡の発掘調査と報告書作成のための13遺跡の整理作業を実施いたしました。発掘調査の内訳は、県土木事業に係る調査が４件、国土交通省事業に係る調査が４件、村山市事業に係る調査が１件となっており、その外10遺跡の発掘調査報告書を刊行いたしました。本県における近年の発掘調査の傾向は、県公共事業の減少は引き続き見られるものの、国による新直轄事業の高速交通網整備に伴う事業が主体となっており、高速交通網の整備率が低い本県にとっては、その傾向はしばらく続くものと考えております。公共事業の円滑な進捗を図るためにも、今後予想される高速道路の整備状況や県の公共事業等の事業量を的確に把握しつつ、調査体制の整備に努めていかなければなりません。また、私どもの重要な施策である埋蔵文化財保護の重要性の周知や、古代の人との心の交流の場を県民の皆さんに提供するとともに、引き続き県民の皆さんの目線に留意しながら、責任ある発掘調査を基礎とした調査研究を推進してまいります。

次に、普及啓発事業につきましては、センターホームページでの情報発信や現地における発掘調査説明会の開催、広報誌「埋文やまがた」の刊行などを通して、埋蔵文化財の調査研究の成果を県民の皆さんにお知らせしてまいりました。

特に今年度は、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館・山形県立博物館・鶴岡市立図書館との共同展示や、山形空港ビル、庄内空港ビルでの「外部展示」を行い、県民の皆さんに出土品を公開し、当センターの事業への理解や文化財保護の重要性について広く普及を図ったところです。

また、昨年度から開催している「山形県埋蔵文化財センター参観デー　埋文まつり2009」では、今年度発掘した調査成果の発表や、企画展示、センターの業務内容の紹介、アンギン編み、勾玉作り、整理作業などの考古学体験を実施し、昨年度を上回る来場者がありました。さらに、学校現場からの依頼を受けた「出前授業」は42校で実施したほか、職員を派遣しての講演や調査研究発表等を実施してまいりました。今後も次世代を担う子供達を中心に、地域の伝統文化の大切さや、誇りと自信の持てる地域づくりの一環としての事業の展開など、さまざまな機会を活用して、研究・普及活動を行い、県民共有の文化遺産としての価値ある埋蔵文化財を後世に伝えていくため、職員一同、一層研鑽を重ねていく所存であります。

平成22年３月31日

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　山　口　常　夫

目　次

Ⅰ.管理運営概要

1．沿　革……1

2．組　織

（1）役員及び評議員……1

（2）職制及び人員……2

（3）組　織……2

（4）職　員……3

3．施　設……4

Ⅱ.事業概要

1．調査業務……5

（1）調査遺跡一覧……6

（2）調査遺跡の概要

山形城三の丸跡（第７次）……8

高瀬山遺跡（ＨＯ）３期……12

クグノ遺跡……16

鎌倉上遺跡……18

馳上遺跡……22

馳上遺跡（西谷地地区）……26

山形城三の丸跡（第６次）……28

玉作２遺跡……32

南口Ａ遺跡……34

作野遺跡……36

2．普及啓発研究等業務

（1）研修等

①全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣……40

②埋蔵文化財担当者専門研修への派遣……40

（2）情報処理

①収蔵図書データベース……40

（3）普及啓発

①ホームページ……41

②山形県埋蔵文化財センター参観デー　やまがた埋文祭り2009……41

③外部展示……42

④学校への協力……43

⑤来所者……45

⑥職員派遣等……47

⑦調査説明会……47

⑧資料貸出……48

⑨資料掲載許可……48

⑩出版物……49

（4）比較検討
山形盆地における古墳時代前期土師器甕の計測
—容量と形態の特徴について—　渡部　裕司…… 50
古代の平面正方形区画施設の内部構造　植松　暁彦…… 58
山形県における江戸時代後期の陶磁器の流通
—米沢市堤屋敷遺跡出土遺物を中心として—　菅原　哲文…… 66

Ⅰ　管理運営概要

1．沿　革

山形県には、土地に埋蔵された埋蔵文化財や史跡、有形文化財、民俗文化財などが数多く残されています。これらの文化財は、長い歴史の中で生まれ、育まれ、そして今日まで守り伝えられてきた貴重な県民の文化遺産であり、これを保護・活用し、次世代に確実に継承していくことが大事です。

平成16年に策定された第５次山形県教育振興計画では、「いのち」、「まなび」、「かかわり」の三つがキーワードとなっています。埋蔵文化財については、広い「かかわり」の中で、社会をつくるという基本方針のもと、「感性あふれる地域文化の創造」という視点から、保護と活用にあたることとされています。

平成５年４月に、埋蔵文化財の保護と県土の開発を両立させて調和を図るため、山形県の出資によって「財団法人山形県埋蔵文化財センター」が設立されました。当センターでは、埋蔵文化財の調査研究を通じて、県民の文化生活の向上と地域文化の振興に寄与することを目的として、

１．県内遺跡等埋蔵文化財の調査研究
２．埋蔵文化財の発掘調査
３．埋蔵文化財の活用と保護思想の普及

の三つを基本とした各種事業を推進しております。

近年は埋蔵文化財の教育的価値を認識してもらう視点に立って、主に「発掘調査報告会」や「ホームページによる情報提供」、「出前授業」、「外部展示」などの普及啓発活動についても力を注いでおります。

2．組　織

（1）役員及び評議員

役　員

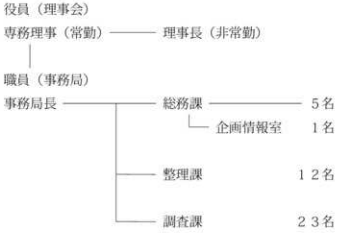
理事長	山口　常夫	山形県教育委員会教育長（平成19年３月22日就任）
専務理事	柏倉　俊夫	財団常勤役員
理　事	阿子島　功	福島大学　人間発達文化学類特任教授
理　事	川崎　利夫	東北中世考古学会長
理　事	佐藤　鎭雄	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館長
理　事	大沼　幸一	財団法人山形県生涯学習文化財団専務理事
監　事	榔野　哲郎	税理士
監　事	渡辺　一夫	山形県教育庁総務課長

評議員	佐藤　禎宏	山形考古学会副会長
評議員	長澤　正機	最上地域史研究会理事
評議員	木村　俊夫	財団法人山形県生涯学習文化財団専務理事
評議員	鈴木　啓司	社団法人山形県私立学校総連合会常務理事
評議員	高橋　久一	山形県農林水産部農村計画課農山村整備主幹
評議員	吉田　郁夫	山形県土木部道路課長
評議員	名和　達朗	山形県教育庁文化財保護推進課　文化財保護主幹

(2) 職制及び人員

事務局長	1名
課　長	3名
課長補佐	2名
専門調査研究員	4名
主任調査研究員	6名
主　任	1名
調査研究員	9名
調査員	13名
事務員	3名
計	42名

(3) 組　織



（4）職　員

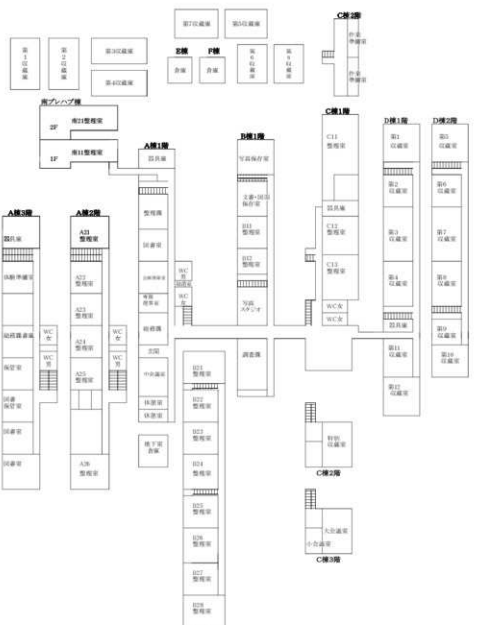
課　名	職　名	氏　名	所　属
総　務　課	事務局長	小笠原正道	県行政職派遣
	課　長	鎌上　勝則	県行政職派遣
	主　任	原田　英明	財団職員
	事務員	井上　紀子	
	事務員	吉野　章子	
	事務員	加藤　郁恵	
企画情報室	調査研究員	佐々木　茂	県教育職派遣
整　理　課	課　長	安部　　実	県行政職派遣
	課長補佐	黒坂　雅人	財団職員
	専門調査研究員	齊藤　主税	財団職員
	主任調査研究員	小林　圭一	財団職員
	主任調査研究員	髙橋　一彦	県教育職派遣
	主任調査研究員	鈴木　良仁	県教育職派遣
	主任調査研究員	髙桑　弘美	財団職員
	調査研究員	齋藤　　健	財団職員
	調査研究員	髙桑　　登	財団職員
	調査員	髙木　　茜	
	調査員	山田　　渚	
	調査員	五十嵐　萌	
調　査　課	課　長	阿部　明彦	県行政職派遣
	課長補佐	伊藤　邦弘	財団職員
	専門調査研究員	氏家　信行	財団職員
	専門調査研究員	須賀井新人	財団職員
	専門調査研究員	佐竹　弘嗣	県教育職派遣
	主任調査研究員	植松　暁彦	財団職員
	調査研究員	福岡　和彦	県教育職派遣
	調査研究員	武田　伸一	県教育職派遣
	調査研究員	菅原　哲文	財団職員
	調査研究員	三浦　勝美	県教育職派遣
	調査研究員	水戸部秀樹	財団職員
	調査研究員	今　　正幸	県教育職派遣
	調査研究員	庄司　隆志	県教育職派遣
	調査員	須賀井明子	
	調査員	伊藤　純子	
	調査員	吉田　　満	
	調査員	濱田　　純	
	調査員	山木　　巧	
	調査員	渡辺　和行	
	調査員	渡部　裕司	
	調査員	後藤枝里子	
	調査員	松田　聡子	
	調査員	安部　将平	

3．施　設

財団法人山形県埋蔵文化財センターは、山形県上山市弁天二丁目15番１号に所在する。

当所の施設は、Ａ棟からＦ棟までの６棟の建物からなる。

Ａ	棟　鉄筋コンクリート３階建	管理棟（専務理事室、総務課、企画情報室・整理課ほか）
Ｂ	棟　鉄骨２階建	整理棟（調査課・整理室ほか）
Ｃ	棟　鉄筋コンクリート３階建	出土文化財収蔵棟
	鉄骨２階建、鉄骨１階建	整理棟
Ｄ	棟　鉄骨２階建	出土文化財収蔵棟
Ｅ・Ｆ棟	鉄骨平屋建	器材棟（倉庫）
プレハブ棟	２階建	整理棟
プレハブ棟	平屋建	出土文化財収蔵棟（第１～第８）８棟



Ⅱ　事業概要

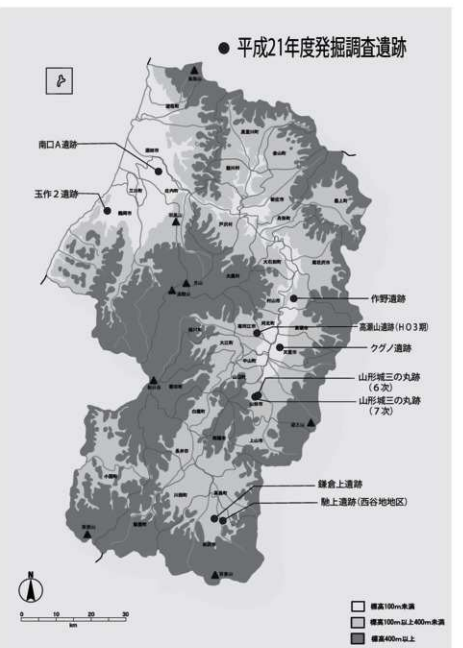
1．調査業務

平成21年度は、国土交通省および山形県農林水産部、山形県土木部並びに村山市から委託を受け、道路建設や公園整備事業などに先だっての発掘調査と整理作業を実施しました。

発掘調査は９遺跡について行い、調査面積は33,390㎡になります。出土遺物は土器等500箱が出土文化財の認定を受けました。

報告書作成のための整理作業は22遺跡について実施し、そのうち10冊の発掘調査報告書を刊行しました。

1　南口Ａ遺跡
2　玉作２遺跡
3　作野遺跡
4　高瀬山遺跡（HO３期）
5　クグノ遺跡
6　山形城三の丸跡第６次
7　山形城三の丸跡第７次
8　馳上遺跡
（西谷地地区含む。）
9　鎌倉上遺跡



※本書中の「調査遺跡の概要」の記述内容は概要の報告であり、発掘調査報告書の刊行をもって本報告となります。

（1）調査遺跡一覧

NO.	遺跡名	所在地	主な時代	遺跡の種別	調査期間
1	山形城三の丸跡（第７次）	山形市	奈良・平安、中世、近世	城館跡	５月14日～６月25日
2	高瀬山遺跡（HO３期）	寒河江市	縄文・奈良・平安、中世	集落跡	５月12日～７月15日
3	クグノ遺跡	天童市	奈良・平安	集落跡	５月14日～６月26日
4	鎌倉上遺跡	米沢市	古墳	集落跡	７月21日～11月13日
5	馳上遺跡（西谷地地区）	米沢市	古墳～中世	集落跡	５月12日～11月20日
6	山形城三の丸跡（第６次）	山形市	中世・近世	城館跡	５月11日～７月30日
7	玉作２遺跡	鶴岡市	古墳・平安	包蔵地	５月11日～８月７日
8	南口Ａ遺跡	庄内町	奈良・平安、近世	集落跡	５月13日～９月16日
9	作野遺跡	村山市	縄文	集落跡	６月９日～７月29日
10	下大曽根遺跡	鮭川村	奈良・平安	集落跡	平成20年度調査
11	上の寺遺跡（第２次）	寒河江市	縄文、奈良・平安、中世、近世	寺院跡	平成19・20年度調査
12	百刈田遺跡	南陽市	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	集落跡	平成15～18年度調査
13	檜原遺跡	南陽市	奈良・平安、中世	集落跡	平成18・19年度調査
14	天王遺跡	南陽市	古墳、奈良・平安、中世	集落跡	平成18・19年度調査
15	堤屋敷遺跡	米沢市	縄文、平安、中世、近世	集落跡	平成19年度調査
16	下屋敷遺跡	米沢市	縄文、中世	集落跡	平成19年度調査
17	川前２遺跡（第１～４次）	山形市	古墳、奈良・平安	集落跡	平成14・15・17・19・20年度調査
18	興屋川原遺跡	鶴岡市	古墳、奈良・平安	集落跡	平成17～19年度調査
19	行司免遺跡	鶴岡市	奈良・平安	集落跡（墓地）	平成18・19年度調査
20	矢馳Ａ遺跡	鶴岡市	古墳、奈良・平安、中世	集落跡	平成18・19年度調査
21	岩崎遺跡	鶴岡市	古墳、奈良・平安、中世	集落跡	平成18・19年度調査
22	川内袋遺跡	鶴岡市	縄文	集落跡	平成19年度調査

計

調査面積 ：平方m	文化財認 定数：箱	調査の原因 〈委託者〉	業務内容 発掘	整理	報告書	調査経費 ：千円
220	15	都市計画街路（山形県土木部）	○	○		20,977
780	192	最上川ふるさと公園整備事業（山形県土木部）	○	○		9,990
1,170	5	主要地方道〈天童大江線〉道路改良（山形県土木部）	○	○	○	21,952
3,500	21	一般国道287号〈米沢市窪田〉（山形県土木部）	○	○		42,460
15,650	132	東北中央自動車道米沢IC付帯工事〈国土交通省〉	○	○		138,345
470	44	国道112号霞城改良事業〈国土交通省〉	○	○	○	40,117
3,700	10	日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設〈国土交通省〉	○	○		48,770
6,500	16	一般国道47号余目酒田線改良事業〈国土交通省〉	○	○	○	55,476
1,400	65	徳内・シーボルトライン道路改良事業（村山市）	○	○		34,083
		経営体育成基盤整備事業〈山形県農林水産部〉		○	○	18,187
		農免道路整備事業〈山形県農林水産部〉		○	○	21,878
		一般国道113号赤湯バイパス改築事業〈国土交通省〉		○	○	21,971
		一般国道113号赤湯バイパス改築事業〈国土交通省〉		○	○	6,550
		一般国道113号赤湯バイパス改築事業〈国土交通省〉		○	○	7,650
		東北中央自動車道米沢IC付帯工事〈国土交通省〉		○		10,007
		東北中央自動車道米沢IC付帯工事〈国土交通省〉		○		
		須川河川改修事業（下流部）〈国土交通省〉		○		33,918
		日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設〈国土交通省〉		○	○	43,004
		日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設〈国土交通省〉		○		30,490
		日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設〈国土交通省〉		○		47,890
		日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設〈国土交通省〉		○	○	5,875
		日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設〈国土交通省〉		○		63,606
33,390	500					723,196

山形城三の丸跡

遺跡番号　中世城館遺跡番号２０１－００２
調査次数　第７次
所在地　山形市春日町
北緯・東経　北緯３８度１５分１１秒・東経１４０度１９分１０秒
調査委託者　山形県村山総合支庁
調査原因　都市内街路ネットワーク整備事業３・４・２５号東原村木沢線（春日町）
調査面積　220平方メートル
現地調査　平成２１年５月１４日～６月２５日
調査担当者　庄司隆志（調査主任）・安部将平
調査協力　山形市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所
遺跡種別　城館跡
時代　古代・中世・近世
遺構　溝跡・土坑・堀跡
遺物　土師器・須恵器・中近世陶磁器・近現代陶磁器・瓦・木製品・石器
（文化財認定箱数：１５箱）

調査の概要

山形城三の丸跡は、山形城（本丸・二の丸）を取り囲む、東西約1,600m、南北約2,000mの広大な遺跡である。

平成19年8月に、県教育委員会によって山形市春日町地内で試掘調査が行われ、その地点は山形城三の丸の土塁・堀跡、三の丸内部と確認された。これを受け、山形県村山総合支庁建設部都市計画課、県教育委員会などによって協議が進められ、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、道路の拡幅部分について、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することになった。

今回の調査区東側の山形市城南町地内では、県道整備に先立って、山形城三の丸跡第１～３次調査（平成14～16年度）が行われた。その西側の延長部分にあたるのが、春日町地内の調査区である。春日町では、第５次調査（平成20年度）に引き続く発掘調査で、平成21年度は、第７次調査として約220㎡を調査した。

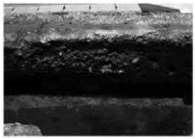
調査区を４か所に分割して発掘調査を進め、５月中旬から６月下旬までに、市道の下を含む県道南側の残されていた区域である10～13区の調査を行なった。

位置と環境

調査した場所は、山形市の中心部にある霞城公園（国指定史跡山形城跡の本丸・二の丸）から見て南西方向に位置し、三の丸の11の出入口の一つである飯塚口の近くで、JR山形駅からは北西へ900mのところにあたる。調査区の標高は約123.5 mである。

山形城は、14世紀後半に斯波兼頼が築いたといわれ、文禄・慶長年間（1592～1615年）、最上義光によって、本丸・二の丸・三の丸と三重の堀を構えた城郭・城下町が建設された。義光の時代は、飯塚口の近くに、山野辺右衛門大輔（義忠。義光の四男）が配置された。

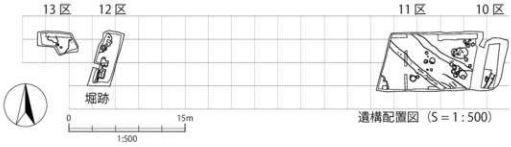
その後、この辺りは屋敷地から田畑に変わり、明治以降も、昭和30年代までは、農地として利用されていた。



１３区　土層断面（南から）

１０区　完掘状況（西から）

１０区　遺構検出状況（東から）

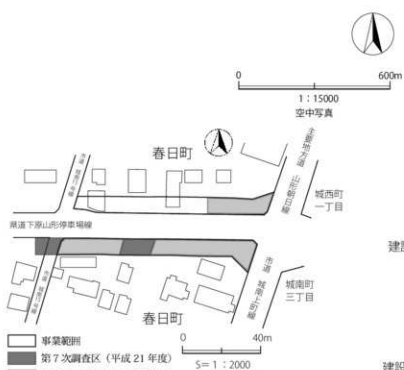


遺構配置図（S＝1：500）

１２区　遺構検出状況（南南西から）

１１区　完掘状況（西から）

１１区　遺構検出状況（東から）



調査概要図

1956（昭和 31）年 5 月 8 日
米極東空軍撮影　M681-97

1965（昭和 40）年 6 月 22 日
建設省国土地理院撮影　MTO-65-04-007-8

1980（昭和 55）年 5 月 29 日
建設省国土地理院撮影　MTO-80-04-012-11

空中写真に見る調査区（春日町）付近の変遷

昭和30年代後半に道路が整備された後、昭和40年代（1965～1974年）以降、春日町を含む周辺地域では、区画整理・宅地化が進行した。現在は、山形市の市街地中心部と市の西部を東西に連絡する県道に沿った、住宅が密集する市街地となっている。

各調査区の遺構

今回の調査で見つかった遺構は、溝跡、土坑などで、調査区全体での遺構総数は、約40基であった。

今年度の調査の主な目的は、平成20年度の調査で検出された三の丸堀跡の、西の岸の部分を確認することであった。このため、堀跡の一部がかかると推定される道路の地下部分について、関係機関で届出・申請等の諸手続きをとり、安全に配慮した上で、調査を進めた。

10区　約2mの間隔で、1列に3基並ぶ柱穴と考えられる遺構から、建物跡の存在が想定されたが、ほかの柱穴跡が確認されず、詳細は不明である。11区に続く溝跡も確認された。

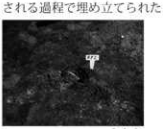
11区　この調査区の南西部で、現在の地表面から約60cmのところから黒色の土が良好な状態で残っているのが確認された。そこからは、土師器、須恵器などが出土した。また、この黒色土の北側に沿って、南東から北西の方向へ延びる溝跡が見つかり、その溝の北側には、砂の堆積層が確認された。砂は、江戸時代初めに山形城が築かれる前に、鳥見ヶ崎川の洪水によって流れてきたものと考えられる。黒色土と砂の層の箇所は、城絵図や1888（明治21）年の地籍図（旧公図）から、三の丸の土塁の東辺部と考えられ、土塁が築かれた際の盛り土によって、古代の土層・遺物、砂の層が保護されたと考えられる。また、近代以降の土塁の取り崩しや土木・建築工事、耕作の大きな影響を受けなかったことも、古代の土や遺物、生活面が現代まで残存していた一因と考えられる。

12区　この調査区は、堀跡（昨年度の調査で確認）の西側に隣接する区域で、市道城南15号線の部分である。道路の地下部分は、過去の水道管などの埋設工事に伴って改変を受けていた。約80cm掘り下げたところで、南北方向に並ぶ石・杭の列が見つかったが、これは埋設工事によるもので直接堀に関係するものではないと考えられる。ただし、市道の部分について、地籍図や1956（昭和31）年の都市計画図と、現在の地図とを重ね合わせて検討すると、その箇所は、かつての堀沿いの道のすぐ東側であることから、調査区における三の丸の堀の西岸は、市道の部分にあたると判断される。工事の影響を比較的受けずに残っている土の理化学的分析をしたが、年代が古く、堀の埋め土ではないとの結果であった。

13区　この調査区は、市道の西側に隣接する区域である。掘削して調査したところ、堀の西側の立ち上がり部分を土層の断面からは確認できなかった。よって、市道の西側の区域は、堀の外側（三の丸の外）であると判断される。また、調査区北側の土層断面に、人の手が加わって掘られた溝跡（地表から70～100cm下）が確認できた。その上には、今から約40数年前（1965年前後）の生活廃棄品を含む、溝の埋め土の層があった。溝跡が確認された箇所と、1956年の都市計画図とを重ね合わせて比較すると、そこは以前、飯塚方面に流れる水路（溝跡）であったことが確認される。このことから、検出された溝跡は、この辺りが区画整理・宅地化のために整地される過程で埋め立てられたと考えられる。

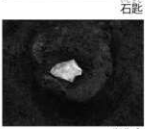
11区の黒色土から出土した遺物の状況

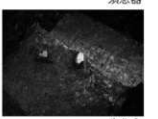
石匙

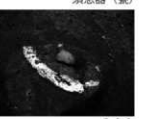

須恵器

須恵器（甕）

須恵器


土師器


土師器


須恵器

遺物

今回の調査では、土師器・須恵器・瓦・中近世陶磁器・近現代陶磁器・木製品などが出土した。

土師器や須恵器は、11区の黒色の土から出土した。遺物の特徴から、古代のものと判断される。また、その土の層からは、石器の一種である石匙も出土した。

瓦は、12区・13区から近世・近代のものが出土した。瓦の色調でみると、黒瓦より赤瓦の方が数量は多い。種類は丸瓦、軒丸瓦、平瓦、軒平瓦、熨斗瓦、桟瓦などである。遺構からの瓦の出土ではなく、表土掘削や遺構検出作業で見つかったため、瓦の使用年代は不明である。

陶器や磁器の破片は、12区・13区から多数出土した。中世末から近世初頭（16世紀末～17世紀初め、1600年前後）の肥前陶器も出土したが、飯碗、湯呑茶碗、皿、鉢などほとんどが近現代の日常生活で用いられた食器である。陶磁器の出土状況から、壊れたものが廃棄されたと考えられる。軍用食器も出土したが、この背景には、調査区の近くに軍関係施設が存在した（山形市には、かつて霞城公園内に旧陸軍歩兵三十二連隊が置かれ、現在の城南町に練兵場があった）ことをあげることができよう。

木製品は、春日町地内の調査区では堀跡から多く出土する傾向がある。12区も堀跡にかかる場所であったが、比較的遺物が多く出土する堀の底部ではないこと、過去の工事の影響で堀の埋め土の残存状況がよくなかったことから、今年度の木製品の出土数は極めて少なかった。

まとめ

今回の調査によって、三の丸の堀の西岸は、市道の部分にあたることが確認された。また、調査区の一部からは古代の遺物も出土した。出土品や、埋め土の状況、各調査区の遺構のあり方などの調査成果は、堀が埋められた経緯や時期、堀に近接する三の丸の様子を、今後検証し、明らかにしていくための貴重な資料である。

調査区における堀の箇所の土地利用は、堀から農地、農地から宅地・道路へと移り変わってきた。近代以降、堀は埋め立てられ農地になったが、堀の西側沿いにあった道は残った。現代（昭和30～40年代）の区画整理・宅地化の過程で、堀跡部分の東側は宅地になり、その西側は市道として利用され、道路の地下には水道や下水道、ガス管など社会生活の基盤となるものが埋設された。堀沿いの道も区画整理の対象となりそのままの形状で残らなかったが、その道のすぐ東側に並行する形で、かつての堀の部分に現在の市道が整備された。

近世に造られた三の丸の堀は、近代以降に堀の役割を終えて埋め立てられ、現在は、その形跡は残っていない。発掘調査などの成果をもとにして、堀の築造から埋め立てまでの経緯をたどることで、山形城の歴史遺産が、現代の都市計画やまちづくりに連綿とつながっていることを窺うことができる。

１０区　調査状況（東から）

１１区　遺構検出作業（東から）

１１区　調査状況（北西から）

１２区　市道部分の調査状況（南南西から）

１２区からの出土遺物

丸瓦、平瓦

１３区からの出土遺物

磁器（徳利）、漆器（椀の蓋）

高瀬山遺跡（ＨＯ）３期

遺跡番号　430
調査次数　第２次
所在地　寒河江市大字寒河江字高瀬山
北緯・東経　38度21分44秒・140度16分8秒
調査委託者　山形県村山総合支庁建設部西村山道路計画課
調査原因　最上川ふるさと総合公園都市公園整備事業
調査面積　780㎡
現地調査　平成21年5月12日～7月15日
調査担当者　今正幸（調査主任）・高橋一彦
調査協力　寒河江市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所
遺跡種別　集落跡・古墳
時代　縄文・古墳・奈良・平安時代
遺構　竪穴住居跡・複式炉跡・墓坑（土器埋設遺構）・土坑・柱穴・溝跡
遺物　縄文土器・土師器・赤焼土器・土製品・石器・石製品
（文化財認定箱数：192箱）

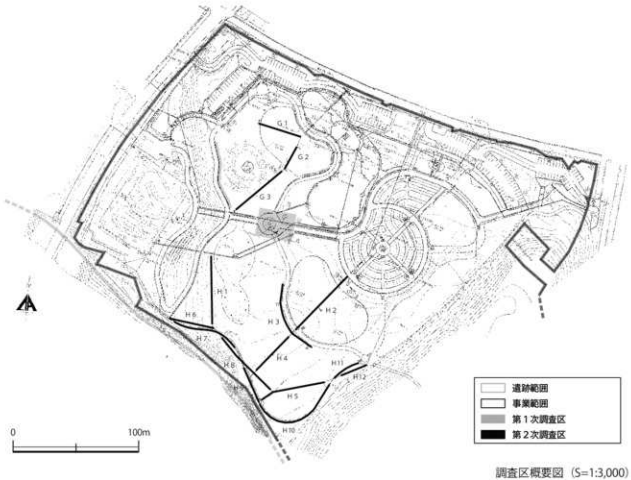
調査の概要

高瀬山遺跡は、寒河江市街の南西、遺跡の南に沿って流れる最上川に至る東西約1.6kmの範囲に位置する。旧石器時代～中世にわたる複合遺跡で、県内でも有数の規模を誇っている。周辺は果樹園や畑として利用されてきたが、近年の開発によって現況は大きく変貌しつつある。当センターでは、高速道路建設に係る１期・２期・ＳＡ（サービスエリア地区）、公園造成に係るＨＯ（旧称ハイウェイ・オアシス地区）１期・２期の発掘調査を実施してきた。

今回は、最上川ふるさと総合公園都市公園整備事業に係る高瀬山遺跡（ＨＯ）３期の発掘調査となる。調査区は、遺跡の南東端にあたる比高差20～30ｍほどの小丘陵「高瀬山」の西麓、最上川左岸の中位段丘に立地する。また、区域内には、県指定史跡「高瀬山古墳」が所在する。調査は、給排水・電気・フェンスなど公園設備の埋設工事に沿った幅１～２ｍほどの線掘り（トレンチ調査）が中心で、住居跡など大型遺構の検出や遺跡の全容を捉えることは困難であった。

昨年度の第１次調査では1,500㎡の調査を実施し、縄文時代中期の埋設土器や奈良・平安時代の竪穴住居跡（方形プランの角部分）とカマド跡とみられる焼土を検出した。また、高瀬山古墳の周辺において、カーブを描く溝跡が複数確認されたが、高瀬山古墳群に関連する周溝の一部である可能性も否定できない。

今年度は昨年度に引き続く第２次調査で、780㎡の面積について調査を行った。調査区は、高瀬山古墳の周辺をＧ区、最上川に面する段丘崖（斜面）と高瀬山西麓の段丘面（平坦面）をＨ区とし、計15本のトレンチを設定した。なお、Ｈ９・10トレンチについては、遺物包含層の掘下げまでで調査を終了した。それ以降の遺構



調査区概要図（S=1:3,000）

検出・精査などは行わず、工事の一部中止や盛土による工法変更で対応することとなった。

遺構と遺物

今回の調査は１次調査の約半分ほどの規模となったが、出土遺物は整理箱にして 192 箱、検出遺構は登録数で 300 基を超える成果が得られた。以下に、主な遺構・遺物と調査区ごとの概要について説明する。

高瀬山古墳周辺のＧ区では、果樹園内にあるＧ１・２トレンチの遺構は希薄であったが、Ｇ２トレンチにおいて幅５ｍを超える大型の落ち込み（ＳＸ 203）を検出した。これが古墳の周溝となるようなものかどうか、関連する遺物の出土はなく判然としない。また、Ｇ３トレンチの壁際で、縄文時代の埋設土器（ＥＵ 211）を検出した。土器埋設遺構の断面観察から、表土のわずか 15 ～ 20cm 下から縄文時代の遺物包含層が撹乱を受けず、良好に保存されている状況が確認された。

最上川に面するＨ区の段丘斜面では、主に奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。斜面上に位置するＨ６・７トレンチの遺構は希薄であったが、段丘上端にあたるＨ１トレンチでは奈良・平安時代の竪穴住居跡２棟（ＳＴ 238・240）を検出した。床面には貼床が認められ、カマド跡とみられる焼土部分からは赤焼土器の甕が出土している。昨年度の１次調査においても、斜面下方で当該期に属する竪穴住居跡を検出している。住居跡に近接するＨ６トレンチでは、大型の袋状土坑（ＳＫ 220）が検出されているが、覆土の土色・土質などから比較的新しい時代に属するものと判断され、これらの住居跡に付随する貯蔵穴であった可能性が考えられる。

最上川に面する段丘斜面

高瀬山の西麓、H区の段丘平坦面では、多量の縄文土器片・フレイクを出土する厚さ約30～50cmの遺物包含層が検出された。遺物包含層の範囲はH区の約1/4にあたる面積を占め、出土遺物は全出土量192箱のうち、126箱にも達する。これらの区域では、縄文時代中期末葉～後期前葉を中心とする遺構・遺物が密集し、今回の調査の主体を成している。

遺構の分布は、H4・5・7・8トレンチの段丘縁辺部において顕著であり、H区北東部の果樹園・雑木林内にあるH2・11・12トレンチでは希薄であった。H5トレンチの東半部では、良好な遺物包含層を確認したものの、遺構はほとんど検出されていない。この区域では、遺構検出面とした地山までの堆積が厚く、遺構は検出面よりも、さらに上層に存在した可能性が高い。当該期の主要な遺構は、そのほとんどがH7トレンチの段丘平坦面とその周辺に集中している。最上川に浸食された急峻な段丘崖に接するように立地するが、当該期における段丘面（生活面）は、あるいは、さらに河川側に広がっていた可能性も示唆される。H5・7トレンチでは、埋設土器と石組の2つの部分からなる、当該期に特徴的な複式炉の一部（EL247・499 EU262）を検出した。竪穴住居跡については、調査の性格上、平面プラン全体を検出することは難しかったため、炉・カマド跡や貼床などの検出を以て住居跡と判断した。しかし、劣化の著しい礫石や多量のフレイクを出土したH1トレンチのSX241、焼土が散在するH8トレンチのSX288など、住居跡の可能性がある遺構は、これ以外にも存在する。H7トレンチでは、これらの住居跡に付随するかのように、葬送や祭祀に関わる遺構も検出されている。土器埋設遺構（EU244）は幼児を埋葬した墓坑と考えられるが、埋甕の上部に板状の蓋石を伴うもの（EU269）も確認された。また、袋状土坑（SK254）の底面から、折損した石棒と石皿がセットで出土している。石棒と石皿の共伴事例は比較的多く、石棒は男性、石皿は女性を象徴するものと考えられる。覆土からは焼土も検出されており、祭祀的な性格を持つ遺構である可能性が高い。なお、付近には、地面に立てるように埋設されていた柱状の立石遺構（SP265）もある。H8トレンチの袋状土坑3基（SK302・304・329）では、数個体の土器や焼土が覆土内に積み重なった状況で検出されており、数度にわたる廃棄行為が行われていたとみられる。H3トレンチ北半部の袋状土坑2基（SK355・364）からも、土器が数個体まとまって出土しているが、これらは縄文時代中期初頭に属するもので、その時期や位置的にみても、他の遺構とはやや隔絶された印象を受ける。

出土遺物については、縄文土器が主体を占めるが、竪穴住居跡（ST242）から出土した器高4cmほどのミニチュア土器や土製品の耳飾などが特筆される。なお、縄文時代後期前葉の土器には、在地とは系統の異なるものが見られ、高瀬山西麓に接するH10トレンチの遺物包含層で一括出土している。石器には、定形器種としての石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・凹石・敲石、石棒の一部とみられる石製品などがある。特に石皿や凹石など礫石器の出土が顕著であった。

まとめ

今回の調査によって、高瀬山西麓の中位段丘面において、縄文時代中期末葉～後期前葉（約4000年前）の大規模な集落跡の存在が明らかになってきた。当該期に特徴的な複式炉を有する竪穴住居跡をはじめ、貯蔵や廃棄、一部に祭祀的な利用も考えられる袋状土坑、墓坑といった遺構群は集落を構成する要素となっている。遺物に関しても、多量の土器片・フレイクを出土する遺物包含層の存在とともに、食料の加工・調理に用いる石皿や凹石などが石器組成で多くみられることは、高瀬山や最上川を背景とする恵まれた環境のもとで、遺跡が生活の場として営まれてきたであろうことを物語っている。

昨年度の1次調査の成果と合わせて、今後の整理作業において、遺物の年代や遺跡の性格などについて、さらに詳しく検討していきたい。

H7トレンチ調査風景

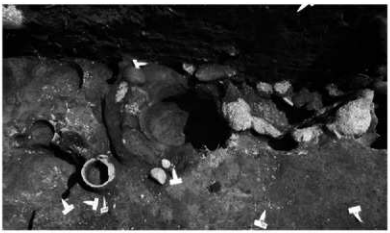
ＳＸ 203 周溝？検出状況

Ｈ 10 トレンチ遺物包含層出土の縄文土器

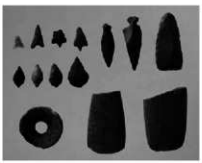
ＳＴ 240 カマド跡出土の赤焼土器

ＥＵ 269 出土の埋甕・蓋石

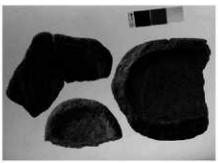
ＥＵ 262 埋設土器・焼土検出状況



ＥＬ 499 複式炉・焼土検出状況



土製耳飾と打製・磨製石器



礫石器（石皿）

礫石器（凹石）

クグノ遺跡

遺跡番号　平成20年度登録
所在地　天童市大字小関
北緯・東経　北緯38度21分59秒・東経140度21分34秒
調査委託者　山形県村山総合支庁建設部道路課
調査原因　主要地方道天童大江線道路改良工事
調査面積　1,170㎡
現地調査　平成21年5月14日～6月26日
調査担当者　武田伸一（調査主任）・須賀井明子
調査協力　天童市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所
遺跡種別　集落跡
時代　平安時代・中世・近世・近代
遺構　溝跡・土坑・旧河道跡・ピット
遺物　土師器・須恵器・陶器・磁器・石製品
（文化財認定箱数：5箱）

調査の概要

クグノ遺跡は、主要地方道天童大江線道路改良工事が開始されるのに先立ち、山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（当時）が分布調査を行った結果、平成20年に新規登録された遺跡である。

今年度、財団法人山形県埋蔵文化財センターでは山形県村山総合支庁建設部道路課からの委託を受け、事業区内にかかる1,170㎡について緊急発掘調査を実施した。

クグノ遺跡は、天童市スポーツセンターの北向かい、ＪＲ天童駅から直線距離にして西約1㎞にあり、押切川と倉津川に挟まれた乱川扇状地の前縁部に位置している。標高は97ｍを測り、地形は東から西へ若干傾斜している。畑地として利用されていたが、以前は水田であったとみえ、ほ場整備も実施されている。

遺構と遺物

ほ場整備により多くの遺構が削平を受けたと考えられるため、遺構の分布は全体的に希薄である。特に1区は希薄である。2区ではピットが多く検出されている。また、北東から南西へ向かう旧河道があり、埋まった後にピットが掘られている。柱痕を確認できるピットもいくつかあるが、いずれも関連性は認められず、建物跡を検出するには至っていない。3区はピットがあまり検出されず、溝跡が主体となっている。その多くは、北東から南西へ向かう旧河道とほぼ並行している。

遺物は、遺構出土の遺物が1区6点、2区2点、3区15点で、3区から多く出土している。中でも3区の溝跡から出土した遺物は土師器や須恵器が中心である。但し、そのほとんどが覆土の1層目からの出土である。遺構外出土の遺物は1区12点、2区41点、3区1点で、2区からの出土が突出している。その中で、土師器と中近世および近代陶磁器が大半を占める。

まとめ

土坑・溝跡について、どのような性格であったのかなどについては不明である。出土遺物の数も少なく、内容は、わずかな縄文土器と 9 世紀代の土師器、須恵器、中近世・近代陶磁器などで、ほとんどは流れ込みと考えられる。一方で、周辺には多くの遺跡が存在し、また近世から現在に至るまで集落が存続している。このことから、遺跡の中心は調査区の北側にあり、調査区は集落の周辺部であったと考えるのが妥当である。

調査区遠景（南東から）

3 区溝跡集中域（東から）

遺構配置図（S=1：400）

鎌倉上遺跡

遺跡番号　平成20年度登録
所在地　米沢市窪田町小瀬字鎌倉上
北緯・東経　北緯37度57分6秒　東経140度6分43秒
調査委託者　山形県置賜総合支庁建設部道路計画課
調査原因　道路ネットワーク整備事業（国道・交円改築）一般国道287号米沢北バイパス
調査面積　3,500㎡
現地調査　平成21年7月21日～11月13日
調査担当者　菅原哲文（調査主任）・山木巧・渡部裕司
調査協力　米沢市教育委員会・窪田コミュニティセンター・置賜教育事務所
遺跡種別　集落跡
時代　古墳時代
遺構　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・畝跡・土坑・柱穴
遺物　土師器・須恵器・陶磁器・木製品・石製品・貨幣
（文化財認定箱数：21箱）

遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

鎌倉上遺跡は、米沢市北部に位置する窪田地区に所在する。遺跡は、西側を流れる鬼面川と東側の羽黒川（最上川）によって形成された複合扇状地の沖積地に立地しており、標高は230mである。遺跡から北方へ約1km地点には、全長約80mと県内でも最大級の規模を誇る前方後方墳の賓領塚古墳が位置している。

今回の調査は、国道287号米沢北バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査として実施された。

遺跡は、平成20年度に山形県教育委員会が行った試掘調査で確認され、新規登録された。その結果、事業区に係る遺跡範囲の約7,000㎡について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが山形県から委託を受け、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、工事計画との調整から2カ年に亘り行われる。今年度の調査は、南半域の約3500㎡を対象とし、7月下旬から11月上旬にかけて調査を行った。

検出遺構と出土遺物

今回の調査で、竪穴住居跡、掘立柱建物跡をはじめ、柱穴、溝跡、河川跡、畑の畝跡が検出された。

調査区の北側では、竪穴住居跡が3棟が確認された。一辺が3.5～4.5m程の方形で、床面が硬化しており、一部には柱穴や地床炉が確認された。いずれも住居内から伴出する遺物や遺構の形状から古墳時代前期と判断される。規模が最も大きいＳＴ22住居跡は、一辺の長さが4.5mを測り、主柱穴4本が確認されている。住居内の床面からは、古墳時代前期の土師器（壺・甕・小型壺等）のほか、住居の建築部材と考えられる炭化材が出土している。また、住居の外周を囲むように環状の溝状遺構を配する。

調査区概要図（1：4000）

掘立柱建物跡は、２棟確認された。ＳＢ２建物跡は、柱間が２×２間の間取りで、4.4 m× 4.8 m規模の方形の建物跡である。竪穴住居群のすぐ南側に位置しており、倉庫としての役割が想定される。

調査区南側では、河川跡が検出された。幅約４～７m、深さは約１mで、泥炭が厚く堆積する。北東方向へ流れていたと推測される。下層からは、面取り等の加工を施した棒状の木製品や板材等が出土している。その他、住居跡の周辺には、畑の畝跡と考えられる溝状遺構が確認されたことから、集落の中で畑作が行われていたことが想定される。

出土遺物は、主に古墳時代前期の土師器で、整理箱20箱程である。竪穴住居跡やその周辺に出土が多く認められる。器種は、煮炊きや貯蔵用の甕や壺、食物の盛りつけに用いられる鉢、高い台がつく高坏、他の器をのせる器台など、多様な種類が確認される。また、赤彩を施す小型の壺や器台等や、装飾品である緑色凝灰岩製の管玉も２点認められており、祭祀などに用いられたものと推測される。

ま と め

今回の発掘調査で、竪穴住居跡３棟、掘立柱建物跡２棟をはじめとする遺構が検出され、古墳時代前期の集落跡であることが確認された。居住施設や畑跡などの生産施設が集中する調査区の北端部は、集落の南端であると考えられ、集落の範囲が北側へと及んでいる可能性が高い。古墳時代前期の集落跡は、米沢盆地では類例が少なく、今回の調査は、当時の集落の様相が明らかになった貴重な事例となる。

調査区全景（南から）

調査区作業状況（南から）

遺物包含層出土の土師器甕（西から）

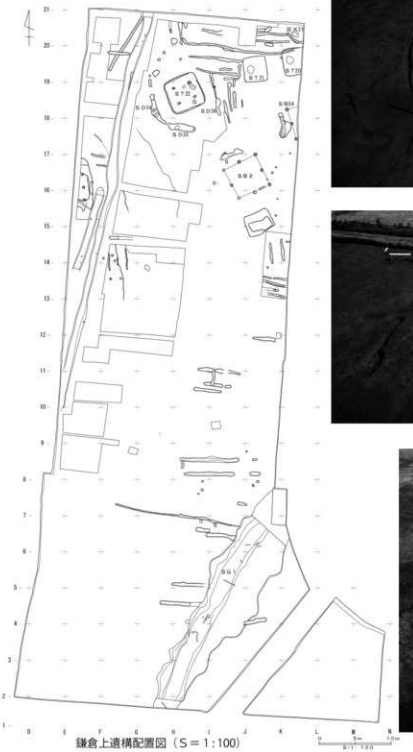
管玉出土状況（北から）

ＳＴ 22 竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

調査区北側の住居跡群完掘状況（西から）

ＳＢ２掘立柱建物跡完掘状況（西から）

調査区南側の河川跡（ＳＧ１）



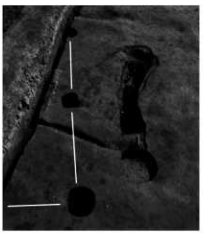
鎌倉上遺構配置図（Ｓ＝1：100）

ＳＴ 20 竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

ＳＴ 20・21 竪穴住居跡（西から）

ＳＴ２０住居跡床面出土の土師器（西から）

ＳＴ 21 竪穴住居跡出土の土師器甕（北から）



ＳＢ 54 掘立柱建物跡（北から）

ＥＫ 31 土坑土師器壷出土状況

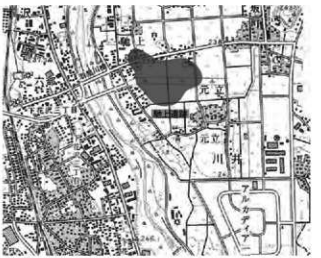
調査区西側の遺物包含層（北から）

赤彩された土師器壷

古墳時代前期の土師器

馳上（はせがみ）遺跡

遺跡番号　米沢市遺跡番号 353-354
調査次数　第２次
所在地　米沢市大字川井字元立
北緯・東経　北緯 37 度 55 分 05 秒・東経 140 度 08 分 20 秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因　東北中央自動車道（米沢～米沢北）改築事業
調査面積　11,750㎡
現地調査　平成２１年５月 12 日～１１月 20 日
調査担当者　須賀井新人（調査主任）・三浦勝美・濵田純・吉田満
調査協力　東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・米沢市教育委員会・置賜教育事務所
遺跡種別　集落跡
時代　古墳時代・奈良・平安時代
遺構　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑・柱穴・炉跡
遺物　土師器・須恵器・黒色土器　（文化財認定箱数：122 箱）



遺跡位置図（1：25,000）

調査の概要

馳上遺跡は米沢市役所の東方約１km に位置し、古墳時代と奈良・平安時代の集落跡と推測される遺跡である。西側を流れる羽黒川によって形成された後背湿地上に立地し、現在の地目は水田となっている。馳上遺跡では、平成12年度に県道改良工事に係る大規模な発掘調査（第１次調査）が行われ、50 棟を超える住居跡や建物跡と、160 箱に及ぶ遺物が見つかった。第２次となる今回の調査は高速道路建設に伴うもので、遺跡範囲の西域に当たり、第１次調査の県道を挟んだ南北両側の 11,750㎡を対象としている。

調査区は既設・仮設の排水路により大小 10 区画に分割され、残土置き場確保のために、調査終了した範囲は順次埋め戻す方法を採用した。調査区における地盤の高さはほぼ一定ながら、遺構や遺物の分布は県道を挟んだ６区と７区に多く認められる。

遺　構

検出された遺構には、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝跡・河川跡などがあり、調査区全体での遺構総数は 1211 基でそのうち、約８割の遺構が６区・７区から検出された。

竪穴住居跡は 25 棟検出され、その多くは一定の区域（６区南部・７区北部）に重複して築かれている。その要因として、羽黒川の支流であったと考えられる複数の河川跡間に当たる比較的安定した場所を選地した結果と考えられる。こららの住居跡は一辺が３～５ｍの方形を呈し、竈はいずれも南辺に備え付けられている。掘立柱建物跡は、規模の大きな柱穴からなる大型の３棟が検出された。これらは東西二間×南北三間の配列で、柱間の距離は九尺（約 2.7 m）を測る。柱穴は径・深さとも約 1m の大きさを呈し、７区中央東側では太さ約 30 ｃｍ程の柱根が残存しているものが４基検出された。

調査区概要図（1：5,000）

また、この柱穴列の東側の４区中央部にも柱穴列があり、桁行を東西方向にもつさらに大型の建物跡であった可能性も考えられる。

土坑は形状や規模が様々で、特に６区・７区に分布する SK3514・SK3356・SK3563 などでは埋土内に焼土や灰、炭化物が堆積していることから、集落内で鍛冶生産が行われたことも想定される。

遺　物

遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器・黒色土器等が主で、古墳時代の土師器も僅かに出土している。遺物の総数は整理箱にして 122 箱を数え、その殆どが破片であるが復元して完形になるものも数多く認められた。

土器の種類は、土師器の坏・甕・皿・鍋、黒色土器の坏・皿、須恵器の坏・甕・皿・壺等が出土しており、中には墨書土器も多く器認められた。坏には底部が大きく器高が低い形状の奈良時代のものと、底部が比較的小さく器高が増す平安時代のものが混在して出土していることから、およそ一世紀の時期幅があるものと考察される。

出土遺物のおよそ３分の２は６・７・10 区で検出された河川跡から出土している。土器は８～９世紀に属する土師器・須恵器・黒色土器が大半を占め、包含層出土の一部のものは５世紀後半にさかのぼる。

河川跡出土の坏類の中には、底部や体部に墨書された土器が含まれ、判読できるものとして「大王」や「大十（奉力）」などの文字が確認できる。また、文字資料に関連した風字硯や円面硯、他に水瓶の頸部と考えられる陶器片、漆紙が付着した土師器坏、土製の紡錘車などが出土している。木製品や金属製品は出土していない。遺構内における遺物の分布は、竪穴住居跡群と一部の土坑に集中している。

10 区河川跡調査状況↑ N

まとめ

第１次では集落跡の中心域を東西方向に、今回の第２次では南北方向に調査した事により、集落中心部の広がりが約 100 m四方に及ぶことが把握できた。馳上遺跡の集落は旧河川沿いの微高地を利用して、約 400 年にわたって断続的に営まれている。集落形態の検討は、次年度に予定されている第３次調査の結果も踏まえて行いたいが、河川との密接な関連が推定される。

第１次調査で出土した木簡は、内容から雨乞い又は止雨を願った祭事に係わる祈祷札と考えられる。また今調査でも、河川跡から「大王」や「大十（奉力）」の墨書土器が数十点出土しており、これらも祭祀に関係する遺物と推測される。河川の枯渇もしくは増水は、この集落にとって極めて切実な問題であったことが背景として想起される。

建物跡の中には倉庫と目される総柱構造のものが何棟か存在することから、遺跡は河川を利用した物資の集積・集荷地であった可能性が考えられる。したがって、河川の氾濫や枯渇は集落にとって一大事であり、経済基盤を揺るがしかねない事態であったものと思われる。

集落形態や出土遺物から官衙的な様相を窺うことはできないが、船運による物資集積の拠点的性格を考慮すれば、群ないし郷に関わる別院的（出先機関）集落と想定できる。

遺構配置図

1・2 区遺構検出状況↑ S

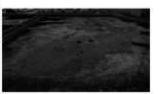
3 区完堀状況↑ SW

3・4・5 区完堀状況↑ N

6 区完堀状況↑ SE

7 区完堀状況↑ N

8・9 区完堀状況↑ SW



10 区完堀状況↑ N

7区 ST3727・ST3728 調査状況↑ N

6区 EL4144 完堀状況↑ N

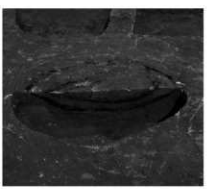
7区柱穴列↑ S

6区 SG3320 遺物出土状況↑ NW

4区 SK3145 遺物出土状況↑ N

7区 ST3482 土師器甕出土状況↑ E

7区 ST3774 完堀状況↑ N



7区 SP3499 土層断面↑ W

7区 SK3514 土層断面↑ W

6区 SX4008 遺物出土状況↑ S

2区 ST3003 遺構検出状況↑ N

西谷地（にしやち）b遺跡

遺跡番号　A 352（米沢市遺跡番号）
所在地　山形県米沢市大字川井字道下
北緯・東経　37度55分31秒・140度8分6秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因　東北中央自動車道（米沢～米沢北間）改築事業）
調査面積　3,250㎡
現地調査　平成21年7月1日～11月20日
調査担当者　水戸部秀樹（調査主任）・松田聡子
調査協力　東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・置賜教育事務所・米沢市教育委員会
遺跡種別　屋敷跡・集落跡
時代　奈良時代・平安時代・中世
遺構　掘立柱建物跡・濠跡・土坑・炭窯跡・焼成遺構・溝跡
遺物　土師器・須恵器・陶器・青磁（文化財認定箱数：10箱）

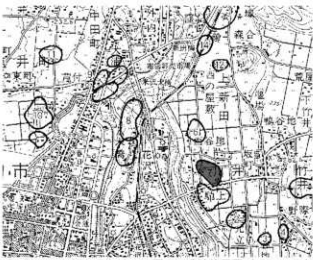


図1　遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

西谷地b遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地に位置（図1）し、現在は水田であった。主として奈良時代、平安時代、中世の遺構・遺物が検出されている。

奈良・平安時代に属する遺物の多くは、調査区の西端を北流する川跡から出土した。住居や建物の遺構は検出されず、集落の末端部の様相を呈している。南側に隣接する馳上遺跡では、同様の遺物が数多く出土しており、関連がうかがわれる。一方、中世では、数多くの建物とそれらを囲む濠跡が検出された。濠跡は調査区内でほぼ一周しており、中世の屋敷が一軒丸ごと確認されたこととなる。

遺構

奈良・平安時代の遺構は、溝跡や川跡のみであり、集落の具体的な様相は明らかではない。おそらく馳上遺跡に関連するものと考えられる。

この遺跡で注目されるのは中世の遺構群である。図2に示したとおり、調査区の中で一辺約45mの濠跡がほぼ一周する。濠跡の幅は最大で2.5mである。その内側では無数の柱穴が検出され、数多くの掘立柱建物が存在していたことが判明した。濠跡の外側では、遺構はほとんど検出されておらず、濠を境として屋敷の内と外が分けられていたことが明確になった。この環濠屋敷内の遺構からは、主に13～14世紀に属する遺物が出土している。

屋敷内で見つかった遺構の中で特筆されるのは、炭窯跡（図3）である。長さ3.3m、幅2.7m、深さ0.4mを測り、焼成部を二つ有する。焼成部の周囲の土は強い熱を受けてたことにより赤く変色している。また、焼成部の奥には煙道、内部からは崩落した天井部が検出された（図4）。土器はほとんど出土しておらず、炭のみが出土しているため、炭窯と考えられる。通常は山間部の遺跡で見つかることが多く、当遺跡のように平地に立地

図2　調査区全景（上が北）

する遺跡で検出される例は少ない。柱穴が付属しており、本来は屋根がかけられていたと考えられる。

遺　物

奈良・平安時代に属する須恵器、土師器、13～14世紀に属する青磁・須恵器系陶器・瓷器系陶器、16世紀に属する内耳土鍋、ほかに漆器、鉄製品、砥石などが出土した。

まとめ

輸入品である青磁が出土しており、ある程度経済力のある人物の屋敷であると考えられる。無数の柱穴は、建物が長期間にわたり何度も建て替えられたことを示している。

材料となる木材の調達が不便な炭焼きが、なぜこの地で行なわれたのか明らかではないが、大量生産が難しいとことから、自家用の炭を生産したのではないかと推測される。炭や焼土が堆積している焼成遺構からは鉄製品が出土しており、炭窯で生産した炭を屋敷内で行なわれた鍛冶などに使用していた可能性もある。

図4　炭窯の崩落した天井部と煙道の断面

図3　炭窯跡（北から）

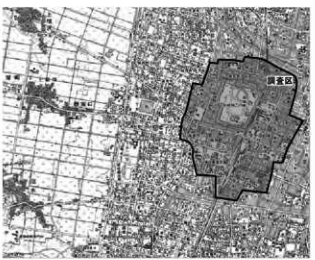
13～14世紀に属する遺物が比較的まとまっていることから、この期間が屋敷の主な存続期間と考えられる。15世紀に属する遺物は出土しておらず、この間屋敷は放棄されていた可能性がある。16世紀に属する内耳土鍋が、濠を埋め立てた土から出土しており、この時期に再び土地の利用がなされたと考えられる。近世の遺物は出土せず、その後は田畑と化したと推察される。

12世紀末から14世紀末まで、この地は長井氏の領地であり、調査で見つかった主要遺構群の存続期間とほぼ一致している。長井氏に関連する人物の屋敷であったとも考えられる。14世紀末頃には伊達氏の領土となり、16世紀後半に至ると、米沢がその本拠地となる。濠を埋め立てるなどの土地の再利用が行われたきっかけとなる出来事であろうか。

該期の屋敷が、ほぼ全面にわたり調査された例は少なく、貴重な調査事例と言える。中世の豪族の暮らしぶりを現代によみがえらせる重要な遺跡である。

山形城三の丸跡（やまがたじょうさんのまるあと）

遺跡番号　中世城館遺跡番号 201-002
調査次数　第６次
所在地　山形市旅籠町
北緯・東経　北緯 38 度 15 分 26 秒・東経 140 度 20 分 14 秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因　一般国道１１２号霞城改良事業
調査面積　470 ㎡
現地調査　平成 21 年５月 11 日～７月 30 日
調査担当者　佐竹弘嗣（調査主任）・伊藤純子
調査協力　山形市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別　集落跡・城館跡
時代　奈良時代・平安時代・中世・近世
遺構　竪穴住居跡・柱穴・土坑・堀跡・溝跡
遺物　須恵器・土師器・陶器・磁器・瓦・石製品・金属製品
（文化財認定箱数：44 箱）



調査の概要

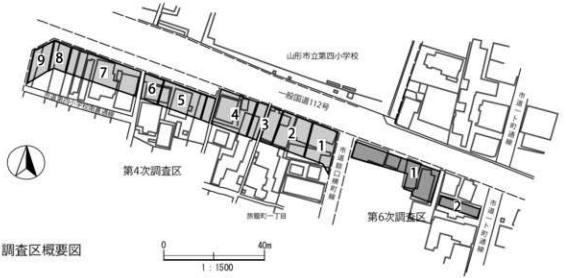
山形城三の丸跡の発掘調査は、国道 112 号の旅篭町一丁目付近の道路拡幅部分2,170 ㎡を対象とし、２次（平成 20 年度第４次調査 1,700 ㎡、平成 21 年度第６次調査 470 ㎡）に分けて実施した。

三の丸跡は、東西約 1.6 ㎞、南北約 1.8 ㎞に及ぶ広大な遺跡範囲を有するが、現在では、その全域が市街地化している。発掘調査部分は、三の丸の北東角に近い所に位置し、南東には鏡口（かすがい）、北西には小橋口（こばし）があったとされている。第６次調査区は、第４次調査区の東側にあたり、現存する絵図面などから調査区内を三の丸堀が横切っていることが予想されていた。そのため遺跡を覆う表土を重機械で掘削した後は、手作業により堀などの遺構が見えるまで少しずつ慎重に掘り進め、堀跡検出後は、土層断面を確認しながら各層ごとに全体を掘り下げていった。

遺　構

今回調査区を１区・２区の２つに分けて発掘調査をした。調査で見つかった遺構は、竪穴住居跡・柱穴・土坑・堀跡等で、調査区全体で約 120 基に及ぶ。また、陶磁器類を主体とする遺物が 44 箱出土している。以下では、各区から見つかった遺構、遺物について概説する。

１区は西側に柱穴・土坑などの遺構が多数見つかった。中央部付近では奈良・平安時代の竪穴住居跡が１棟見つかった。柱穴、土坑は近世の遺構と推定される。柱穴は集中して見つかり、その構成から掘立柱建物跡の存在が推定されるが、確定には至らなかった。竪穴住居跡は、一部撹乱が床面に達しているが、比較的良好な状態で検出され、覆土中から８世紀前半のものと推定される須恵器片が出土した。隣接するトレンチからも同時期の須恵器片が出土している。第４次調査の６区・７区でも奈良・



調査区概要図

平安時代と推定される竪穴住居跡が検出されており、この辺り一帯で古代の集落が営まれたと考えられる。東側には遺構が見られず、石を敷き詰めて整地したような跡が見られた。この部分は、２区で見つかった堀跡との位置関係から土塁があった部分と推定される。整地層は土塁廃絶時のものである可能性が考えられる。

２区では三の丸堀と推定される堀跡と土坑１基が見つかった。堀跡は幅約 8.5 m、深さは最大約 3.8 mで、調査区を南北に横切っている。西側が城内、東側が城外にあたり、東側岸に護岸のためと考えられる石組１～６が確認された。堀跡の土層断面の調査から１～ 18 層はシルト層で、初期の石組５からは 17 世紀前半の遺物が出土しており、17 世紀代には護岸がなされ、崩落のたびに石組を補修していたと思われる。19 ～ 25 層はその下に短期間に堆積したと考えられる砂層、26 ～ 32 層は砂層堆積以前の東側の崩落層である。33 層は最下の泥層で初期の堀底の堆積層である。

土坑は、径約 140 ㎝、深さ約 70 ㎝で、石組４の下で検出された。堀が機能していた段階で掘られたものと考えられる。

遺　物

今回の調査で出土した遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦・瓦質土器・かわらけ・石製品・金属製品・古銭・土製品など種類が豊富である。１区・２区とも柱穴・土坑等の遺構からの出土は少なく、１区では整地層からと粗掘時の出土が、２区では堀跡１～ 18 層の間で多く出土した。

種別ごとに見ていくと、土師器と須恵器は１区の竪穴住居跡周辺から多く出土した。須恵器は８世紀前半のものである。陶器や磁器は東側整地層から多く出土した。18 世紀末から 19 世紀代の江戸時代後期の物が多くを占め、当時国内磁器生産の中心だった肥前（佐賀県）産や愛知県瀬戸産の磁器、佐賀県唐津産の陶器等が出土した。その他、福島県の大堀相馬産の陶器も出土した。器種としては、碗、碗蓋、皿、猪口などの食膳具類が大半を占めるが、灯りをともすひょうそくやや陶磁器の焼成に使用された焼台なども多く出土した。

瓦では、黒瓦と赤瓦の両方が出土しているが、黒瓦の数が上回る。種類は、平瓦、丸瓦、巴文軒丸瓦、軒平瓦等が見られる。瓦質土器では火鉢、五徳等、かわらけでは皿、灯明皿が出土し、灯明皿には煤の付着が見られる。石製品には、石材採取時の工具痕が認められる風間産の砥石、石鉢、石臼、硯等があり、金属製品では、釘、火箸、煙管等が、古銭では銅銭と鉄銭が、土製品ではサイコロ、泥めんこ、ミニチュアの七輪等が見つかっている。

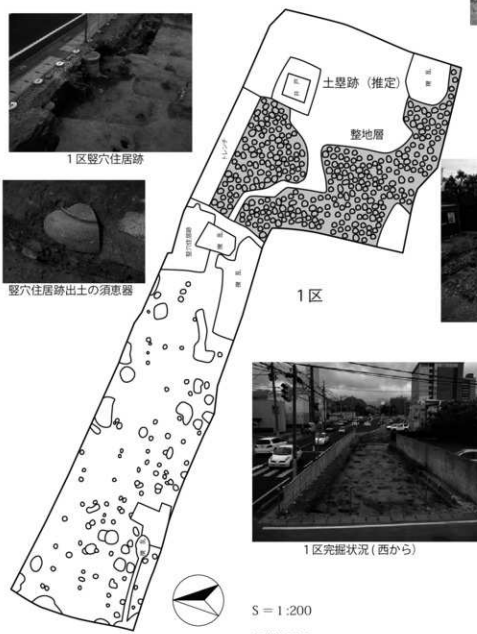
２区　堀跡調査状況（西から）

2区堀跡19層完掘状況（西から）

2区堀跡石組3

1区竪穴住居跡

竪穴住居跡出土の須恵器



1区完掘状況（東から）

1区完掘状況（西から）

S＝1:200

遺構配置図

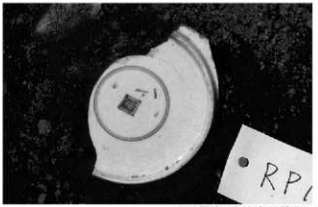
まとめ

今回の調査の中で最大の成果は、近世の堀跡の検出である。これまで江戸時代に作られた数種の山形城下絵図面により当該地における三の丸堀跡の大体の位置を知ることはできたが、正確な位置関係を把握することができなかった。しかし、今回の発掘調査で堀跡の存在とその規模を確認し、城下絵図に描かれた堀と遺構としての堀跡の位置を特定することができた。さらに調査を進める過程の中で、東側岸に護岸のための石組１～６が確認された。

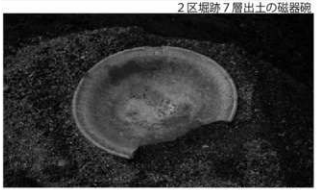
堀跡の土層断面の調査から４回の底面の変遷が推定された。堀は当初４m近い深さを持っていたが、ある時期河川の洪水等で短期間で砂に埋まり、その後は底が浅いまま堀として機能し、元の深さに復旧することなく廃絶となったことが考えられる。

堀跡からの出土遺物は、１～18層が中心で、18世紀末から19世紀代後半の陶磁器が多く確認された。遺物の中には煙管やひょうそく、泥めんこ、さいころ等の生活用品や子供の遊び道具が出土し、当時の生活の一端を知ることができる。

第４次・第６次発掘調査の結果見つかった遺構と遺物から、奈良・平安時代の集落の存在が明らかとなった。さらに堀跡の石組や埋土の状況、出土遺物等から、三の丸堀が作られた時期や埋められた経緯、その時代背景や生活の様子等多少ではあるが明らかにすることができた。これからさらに他地区での三の丸堀の解明が期待される。

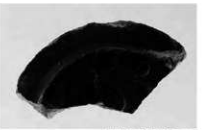

２区堀跡３層出土の磁器皿

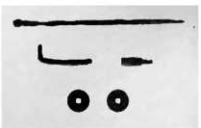
２区堀跡７層出土の磁器碗


２区堀跡22層出土の陶器皿

陶器　甕（唐津）

磁器　碗（肥前・瀬戸美濃）


連珠三巴文軒丸瓦


金属製品（上 火箸・中 煙管・下 古銭）

陶器　ひょうそく（灯火具）

泥めんこ　さいころ（玩具）

玉作（たまつくり）２遺跡

遺跡番号　平成 16 年度登録
所在地　鶴岡市大字中清水字玉作
北緯・東経　38 度 42 分 58 秒・139 度 45 分 30 秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
調査原因　日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設
調査面積　3,700 ㎡
現地調査　平成 21 年 5 月 11 日～ 8 月 7 日
調査担当者　福岡和彦（調査主任）・渡辺和行
調査協力　鶴岡市教育委員会、山形県教育庁庄内教育事務所
遺跡種別　集落跡
時代　古墳・平安時代
遺構　掘立柱建物跡、土坑、柱穴、湿地跡
遺物　土師器・須恵器・木製品・石製品・陶器・金属製品・銭貨
（文化財認定箱数：10 箱）

調査の概要

玉作２遺跡は、山形県教育委員会の試掘調査の結果、平成 16 年度に新規登録された遺跡である。遺跡の一部が日本海沿岸東北自動車道の本線部分にかかることから、平成 17 年度に玉作２遺跡の１次調査が実施された。

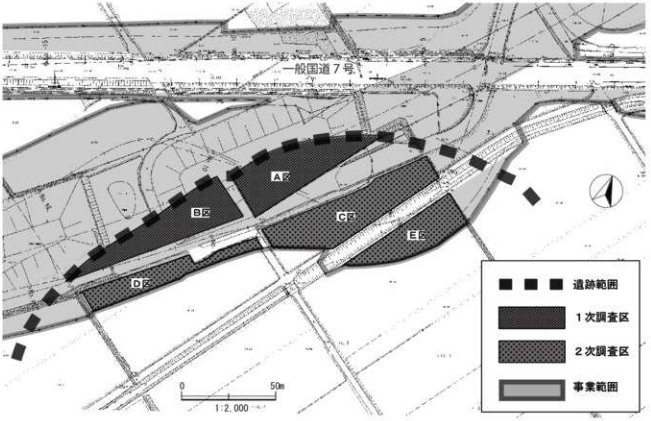
そして今回、地域活性化インターとして中清水地区に建設されることになった鶴岡西インターチェンジ（仮称）が玉作２遺跡の遺跡範囲にかかることがわかった。財団法人山形県埋蔵文化財センターは、国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所からの委託を受け、路線区内にかかる 3,700 ㎡について発掘調査を実施した。

玉作２遺跡は鶴岡市の南西部に位置し、ＪＲ羽前水沢駅から東へ約 2.5km の鶴岡市大字中清水字玉作に所在する。周辺の地目は水田で、一部は転用田となり畑作としてこの地方特産の「だだちゃ豆」などが栽培されている。遺跡は大山川やその支流を氾濫原とした微高地上にあり、標高は 15 ～ 16 ｍを測る。

遺構と遺物

検出した遺構には、掘立柱建物跡、土坑、柱穴、溝跡、湿地跡などがある。掘立柱建物跡はＤ区北側で１棟検出され、ＳＰ６・８・10 で構成される。柱間距離が縦横それぞれ２ｍを測る。農道側に延びていたものと推定されるが、西側が削平されているため、その規模はわからない。同じＤ区からは、平安時代の溝跡と考えられるＳＤ 12 も検出されている。Ｃ区とＥ区からは、大山川かその支流が氾濫した後にできたと考えられる湿地跡ＳＧ 86 が検出されている。

出土した遺物は整理箱にして 10 箱である。古墳時代と平安時代の土師器と須恵器が中心で、ほとんどが破片資料である。中近世の陶器や金属製品、木製品や銭貨なども出土している。未製品だが凝灰岩製の勾玉が１点と、勾玉を作る材料となったと考えられる鉄石英も数点出土した。



調査区概要図（S＝1：2,000）

まとめ

今回の調査では出土した遺物から、この遺跡は古墳時代の前期から中期と、奈良・平安時代にあたる８世紀末から９世紀初めにかけて営まれた集落の一部ではないかと考えられる。

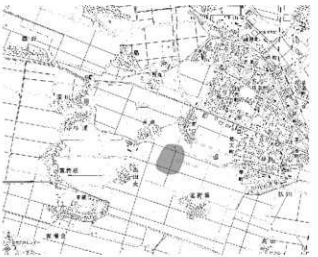
本遺跡が玉作というからには、近くに玉製品を製作するような工房跡があり、周辺の遺跡に供給していたとも考えられる。４年前に行われた玉作１遺跡の発掘調査では、玉製品の製作工程である荒割段階の碧玉が十数点と鉄石英などが出土した。しかし完成品や工房跡などは検出されなかった。今回の調査でも、勾玉の未製品と思われる石製品が１点と、玉製品の材料となる鉄石英も何点か出土したものの、玉製品を製作したような工房跡は検出されなかった。集落の中心や工房跡などは、遺構の多かったD区の東側か南側にあったのではないかと考えられる。E区北側の遺構検出面の少し上層から、火山灰と思われる試料が採取することができた。検出面の年代比定の判断材料とするため、テフラ分析も行った。その結果、庄内地方一円で検出されている十和田ａではなく、946年頃に噴火した白頭山苫小牧テラフであるという貴重な分析結果を得た。

調査区遠景（南西から）

C区　SG86湿地跡　完掘（東から）

南口（みなみぐち）A遺跡

遺跡番号　昭和61年度登録
所在地　東田川郡庄内町余目字南口
北緯・東経　38度50分26秒・139度53分23秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
調査原因　余目酒田道路改良事業
調査面積　6,500㎡
現地調査　平成21年5月13日～9月16日
調査担当者　氏家信行（調査主任）・渡部裕司
調査協力　庄内教育事務所・庄内町教育委員会
遺跡種別　集落跡
時　　代　奈良時代・平安時代・近世・近代
遺　　構　竪穴住居跡・土坑・溝跡・水路跡・柱穴等
遺　　物　土師器・須恵器・陶磁器・木製品・古銭　　（文化財認定箱数：16箱）



調査の概要

南口A遺跡は、庄内町の余目駅から南西約2kmの水田地帯に立地し、標高7mを測る。遺跡の北側を県道43号余目加茂線が走る。

遺跡は、昭和61年に県営圃場整備事業の県道43号余目加茂線の事業計画に際して、山形県教育委員会によって試掘調査が行われ、近世の遺跡として登録された。翌、62年の工事の際には県教育委員会によって立会調査が実施されている。

その後、余目酒田道路の建設計画により、平成17年に踏査による現地確認を行い、平成20年に重機を使用したトレンチによる試掘調査が行われ、溝状の遺構や水路跡が見つかり、奈良・平安時代の土器と近世の陶器が出土した。この試掘調査の結果から遺跡範囲内の工事区間においては発掘調査が必要と判断された。

調査は地域高規格道路新庄酒田線の一部を構成する「余目酒田道路」の改良事業に伴う緊急発掘調査として行った。

発掘調査は、重機を使用しての表土除去の後、人力による遺構検出と遺構精査を行い、これらと併行して、写真撮影と図面作成などの諸記録作業を行うという工程で進めた。

遺構と遺物

今回の調査では、南側を中心に奈良・平安時代と近世・近代の遺構や遺物が検出された。

古代では、竪穴建物跡、土坑、溝跡などの遺構が検出され、遺物は須恵器や土師器が出土している。

竪穴建物跡は上部が削平され、掘り方のみの検出で、遺物の出土も無いが、形態や規模、埋土の様子から古代のものと考えられる。土坑、溝跡、柱穴などは埋土や底面から須恵器、土師器、黒色土器が出土したが、大半が破片資料であった。器種には坏、蓋、有台碗、有台坏、壺、甕などがあるが、坏類が多く見られ、墨書土器も1点含

まれる。出土した土器の特徴から古代の集落の時期は9世紀中頃から後半を中心に営まれていたと推測される。

近世・近代では、土坑、溝跡、水路跡などがあり、陶磁器や瓦、木製品などが出土している。

土坑には、底面に木の板や細木を敷いたものがあり、建物の柱の沈み込みを防ぐために据えたとも考えられる。また、溝跡には橋が架けてあったと思われ、その部材と推測される木製品や杭が出土した。江戸時代中期頃の橋の構造の一端を知り得る資料である。

水路跡は2本見つかり、水の流れをよりスムーズにするために、直線状に造りかえたことが推定される。

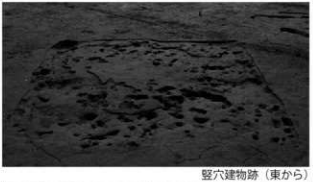
遺物は、木製品の他に16～19世紀代の陶器や磁器があり、在地の大宝寺焼のほかに愛知の瀬戸焼、佐賀県の肥前焼、長崎県の波佐見焼などもみられ、当時の庄内地方における陶磁器の流通・消費が窺える。また、鶴ヶ岡城で使用された赤瓦と同一の瓦も出土している。これは、鶴ヶ城が破却された後に城の瓦を再利用するため、この地域に運ばれたと考えられる。

まとめ

遺跡は、約1,200年前の奈良・平安時代と近世・近代の複合遺跡で、周辺には奈良・平安時代の遺跡と考えられている払田遺跡や南口B遺跡、そして、昭和49年の調査で9～11世紀代の須恵器や土師器が出土した梵天塚遺跡があることから、本遺跡との関連が窺われる。また、溝跡や水路跡が多く見つかったことから水を巧みに利用していたことが窺える。但し、明確な古代の竪穴住居跡や建物跡が確認されなかったことから集落の中心は、今回の調査区の東側にあると考えられる。

調査区全景（北から）

磁器の碗・皿



竪穴建物跡（東から）

土坑（北東から）

須恵器の坏・蓋

作野（さくの）遺跡

遺跡番号　N o.655
調査次数　第２次
所在地　村山市大字楯岡字笛田
北緯・東経　38 度 28 分 34 秒・140 度 24 分 13 秒
調査委託者　村山市
調査原因　徳内・シーボルトライン道路改良事業
調査面積　1,400 ㎡
現地調査　平成 21 年６月９日～７月 29 日
調査担当者　植松暁彦（調査主任）・後藤枝里子
調査協力　村山教育事務所・村山市教育委員会・県教育庁文化財保護推進課
遺跡種別　集落跡
時　　代　縄文時代・平安時代
遺　　構　竪穴住居跡・貯蔵穴跡・柱列・谷跡等
遺　　物　縄文土器・石器・土偶・石棒・石冠・須恵器等（文化財認定箱数：65 箱）

遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

作野遺跡は、大沢川左岸の扇状地扇頂部に位置し、地元周辺においては、古くから土器や石器が採集される地域として知られ、昭和 53 年 (1978 年) に正式に県の遺跡として『山形県遺跡地図』に登録された。

その後、山形大学が、宅地造成などに伴い、昭和 54 年 (1979 年) にトレンチによる発掘調査を実施し、竪穴住居跡２棟や多量の遺物を発見した。更に、県教育委員会において、昭和 57・58 年 (1982・1983 年) に県企業局の送水管工事に伴う面的調査（第１次調査）を行い、竪穴住居跡２棟と、多量の土器さらに石器を廃棄した「捨場」を発掘した。これら成果は、県内で類例が少ない縄文時代終末の縄文時代後期～晩期 (約 3,000 年前) の拠点的な集落跡として報告され注目された。

今回の調査は、国の補助事業でもある村山市の徳内・シーボルトライン道路改良事業に伴う発掘である。
調査区は、昭和 57・58 年の第１次調査の東側にほぼ並行する約 1,400 ㎡（長さ約 87.5 m × 幅約 16 m）で、遺跡範囲の最も東側の山際にあたり、標高が高く扇状地の最頂部付近にあたる。

調査では、調査区中央から南半部にかけて、全体に縄文時代後・晩期の貯蔵穴群が 10 数基、縄文時代最終末～弥生時代初頭の竪穴住居跡１棟などが発見された。
遺物では、これら遺構に伴い縄文時代各期の縄文土器や石器などが多量に出土し、土偶や石棒・石刀、石冠、など祭祀具も出土した。

特に縄文時代最終末～弥生時代初頭の竪穴住居跡は、県内でも数少なく、出土遺物からは他地域の影響も考えられる土器や石製品も出土し、本県内陸部の弥生文化の初現を考える上で貴重な資料が得られた。
なお、谷などから平安時代（約 1,050 年前）の須恵器や土師器など土器も若干出土した。

遺構と遺物

作野遺跡は、従来の調査から縄文時代後期末～晩期（約3,000年前）の県内でも有数の拠点的集落と知られる。今回の調査は、検出された遺構では、大きく縄文時代後期～晩期（約3,000年前）の貯蔵穴群と、縄文時代終末～弥生時代初頭（約2,700年前）の竪穴住居跡1棟が、二つの谷に挟まれた台地上で発見された。

貯蔵穴群は、小谷に挟まれた狭い台地上に、直径・深さが0.5～1mで、断面形が下膨れで袋状を呈し、十数基以上が検出された。全体には、A群：直径・深さが1m前後で下膨れする長大タイプ、B群：直径が0.5～1mだが深さが0.5m未満と浅く袋状タイプ、C群：直径が1m前後と大きいが深さが0.5～1mで、断面形が船底状タイプに大別される。出土土器からは、A群（縄文時代後期末葉）→B群（同晩期前葉）→C群（同晩期中～後葉）の時期変遷が推測される。

これらから当時の貯蔵穴は、時期毎に形態などを変えながらも、扇状地の扇頂部付近に集中して作られていたことが分かる。これは、木の実などを蓄えるのに温度変化の少ない地下の中でも、さらに湿気を防ぐために標高の高い山際の扇頂部を選地したからと考えられる。

これらの貯蔵穴の遺物では、特にA・B類の貯蔵穴の埋没中に完形の注口土器や深鉢が単独で置かれた状態で出土し、当時の祭祀などの可能性も推測される。これら土器には、関東地方などの文様との類似性もうかがわれ、当時の他地域との交流なども推測される。

一方、竪穴住居跡は、東日本でも数少ない弥生時代初頭のもので、直径3mほどで、住居の半分は調査区外にある。周溝の切り合いなどから新旧2時期の建替えが推定される。遺存状況の良い内側の新しい住居跡は、中央部に炭化物を多く含み、外縁に拳大の川原石が廻る地床炉や、主柱穴、二重の周溝などが確認された。

出土遺物は、住居埋土から縄文時代晩期後葉の系譜を引く工字文や変形工字文を付す深鉢、鉢、浅鉢、壺、高坏などがまとまって出土し、宮城県や青森県の土器形態と類似する土器群も出土した。他に、扁平な器形で胴部上半に波状隆帯を廻らす、東北地方では類例が少ない特殊な壺が出土し注目される。また、祭祀関連の北陸地方などに主体的な石冠、薄い平面三角形で両側縁に石鋸状の刻みを有する特異な石製品も出土した。

調査区近景（西から）

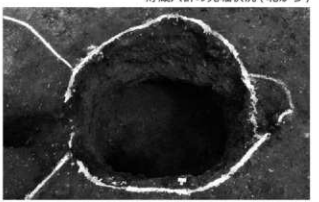
貯蔵穴跡の精査状況（北西から）

SK18貯蔵穴の注口土器出土状況（西から）

調査説明会（東から）

貯蔵穴群の完堀状況（北から）

ＳＫ 24 貯蔵穴の注口土器の出土状況（東から）



ＳＫ 18 貯蔵穴の完堀状況（南から）

ＳＫ 18 貯蔵穴の注口土器の出土状況（北から）

まとめ

作野遺跡は、遺跡範囲の規模やこれまでの調査内容から、縄文時代後～晩期（約 3,000 年前）の県内でも有数の拠点的集落と考えられる。今調査の調査では、従来の成果に加え遺構全体で、遺跡範囲の最も山際に、縄文時代後期末～晩期全般の各時期に、貯蔵穴群が集中して構築されることが特徴としてあげられる。これは、過去の同遺跡での調査と併せることで、県内では数少ない当時の集落構成を把握できることが成果の一つである。

具体的には、谷に挟まれた扇状地扇頂～扇央部にかけてのやや広い台地上に小型の竪穴住居群（昭和 54・58 年調査）が配置される。そして、その外側（東側）にあたる標高が最も高い扇状地最頂部付近の狭い台地上に、食糧保存のため繰り返し貯蔵穴を構築したようである。

なお、縄文時代最終末～弥生時代初頭（約 2,300 年前）には、竪穴住居跡も標高が高く谷に近い場所に建てられ、また住居の床面付近から祭祀具の石棒や石冠が出土し、一般住居とは異なる性格も推測される。

出土遺物では、貯蔵穴の埋没中に、縄文時代後期末（瘤付土器Ⅳ期）～晩期初頭（大洞Ｂ式期）の完形の注口土器や深鉢が単体で置かれた状態で出土し、祭祀などに関わる可能性も考えられる。更にこの中の一部には、関東地方とも類似性のある文様をもつ注口土器が出土し、当時の広域交流がうかがえる良好な資料が得られた。

他に今調査では、従来の調査で縄文時代後・晩期のみ出土していた同遺跡から、さらに次期の弥生時代にかかる土器群も竪穴住居跡などから数多く出土し、本県内陸部の最古段階の稲作文化の伝播や転換期を考える上で貴重な資料が得られ、大きな成果といえよう。

この土器群は、全体に在地の縄文時代晩期末（大洞Ａ’式期）の変形工字文の文様を主とするが、一部弥生時代初頭の青森県（砂沢式期）や宮城県（青木畑式期）など他地域の形態に類似するものもある。

特に扁平胴部で胴上半部に波状隆帯を廻らす細口壺は、口縁部や胴下部地文が在地の同晩期の系譜を引継ぐが、他の部位文様や形態は在地での系譜が追えず、他地域の福島・新潟県の影響も考えうる特殊壺で注目される。これは、当時の北と南の文化が日本海ルートで、庄内地方の生石２遺跡（弥生時代初頭）などを経由し、最上川を南下し、内陸で在地化し造形された産物と考えたい。

ＳＴ 40 竪穴住居跡の完堀状況（東から）

ＳＴ 40 竪穴住居跡の遺物出土状況（北東から）

ＳＴ 40 竪穴住居跡跡出土の蓋と高坏台（西から）

ＳＴ 40竪穴住居跡の波状隆帯壺の出土状況（西から）

波状隆帯を有する壺（写真上：上から、写真下：横から）

土偶（顔・手足が折損。胸と腹部に膨らみがある）

石冠・石鋸状石製品・三脚石製品

2．普及啓発等業務

(1) 研修等

①全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣

ア　総　会

期　日　平成21年6月11日～6月12日
会　場　北海道札幌市（ホテルライフォート札幌）
派遣職員　総務課長　鎌上勝則　　主任　原田英明

イ　役員会

期　日　平成21年5月13日～5月15日
会　場　愛知県名古屋市（ホテル　ルブラ王山）
派遣職員　専務理事　柏倉俊夫

期　日　平成21年11月26日～11月27日
会　場　群馬県利根郡みなかみ町（水上館）
派遣職員　調査課長　阿部明彦

ウ　研　修

研修名　全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修
期　日　平成21年12月9日～12月14日
研修地　中華人民共和国
派遣職員　総務課長　鎌上勝則　　整理課長　安部実

エ　ブロック活動

北海道・東北地区会議並びに同北海道・東北地区コンピュータ等研究委員会
期　日　平成21年10月15日～10月16日
会　場　山形県米沢市（伝国の杜）
派遣職員　専務理事　柏倉俊夫、事務局長　小笠原正道
総務課長　鎌上勝則、整理課長　安部実、調査課長　阿部明彦
専門調査研究員　須賀井新人、調査研究員　菅原哲文
調査研究員　髙桑登

②埋蔵文化財担当者専門研修への派遣

ア「建築遺構調査課程」

期　日　平成21年6月15日～6月19日
会　場　奈良文化財研究所
派遣職員　調査研究員　水戸部秀樹

イ「遺跡地図情報課程」

期　日　平成21年11月17日～11月20日
会　場　奈良文化財研究所
派遣職員　調査研究員　髙桑登

(2) 情報処理

①収蔵図書データベース

新収蔵図書　2,099冊のデータ入力実施（File Maker Pro使用）

(3) 普及啓発

①ホームページ

主な項目と内容は以下のとおりです。

調査遺跡一覧	発掘調査遺跡や整理作業中の遺跡の紹介
発掘調査速報	調査期間中、遺跡の状況を毎週更新して紹介
イベント情報	調査説明会、外部展示、各種イベント情報の提供
センター刊行物案内	調査報告書、広報誌などの刊行物の紹介
学校教育への協力	出前授業の紹介、埋蔵文化財を活かした授業のアイデアなどの提供、また、出前授業の状況なども随時掲載
埋文やまがた	広報誌「埋文やまがた」を紹介するとともに、これまでに刊行したバックナンバーも閲覧できます
センター概要	センターの紹介や、情報公開制度に基づき、センター情報の提供

②「山形県埋蔵文化財センター参観デー　やまがた埋文祭り2009」

センターを会場に、日ごろの業務の様子を再現したり、考古学の面白さを見学や体験を通して紹介した。

期　日　平成21年10月３日(土)～４日(日)

会　場　(財)山形県埋蔵文化財センター

内　容　報告会：発掘調査速報会（平成21年度発掘調査の概要と8遺跡の報告）

施設見学：企画展示「遺跡から見た天地人」

考古学体験：整理作業見学と体験、特別収蔵室見学

体験コーナー：アンギン編み、勾玉作り、弓矢飛ばし、ピィーちゃんクイズラリー

入場者　１,１５４人

発掘調査速報会

企画展示「遺跡から見た天地人」

土器の復元体験

アンギン編み

勾玉作り

注記体験

③外部展示

「発掘おきたま最前線の考古学-よみがる中世・近世の置賜像-」展

期　日　平成21年3月15日～9月24日（休館日　毎週月曜日及び国民の祝日）
会　場　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
内　容　近年発掘された置賜地方の中世～近世の遺跡の紹介
「米沢城跡」「飛泉寺跡遺跡」「大在家遺跡」「荒川２遺跡」等の発掘資料展示
（墨書かわらけ、陶磁器、漆器等の展示、調査に関わる写真パネル等展示）
入場者　6,016名

「縄文ヴィーナス誕生の地を探る－西ノ前遺跡－」展

期　日　平成21年5月2日～6月7日（休館日　毎週月曜日）
会　場　山形県立博物館第3展示室
内　容　西ノ前遺跡・水木田遺跡等から出土した土偶、縄文土器、石器の紹介
（縄文土器、土偶、石器等の展示、調査に関わる写真パネル等展示）
ギャラリートーク（6日・13日・20日）
入場者　6,307名

「足元には文化財－よみがえる鶴岡市の歴史－」展

期　日　平成21年7月23日～9月27日（休館日　毎週月曜日）
会　場　鶴岡市立図書館2階展示コーナー
内　容　鶴岡市内で発掘調査された縄文時代から中・近世の遺跡を紹介
（縄文土器、石器、土師器、須恵器と調査に関わる写真パネル等を展示）
入場者　1,107名

「遺跡が語る天地人」展

期　日　平成21年9月9日～9月23日
会　場　山形空港２階特設ギャラリー
内　容　亀ヶ崎城跡・鶴ヶ岡城跡・藤島城跡等から発見された出土品を紹介
（陶磁器、木製品、金属製品等の展示、調査に関わる写真パネル等展示）
入場者　103名

「発掘された庄内の歴史－奈良・平安時代編－」展

期　日　平成21年11月6日～11月19日
会　場　庄内空港ビル3階多目的ギャラリー
内　容　酒田地区（上高田遺跡・泉森窯跡・泉森南窯跡）と鶴岡地区（万治ヶ沢遺跡・山田遺跡）の出土品を展示
（土師器、須恵器、瓦、木簡等の展示、調査に関わる写真パネル等展示）
入場者　109名

「発掘おきたま最前線の考古学－解明される置賜の歴史像－」展

期　日　平成22年3月24日～9月24日（休館日　毎週月曜日及び国民の祝日）
会　場　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
内　容　近年発掘された置賜地方の縄文～古代の遺跡の紹介
「下叶水遺跡」「上大作裏遺跡」「加藤屋敷遺跡」の発掘資料展示
（縄文土器、石製品、土製品、弥生土器、須恵器、土師器等の展示、調査に関わる写真パネル等展示）

④学校への協力

No.	派遣校・依頼者名	派遣職員名	実　施　日	実　施　内　容
1	米沢市興譲小学校 校長　板垣　正明	須賀井新人　佐々木茂 三浦勝美	2009年4月14日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 弓矢体験・クルミ割り・石器で野菜切り
2	最上町富沢小学校 校長　阿部　敏彦	齊藤主税　高橋一彦	2009年4月15日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし
3	寒河江市寒河江小学校 校長　松村　洋一	鎌上勝則　佐々木茂 水戸部秀樹　今　正幸 濱田　純	2009年4月16日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験・クルミ割り
4	上山市東小学校 校長　池野　仁	佐々木茂　庄司隆志	2009年4月17日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・石器で野菜切り
5	村山市大倉小学校 校長　寒河江　秀壽	佐々木茂　武田伸一 五十嵐萌	2009年4月22日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
6	村山市楯岡小学校 校長　大類　豊太郎	佐々木茂　武田伸一 五十嵐萌	2009年4月22日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験・石器で野菜切り・縄文服体験
7	村山市袖崎小学校 校長　古瀬　節子	佐々木茂　植松暁彦	2009年4月23日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・石器で野菜切り
8	村山市富並小学校 校長　菊地　宏哉	佐々木茂　植松暁彦	2009年4月23日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験
9	山形市出羽小学校 校長　芳賀　正樹	佐々木茂　福岡和彦 菅原哲文　後藤枝里子	2009年4月24日	7年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験・クルミ割り・石器で野菜切り
10	鮭川村鮭川小学校 校長　黒坂　玲子	須賀井新人　水戸部秀樹	2009年4月27日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
11	河北町谷地南部小学校 校長　秋葉　義昭	佐々木茂　植松暁彦	2009年4月30日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
12	山形市第二小学校 校長　江口　照芳	佐竹弘嗣　氏家信行 佐々木茂　松田聡子	2009年4月28日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験
13	中山町豊田小学校 校長　田中　克彦	伊藤邦弘　佐々木茂	2009年5月7日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験
14	東根市神町小学校 校長　笠原　仁	伊藤邦弘　佐竹弘嗣 佐々木茂　菅原哲文 水戸部秀樹　安部将平	2009年5月8日	６年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験・石器で野菜切り
15	大石田町大石田小学校 校長　工藤　俊夫	佐々木茂　松田聡子	2009年5月12日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 縄文服体験・勾玉作り
16	舟形町堀内小学校 校長　安藤子　誠	齊藤主税　山田　渚	2009年5月13日	５・６年総合学習 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 勾玉作り
17	酒田市宮野浦小学校 校長　大川　英一	佐々木茂　吉田　満 高木　茜	2009年5月14日	６年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
18	三川町押切小学校 校長　田中　利幸	佐々木茂　吉田　満 高木　茜	2009年5月14日	６年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験・クルミ割り・石器で野菜切り
19	新庄市萩野小学校 校長　齋藤　宏	髙桑　登　五十嵐萌	2009年5月19日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験・石器で野菜切り
20	庄内町余目第一小学校 校長　田中　泰	小林圭一　齋藤　健	2009年5月21日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし
21	酒田市松陵小学校 校長　田中　利明	佐々木茂　山木　巧 高木　茜	2009年5月22日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 縄文クッキー作り・弓矢体験・縄文服体験
22	舟形町長沢小学校 校長　渡辺　正	齊藤主税　松田聡子	2009年6月1日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
23	山辺町山辺小学校 校長　熊谷　宗英	佐々木茂　菅原哲文 吉田　満　五十嵐萌	2009年6月4日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験・縄文服体験
24	山形市桜田小学校 校長　柳崎　憲一	鈴木良仁　佐々木茂 水戸部秀樹　山木　巧	2009年6月5日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験・石器で野菜切り

No.	派遣校・依頼者名	派遣職員名	実　施　日	実　施　内　容
25	山形市第八小学校 校長　阿部　慶子	佐々木茂	2009年6月9日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう
26	寒河江市醍醐小学校 校長　安孫子　一彦	高桑　登　五十嵐萌	2009年6月10日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験・クルミ割り
27	米沢市六郷小学校 校長　會田　以久子	小林圭一　佐々木茂 松田聡子	2009年6月12日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
28	米沢市松川小学校 校長　辻　雅人	小林圭一　佐々木茂 松田聡子	2009年6月12日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
29	酒田市十坂小学校 校長　小松　恒彦	佐々木茂　菅原哲文 五十嵐萌　松田聡子	2009年6月15日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 縄文クッキー作り・火起こし・弓矢体験
30	山形市山寺小学校 校長　村山　良光	鈴木良仁　高木　茜	2009年6月16日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・石器で野菜切り
31	寒河江市南部小学校 校長　佐藤　藤彰	高桑弘美　吉田　満 五十嵐萌	2009年6月17日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
32	鮭川村大豊小学校 校長　須藤　信一	佐々木茂　松田聡子	2009年6月18日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
33	尾花沢市常盤小学校 校長　阿相　利幸	小林圭一　五十嵐萌	2009年6月24日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・弓体験
34	鶴岡市長沼小学校 校長　遠藤　敬	小林圭一　佐々木茂	2009年7月6日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし
35	米沢市南原小学校 校長　高橋　美香	佐々木茂　高桑　登 五十嵐萌	2009年7月7日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験
36	上山市上山小学校 校長　大沼　修一	鈴木良仁　齋藤　健 庄司隆志　高木　茜	2009年7月15日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験
37	西川町睦合小学校 校長　武田　幸一	伊藤邦弘　五十嵐萌	2009年7月16日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験・石器で野菜切り
38	朝日町大谷小学校 校長　渡邉　満	佐々木茂　須賀井明子	2009年7月17日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 縄文クッキー作り・弓矢体験
39	東根市小田島小学校 校長　森谷　二郎	武田伸一　五十嵐萌 安部将平	2009年7月21日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験
40	西川町西山小学校 校長　芳賀　彰	高橋一彦　伊藤純子	2009年9月10日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験・石器で野菜切り
41	寒河江市田代小学校 校長　高橋　説子	武田伸一　今　正幸	2009年9月17日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験・縄文服体験
42	河北町谷地中部小学校 校長　横山　稔	佐々木茂　福岡和彦 庄司隆志　五十嵐萌	2009年10月13日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器・石器に触れてみよう 火おこし・弓矢体験

土器や石器の説明

火起し体験

弓矢体験

⑤来所者

ア．見学・研修等

No.	来所者	年月日	人数	内容
1	上山市立南小学校　6学年	2009年5月18日	143	施設見学
2	山形県立山形聾学校　6学年	2009年5月21日	5	施設見学と体験学習
3	山形市立蔵王第一中学校　2学年	2009年5月26日～ 5月28日（3日間）	4	職場体験
4	山形県私立中学・高等学校教頭会	2009年5月29日	16	施設見学
5	三川町公民館　町民講座「歴史探訪」	2009年6月9日	15	施設見学
6	上山市学研　社会科部会	2009年6月10日	20	施設見学と体験学習
7	県立霞城学園高等学校　生涯学習講座	2009年6月23日	10	施設見学
8	研究者	2009年6月25日	1	施設見学
9	庄内町立余目第一小学校　6学年	2009年6月25日	49	発掘体験（南口A遺跡）
10	山形県立上山高等養護学校　1学年	2009年6月22日～ 7月3日（10日間）	7	職場体験
11	馳上遺跡作業員	2009年6月30日	1	施設見学
12	山形県立米沢女子短期大学	2009年7月2日	72	発掘体験（馳上遺跡）
13	上山市立南中学校 上山市立北中学校　2学年	2009年7月8日～ 7月14日（5日間）	4	職場体験
14	鶴岡市立上郷小学校　4・5学年	2009年7月15日	49	発掘体験（玉作２遺跡）
15	寒河江市「第39回寒河江市少年少女郷土史講座」 受講児童	2009年7月31日	10	施設見学と体験学習（勾玉作り）
16	中山町「歴史体験教室」受講児童	2009年8月5日	23	施設見学と体験学習（勾玉作り・アンギン編み）
17	山形県立鶴岡北高等学校	2009年8月7日	24	発掘体験（南口A遺跡）
18	上山ライオンズクラブ	2009年8月11日	3	施設見学
19	埼玉県	2009年8月12日	1	施設見学
20	京都大学大学院人間・環境学研究科	2009年8月17日～ 8月21日（5日間）	1	インターンシップ
21	庄内町教育委員会　文化財保護審議会委員	2009年8月26日	10	施設見学
22	米沢市立窪田小学校　6学年	2009年9月9日	71	発掘体験（鎌倉上遺跡）
23	川西町文化財保護調査委員会	2009年9月11日	10	施設見学
24	大阪府老人大学　考古学修了生	2009年10月1日	12	施設見学
25	東北芸術工科大学　歴史遺産学科　1年	2009年10月22日	30	施設見学
26	仙台市富沢遺跡保存館　市民文化財研究員	2009年11月4日	10	施設見学
27	尾花沢市教育委員会	2009年11月30日	9	施設見学
28	天童市西沼田遺跡公園職員	2010年3月18日	2	施設見学

イ．図書閲覧

No.	来所者	期　日	閲覧目的
1	東北芸術工科大学大学院生	2009年5月１日、10月14日、15日、29日	修士論文研究
2	東北芸術工科大学大学院生	2009年5月18日～12月16日の間に18日間	卒業論文のため
3	東北芸術工科大学学生	2009年5月19日	卒業論文のため
4	東北芸術工科大学	2009年5月25日、12月22日	資料調査
5	福島県伊達市立富成小学校教諭	2009年6月15日	資料調査
6	宮城岩沼市教育員会	2009年8月26日	資料調査
7	東北芸術工科大学学生	2009年10月29日、11月6日	卒業論文のため
8	東北芸術工科大学学生	2009年10月29日、30日、11月6日、13日、12月3日	卒業論文のため
9	東北芸術工科大学学生	2009年12月3日	卒業論文のため
10	村山市袖崎まちづくり協議会歴史部会	2010年1月12日	研究のため
11	山辺町役場	2010年2月10日	論文作成のため
12	仙台市富沢遺跡保存館	2010年3月23日	調査・研究のため
13	明治大学文学部	2010年3月23日	調査・研究のため

ウ．資料調査

No.	来所者	期日	対象遺跡
1	東北芸術工科大学大学院生	2009年4月14日～15日、23日、5月12日～13日	泉森窯案、三条遺跡、高瀬山（SA）遺跡他
2	山形大学理学部	2009年4月15日	押出遺跡
3	東北芸術工科大学大学生	2009年5月20日	弓張平遺跡、月山沢遺跡
4	東京大学総合博物館	2009年5月25日	押出遺跡、川内袋遺跡
5	岡山理科大学総合情報学部	2009年6月1日～2日	吹浦遺跡
6	仙台市教育委員会文化財課	2009年5月18日	百刈田遺跡
7	北海道大学	2009年5月28日	百刈田遺跡
8	東北芸術工科大学大学院生	2009年5月29日	庚塚遺跡、荒川2遺跡
9	山形市立第四中学校	2009年6月8日	熊ノ前遺跡
10	(財)とちぎ生涯学習文化財団	2009年7月15日	上高田遺跡
11	東北芸術工科大学学生	2009年7月17日	大堀遺跡
12	東北大学大学院文学研究科	2009年7月21日	川内袋遺跡
13	東北芸術工科大学大学院生	2009年7月24日、10月8日、11月4日	加藤屋敷遺跡、高瀬山（SA）遺跡
14	富山市教育委員会生涯学習課	2009年9月4日	俵田遺跡、横代遺跡、上高田遺跡他
15	東北芸術工科大学	2009年9月9日	熊山遺跡
16	東海大学文学部歴史学科考古学専攻	2009年9月14日	高瀬山（1期）遺跡、吹浦遺跡
17	元岩手県立博物館職員	2009年10月19日	西ノ前遺跡、蕨台遺跡、岡ノ台遺跡他
18	東北大学大学院文学研究科 ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所	2009年11月10日	お仲間林遺跡、太郎水野2遺跡
19	東北芸術工科大学　北野博司、歴史遺産学科	2009年11月13日、17日、18日、25日	助作遺跡
20	東北芸術工科大学大学院生	2009年12月2日、9日	山海窯跡
21	寒河江市教育委員会	2009年12月10日	高瀬山遺跡出土遺物検討
22	福島大学行政政策学類	2009年12月24日～25日	向河原遺跡、渋江遺跡
23	村山市袖崎まちづくり協議会歴史部会	2010年1月12日	落合遺跡
24	寒河江市	2010年1月18日	展示遺跡
25	栃木県立博物館	2010年1月27日	川口遺跡、宮の前遺跡、渡戸遺跡他
26	長井市教育委員会	2010年2月17日	長井市出土遺物検討
27	明治大学大学院、古代学教育研究センター	2010年3月15日、17日～18日	今塚遺跡、生石2遺跡、三条遺跡
28	山形大学	2010年3月24日	堤屋敷遺跡・渋江遺跡

⑥職員派遣等

No.	派遣職員名	依頼者名	派遣場所	年月日	内容
1	小林圭一 菅原哲文 水戸部秀樹	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 館長　佐藤鎭雄	東北芸術工科大学 文化財保存修復センター	2009年4月22日	平成21年度企画展第1回展示委員会
2	菅原哲文	山形県立博物館 館長　佐藤広明	山形県立博物館	2009年5月23日	考古学講座「縄文ヴィーナスの古里」講師
3	小林圭一 菅原哲文 水戸部秀樹	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 館長　佐藤鎭雄	東北芸術工科大学 文化財保存修復センター	2009年5月27日	平成21年度企画展第2回展示委員会
4	佐々木茂 高木　茜	東北芸術工科大学 こども芸術大学	東北芸術工科大学 文化財保存修復センター	2009年6月17日	共同企画展「山形の1000年前」の体験講座の講師
5	小林圭一 菅原哲文 水戸部秀樹	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 館長　佐藤鎭雄	東北芸術工科大学 文化財保存修復センター	2009年6月23日	平成21年度企画展第３回展示委員会
6	鈴木良仁	山形市立第一中学校 校長　海老名陽一	山形市立第一中学校	2009年6月26日	研究授業「奈良・平安時代の税と農民のくらし」の講師
7	黒坂雅人	山形県立霞城学園高等学校 校長　冨士直志	山形県立霞城学園高等学校	2009年7月14日	山形ふるさと探訪の講師
8	阿部明彦	遊佐町教育委員会 教育長　那須栄一	歴史民俗学習館	2009年7月17日	小山崎遺跡第16次発掘調査に伴う調査指導委員会
9	鈴木良仁	上山市教育委員会 教育長　木村康二	上山市 市民会館第２中会議室	2009年7月17日	上山市文化財保護審議会
10	安部　寅	生涯学習館「里仁館」 館長　植松芳平	生涯学習館「里仁館」	2009年9月4日	「考古学・埋もれた世界に触れる」 考古学ことはじめ－考古学の基礎を学ぶ－の講師
11	佐々木茂	大河ドラマ「天地人」 米沢推進協議会 会長　安部三十郎	米沢市上杉博物館	2009年9月10日	「天地人博2009」亀ヶ崎城跡展示品の返却確認作業
12	高桑弘美	生涯学習館「里仁館」 館長　植松芳平	生涯学習館「里仁館」	2009年10月2日	「考古学・埋もれた世界に触れる」 古代の窯跡－山間に眠っていた山海窯跡群－の講師
13	佐々木茂 高桑登	山形市立東小学校 校長　柴田康雄	山形市立東小学校	2009年10月26日 2009年11月2日	学習発表会の学習アドバイザー
14	黒坂雅人 吉田　満 五十嵐萌	山辺町立作谷沢小中学校 校長　西村仁美	山辺町立作谷沢小中学校	2009年11月1日	文化祭ものづくり講座の講師
15	黒坂雅人	生涯学習館「里仁館」 館長　植松芳平	生涯学習館「里仁館」	2009年11月6日	「考古学・埋もれた世界に触れる」 縄文文化の交差点－遊佐町吹浦遺跡－の講師
16	水戸部秀樹	最上町　立小路集落 区長　笠原勝義	立小路集会所	2009年11月8日	歴史講演会講師
17	水戸部秀樹	山形県立博物館 館長　佐藤広明	山形県立博物館	2009年12月12日	考古学講座「人が入れる柱穴・掘立柱建物」の講師
18	水戸部秀樹	東北芸術工科大学 学長　松本哲男	東北芸術工科大学	2010年1月8日	考古資料の分析法の講師
19	黒坂雅人	山形県立博物館 館長　佐藤広明	山形県立博物館	2010年1月16日	考古学講座「様々な石組と石配」の講師
20	高桑登	最上義光歴史館 館長　布施等一	山形市中央公民館 第３研修室	2010年2月3日	歴史講座「亀ヶ崎城跡と米沢城」の講師
21	高桑弘美 水戸部秀樹 山木　巧	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 館長　佐藤鎭雄	山形県立うきたむ 風土記の丘考古資料館	2010年2月21日	2009山形の考古資料検討会の講師
22	伊藤邦弘	中山町教育委員会 教育長　石川浩司	中山町中央公民館	2010年3月23日	中山町文化財保護審議会への派遣

⑦調査説明会

	市町村	遺跡名	開催日	遺跡種別	参加者数
1	山形町	山形城三の丸（春日町）	6月19日	城館跡	11
2	山形町	山形城三の丸（旅籠町）	7月18日	城館跡	70
3	村山市	作野遺跡	7月26日	集落跡	83
4	庄内町	南口Ａ遺跡	9月11日	集落跡	68
5	米沢市	鎌倉上遺跡	10月8日	集落跡	23
6	米沢市	馳上遺跡・西谷地地区	10月31日	集落跡	45

⑧資料貸出

No.	貸出先	借用目的	貸出期間	資料名	数量
1	うきたむ風土記の丘 考古資料館	常設展示への展示	2009年4月1日～ 2010年3月31日	西町田下遺跡ほか出土遺物	45
2	山形市立第一中学校	1学年社会科の学習	2009年4月20日～ 2009年5月1日	熊ノ前遺跡、小林遺跡出土遺物 山形市周辺の遺跡分布パネル体験用石器	15
3	山形県立博物館	特別展「山寺－歴史と祈り－」 への展示	2009年5月13日～ 2009年11月12日	中地蔵遺跡出土遺物	12
4	八戸市博物館	「土偶展-東北の北と南」への 展示	2009年5月26日～ 2009年8月7日	水木田遺跡、原の内A遺跡、西海渕遺跡、 中村A遺跡、水上遺跡出土土偶	14
5	仙台市富沢遺跡保存館	特別展「漆の考古学」への展示	2009年7月1日～ 2009年9月30日	高瀬山遺跡（HO地区）	3
6	岡山理科大学総合情報 学部生物地球システム 学科	シジミ類の貝殻成長線分析 および安定同位体比分析のため	2009年6月1日～ 2009年10月20日	吹浦遺跡出土シジミ	14
7	仙台市富沢遺跡保存館 縄文の森広場	ミニ企画展「山形の縄文ムラ －鮭川村小屈遺跡－」への展示	2009年6月25日～ 2009年9月25日	小反遺跡出土遺物	486
8	天童市西沼田遺跡公園	ミニ企画展「天童の歴史Ⅱ 縄文時代後期」への展示	2009年7月24日～ 2009年9月4日	渡戸遺跡、砂子田遺跡出土遺物	74
9	長井市教育委員会 古代の丘資料館"	企画展示「土偶展」への展示	2009年8月3日～ 2009年11月12日	熊ノ前遺跡、水木田遺跡、水上遺跡、思 い川A遺跡、作野遺跡ほか出土遺物	143
10	うきたむ風土記の丘 考古資料館	企画展示「じょうもん天地人」 への展示	2009年8月11日～ 2009年12月15日	吹浦遺跡（1・3・4次）、高瀬山遺跡（1 期）、小林遺跡ほか出土遺物	64
11	寒河江市教育委員会	「寒河江市埋蔵文化財フェア」 への展示	2009年8月14日～ 2009年8月24日	西海渕遺跡（1次）、宮の前遺跡（2次）、 高瀬山遺跡（1期）ほか遺跡出土遺物	111
12	天童市西沼田遺跡公園	ミニ企画展「天童の歴史Ⅲ 縄文時代晩期」への展示	2010年1月22日～ 2010年2月24日	砂子田遺跡出土遺物	51

⑨資料掲載許可

No.	貸出先	借用目的	資料名	数量
1	中央大学通信教育部	「歴史（日本史）」への掲載	東北地方の縄文晩期～弥生前期の土器の写 真写真	1
2	埋蔵文化財写真技術研究会	「埋文写真研究Vol.20」への掲載	太郎水野２遺跡出土石器集合写真	1
3	寒河江市教育委員会	「寒河江市埋蔵文化財フェア」への展示	高瀬山遺跡（1期）出土深鉢、宮の前遺跡 （2次）出土人面付土器の写真	2
4	全国史跡整備市町村協議会	パンフレット「史跡の買上げと整備・活用」 への掲載	出前授業（天童市干布小学校）の写真	1
5	山形県立うきたむ風土記の丘 考古資料館	企画展図録「じょうもん天地人」への掲載	高瀬山遺跡（1期）、吹浦遺跡、小林遺跡ほ か図版写真	33
6	山形市教育委員会	山形市文化財成果展への展示	山形城三の丸跡（6次）の発掘調査写真、遺 構図面	8
7	鶴岡市総務課	歴史読本への掲載	畑田遺跡、玉作1遺跡、興屋川原遺跡、南田 遺跡ほかの巻頭及び図版写真	13
8	國學院大學伝統リサーチセン ター	企画展「まつりのそなえ-御食たてまつるも の-」への掲載	山居遺跡巻頭写真	1
9	名古屋大学文学部研究科	学術書の刊行のため	泉森窯跡図版写真	1
10	郷土出版社	「定本・直江兼続」への掲載	亀ヶ崎城跡木簡写真	2
11	有限会社キュ	中学生のためにエネルギー読本 「チャレンジ！原子ワールド」への掲載	東北地方の縄文晩期～弥生前期の土器の写 真	1
12	西村山郡朝日町役場	「朝日町読本」への掲載	八ツ目久保遺跡図版写真	2
13	村山市袖崎まちづくり協議会	「改訂増補版　袖崎の郷土史」への掲載	赤石遺跡図版写真	2
14	文化庁文化財記念物課	「発掘調査のてびき　集落遺跡発掘編」及び 「発掘調査のてびき　整理・報告書編」への 掲載	高瀬山遺跡（HO）、小反遺跡の図版写真	2
15	村山市袖崎まちづくり協議会	「改訂増補版　袖崎の郷土史」への掲載	赤石遺跡図版写真	2
16	寒河江市教育委員会	慈恩寺シンポジウム基調講演資料への掲載	上の寺遺跡（1・2次）図版写真	12
17	米沢上杉文化振興事業団	図説「直江兼続　人と時代」への掲載	亀ヶ崎城跡（4・5次）巻頭及び図版写真	7

⑩出版物

ア．普及・業務報告

書　名	発行年月日
埋文やまがた　第43号	2009年11月30日
埋文やまがた　第44号	2010年1月30日

イ．調査説明会資料

書　名	発行年月日
山形城三の丸跡7次（春日町）発掘調査説明会資料	2009年6月19日
山形城三の丸跡6次（旅篭町）発掘調査説明会資料	2009年7月18日
作野遺跡発掘調査説明会資料	2009年7月26日
南口A遺跡発掘調査説明会資料	2009年9月11日
鎌倉上発掘調査説明会資料	2009年10月8日
馳上遺跡・西谷地地区発掘調査説明会資料	2009年10月31日

ウ．調査報告書

シリーズNo.	書　名	発行年月日
182	下大曽根遺跡発掘調査報告書	2010年 3月31日
183	上の寺遺跡第1・2次発掘調査報告書	〃
184	百刈田遺跡第1～4次発掘調査報告書	〃
185	槍原遺跡第2・3次発掘調査報告書	〃
186	天王遺跡第1・2次発掘調査報告書	〃
187	興屋川原第1～4次発掘調査報告書	〃
188	岩崎遺跡第1・2次発掘調査報告書	〃
189	クグノ遺跡発掘調査報告書	〃
190	山形城三の丸跡第4・6次発掘調査報告書	〃
191	南口A遺跡発掘調査報告書	〃

エ．発掘調査報告会資料

資　料　名	発行年月日
平成21年度発掘調査速報会	2009年10月3・4日

（4）比較検討

山形盆地における古墳時代前期土師器甕の計測

－容量と形態の特徴について－

渡部裕司

1. はじめに

近年、山形盆地では東北中央自動車道建設を始め、大型の公共事業などに伴う緊急発掘調査が相次いで行われている。これらの調査では、縄文時代から近世に至る多数の遺跡が発見されており、その出土遺物数は膨大な量となっている。山形市の須川河川改修事業に伴い2002年からの4次に亘る調査が行われた川前2遺跡は、古墳時代前期と古代の集落跡が発見されており、現在報告書刊行に向け整理作業が進んでいる。それを踏まえ本稿では、一連の緊急発掘調査によってその様相が明らかとなっている、山形盆地の古墳時代前期の資料を分析・調査研究を行い、川前2遺跡の様相を知るための比較資料として提示したい。

文字資料のないこの時代にとって遺跡から出土する遺物の中で大多数を占める土師器は、当時の社会を知る貴重な存在である。土師器にはいくつもの器種があり、それぞれ多様な形態の変化が見られる。この変化は、単に作り手の相違ということだけではなく、当時の社会動態を反映していると考えられる。そして、出土する古墳時代土師器の編年的位置づけを明らかにし、そこから当時の山形盆地の社会的な変化や文化を捉えたい。土器編年を構築するためには、形式分類→型式の認定→様式の設定という段階を経て、それぞれの形式・型式の出現や消長、組列を検証することが求められる（寺沢1986）。本稿では、土師器における様々な器種の中から甕形土器を選び、中でも甕形土器における「大きさ」というものに着目し、各部位を計測・グラフ化する。甕形土器は煮炊きなどの調理や或いは液体等の貯蔵に用いられた道具と推定されるが、これらの用途にとって、大きさは最も重要で様々な影響を与える要素といえる。その特徴を捉えることを主な目的とする。

2. 甕形土器について

まずはじめに甕形土器（以下「形土器」は省略する）の定義についてであるが、甕と鉢・壺といった器種を分ける要素として最も重要なものは、頸部のくびれ度である。それに加え、器壁の厚さ、器面調整、口縁部、底部などの形態的特徴を勘案し対象とする資料を選び出した。次に、甕の大きさを知るための属性として、口縁部径、器高、胴部径、底部径、容量などがある。本稿ではこのうち容量という属性に注目し、山形盆地で出土した古墳時代前期の甕の容量を計測した。加えて、甕の頸部径・器高・胴部最大径も併せて計測し、それぞれ体部形態における属性を表す数値を求めグラフ化した。甕の容量及び体部の計測値という基礎資料の提示とそれを基に若干の考察を行いたいと思う。

3. 対象とする地域と遺跡

山形盆地は、東に蔵王連峰などの奥羽山脈、西には霊峰月山を仰ぎ、盆地北半を縦貫する最上川を本流としそこに注ぐ大小の河川によって形成された東西約10㎞南北約40㎞の南北に長い馬蹄形を呈する盆地である。現在の行政区画では、県庁所在地山形市や天童市など6市4町が含まれる。

盆地内では前期から後期まで約27地点で古墳が確認されており、さらに多数の集落遺跡が発見されている。本稿では、このうち古墳時代前期に属する14の集落遺跡を対象とした。いずれの遺跡も盆地内の扇状地の扇端部や自然堤防上に立地している。対象とする資料は報告書掲載の甕195個体であり、容量を計測するため完形品（図上復元含む）或いは底部等一部欠損しているが全体が復元可能なものを選び出した。具体的には、欠損している個体でも図上で9割程度復元できるものは計測の対象とした。また、器高に関しても底部もしくは口縁部が欠損している場合は、推定値として掲載した。

対象遺跡

下槇遺跡　　熊野台遺跡　　板橋２遺跡
高瀬山遺跡 (HO 地区)　　三軒屋物見台遺跡
高擶南遺跡　　菖蒲江１遺跡　　渋江遺跡
馬洗場 B 遺跡　　藤治屋敷遺跡　　長表遺跡
今塚遺跡　　梅野木前１遺跡　　双葉町遺跡
山形西高敷地内遺跡　　萩原遺跡

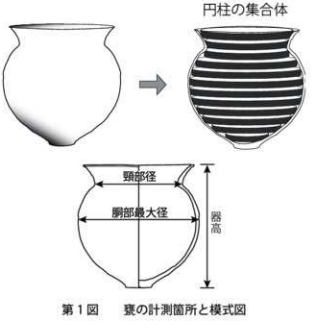
4. 容量測定の方法

甕の容量を計測する方法として、実際に土器に液体を入れ計測することができれば最も良いといえる。しかし遺跡から出土した土器の大半は割れており完全な個体として残っているものはほとんどなく、また数多くの資料を扱う際には現実的な方法とはいえない。便宜的な計測法として、発掘調査報告書に掲載されている実測図を用いて計測を行った。計測方法は、甕を高さ 1 cm の円柱の集合体と考え、各円柱の容積を算出し、それを合計して 1 個の甕の容量とした (第 1 図は土器を円柱の集合体として考える時の模式図である)。言うまでもないが容量を計測するためには、実測図の内面を測らなければならない。土器容量の計測方法に関しては、藤村 (1981)、都出 (1982)、小田木 (1994)、小林 (1995) らの方法に学び、本稿で対象とした資料は筆者がすべて計測した。

以下は都出の容量計算の公式である。

$$V = \pi\ (r\ 1^2 + r\ 2^2 \cdots\cdots + r\ n^2) \times 1$$

V = 容積 単位 ℓ　mm



第 1 図　甕の計測箇所と模式図

実測図からの計測は当然誤差が生じる。しかし今回はすべての資料を同一の方法で計測しており、本稿における比較・検討に用いるためには十分だと考えている。また、甕の容量を計測する際、口縁部まで測る方法と頸部のくびれ部まで測る方法の２種類がある。本稿では口縁部まで計測する全体容量を用いている。なお、表 1 に掲載した各個体の容量・くびれ度・相対的深さも報告書掲載の実測図から計測した。

5. 容量測定

第２図は容量測定した古墳時代前期の甕 195 個体を、容量が小さい順に並べた分布図である。計測した甕は、0.5 ℓ 前後から約 18 ℓ の容量を持つ (第 7 図に 3 つの容量クラスの甕の実測図を掲載した)。このグラフを見ると、甕の容量は小さいものから大形のものまで分布に極端な集中などはなく緩やかな曲線を描いており、容量による極端なグラフ上の変化は読み取れない。そのため、「大きさ」を表す属性であるくびれ度、器高と胴部最大径による相対的深さを加え検討する (第３・４図)。

第３図は、縦軸が容量、横軸を相対的深さとしたグラフである。甕の相対的深さとは、

器高 / 胴部最大径× 100

によって数値を得ることができ、これは胴部径が器高に対してどのような大きさを持っているのかを相対的に明らかにする。ちなみに相対的深さが 100 の場合、胴部最大径と器高は 1：1 であり、100 以上は相対的に胴部最大径が大きい「浅型」、100 以下は器高が大きい「深型」となる。この器形における相対的深さは、甕の容量を決定する際に大きな影響を与える属性である。今回の容量測定作業の中でも、器高がほとんど同じ個体同士でも、胴部最大径の違いによって容量が大きく異なることに改めて気付いた。甕の容量が器高に対する胴部最大径の変化によってどのように変化するのか、このグラフから読み取っていく。

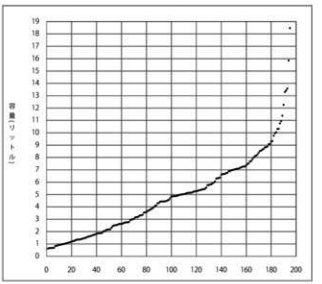
第４図は、第３図と同様に縦軸を容量とし、横軸には甕のくびれ度を配した。くびれ度は、

頸部径 / 胴部最大径× 100

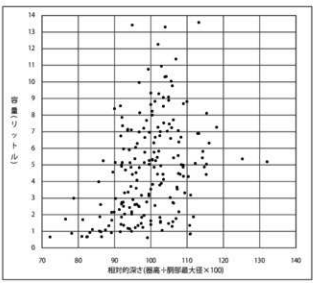
によって算出した。この数値から、甕の頸部がどれほどくびれているのかが判明する。甕における頸部のくびれは、調理実験やアジア地域の民族例・使用痕観察等から、

甕の使用に最も影響を与える属性であることが明らかとなっている (註 1)。また、甕・壺・鉢という器種を大別する際、最も重要な属性でもある。このグラフからは、くびれ度が容量によってどのように変化するのかを読み取れる。

次に各グラフからそれぞれの特徴を読み取っていく。第 3 図のグラフをみると、2～3 ℓ以下では器高に対し胴部最大径が大きい個体が多く、相対的深さの分布域が 70～110 前後と広くなっている。3 ℓ以上の甕に比べ、広範囲に分布している。第 4 図でも 3 ℓ前後に若干の分布の境界を認めることができる。相対的深さとは異なり他の容量クラスの甕と同じような分布幅を持っている。



第 2 図　古墳時代前期　容量図



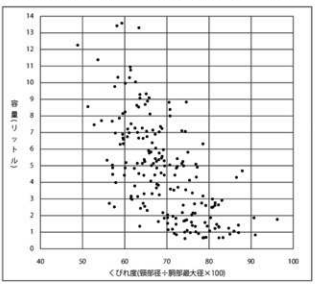
第 3 図　古墳時代前期　容量と相対的深さ　散布図

第 3 図から、2 ℓ以下の胴部最大径は広範囲に分布していたのだが、くびれ度は 70～90 の範囲内に収まっており、2 ℓ以上の個体に比べて、相対的深さには関わらず、くびれが弱いものを指向し製作されていたと考えられる。

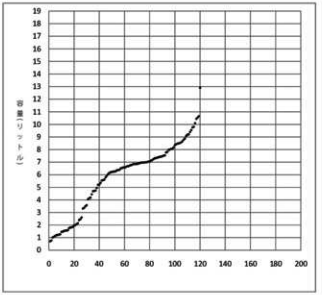
また第 2 図からは、5 ℓと 7 ℓ前後に個体数が集中する様子が窺える。なお 10 ℓ以上の甕は個体数が少ないため、必ずしも 10 ℓ以下の甕と共通の形態を持っていたとは言い切れない。容量が大きい甕は絶対的に個体数が少なく、製作段階で一定の規格性を持っているのか、或いは出土した個体が偶然同じような数値を示しているだけなのか、今の段階では明確な判断は保留したい。

6. 5 世紀代の甕との比較

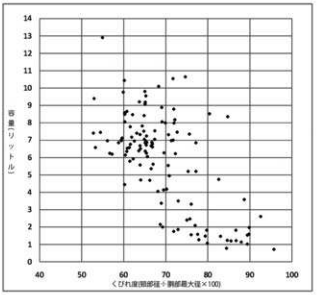
次に古墳時代前期の甕について特徴を捉えるために、山形盆地で出土している 5 世紀代の甕との比較を若干ではあるが行う。ここでいう 5 世紀代とは、古墳時代前期に後続し、小型器台、小型丸底鉢などの前期特有の精製品が姿を消し、椀形や中空長脚のいわゆる布留型高坏が共伴する時期である。北陸の編年で言えば (田嶋 1986)、漆 12 群から 13 群頃に並行する段階である。この時代になると、土師器の器種組成が変化し、またカマドの使用によりそれまでとは大きく異なった調理方法が確立していくなど古墳時代前期とは土器様式が大きく異なる新たな時代といえる (註 2)。やや大雑把であるが、古墳時代前期に後続する時代として捉えている。山形盆



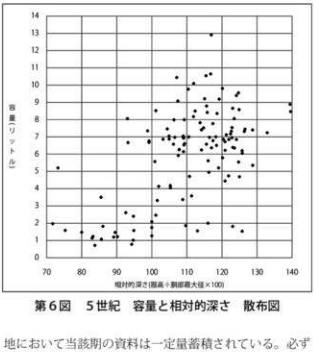
第 4 図　古墳時代前期　容量とくびれ度　散布図



第５図　５世紀　甕容量図



第７図　５世紀　容量とくびれ度　散布図



第６図　５世紀　容量と相対的深さ　散布図

地において当該期の資料は一定量蓄積されている。必ずしも明確な時期設定とはいえないが、土器様式が大きく変化した時代の資料と比較することによって前期の甕の特徴をより明らかにすることができる。

対象遺跡

板橋２遺跡　　的場遺跡　渋江遺跡　蔵増押切遺跡
向河原遺跡　　下柳Ａ遺跡　山形元屋敷遺跡

古墳時代前期の甕と比較するために、７遺跡の資料120 個体について、前述の方法で容量やくびれ度などを計測しグラフ化した。これら５世紀代のグラフを見ると、いずれのグラフでも明確な分布のまとまりが確認できる。大きく分けてまとまりは２つあり、そのうち３ℓ以下のまとまりでは、相対的深さとくびれ度のいずれにおいても前期と近い分布を示していることが分かる。もう１つは７ℓ付近を中心としたまとまりが見られる。５世紀代には前期に比べ器形はより深型となる。さらに第６図を見ると、７ℓ付近の甕の相対的深さが２分化する事も窺える。またこの容量クラスの甕はくびれ度が集中しており、球胴型・長胴型として２分することもできる（第８図）。なお、8~10ℓの甕は一定量確認できるが、７ℓ前後の深型（長胴型）と共通する体部形態となっている。第５図からも分かるように明３ℓ以上～５ℓ未満の甕は非常に少なく、らかな分布の片寄りが見られる。このことは、甕という器種の中で２つの容量クラスが意識的に作り分けられていたことを示している。山形盆地に限らず、北陸など他の地域でもこの時代の作り分けが行われることが明らかとなっている。山形盆地においても同様の土器様相であったことが分かる。

ここまで５世紀代の甕についてその特徴を概観した。古墳時代期と５世紀代の甕を比較すると、２ℓ～３ℓ以下ではくびれ度・相対的深さも含め共通の分布を示しており、このクラスの甕は小形甕として時代を超えて作られていることが分かる。また、古墳時代前期の甕では、５ℓと７ℓ付近に分布の集中が見られたのだが、５世紀代のようなグラフ上の明確な断絶はなく、くびれ度や相対的深さにおいても他の容量の個体と比べ際立った変化や特徴を見出すことはできない。

7. まとめと今後の展望

以上のように、本稿では山形盆地における古墳時代前期の甕を対象として容量と器形のくびれ度・相対的深さを計測した。またその特徴を捉えるために、5世紀代の甕も併せて計測し比較を行った。その結果、5世紀代の甕に比べて、くびれ度・相対的深さといった器形における形態的特徴が、甕における「大きさ」を示す容量によって大きく変化はしていないことから、共通する形態の甕が様々な容量クラスに見られるということが分かった。

また、甕に限らず土器分類において重視されている口縁部形態や器面調整については、ここまで触れてこなかった。古墳時代前期の甕の口縁部は、S字状を呈するものや口縁端部に面を持つもの、頸部から直立気味に立ち上がるものや強く外反するものなど、様々な形態を持っている。山形盆地を含め各地のこれまで示されてきた編年においても重要な属性として捉えられている。甕の口縁部形態成いは共伴する他器種の消長から本稿で設定した古墳時代前期という時期区分は、さらに数期に細分される。以上述べたとおり、単純に甕のくびれや相対的深さという属性だけでは編年的な時期区分の指標とならないことは明らかだが、これらの属性と地域性や集団にとって象徴的な属性である口縁部の形態がどのような関係を持っているのかを検討するためのデータとなるだろう。さらに他の器種との共伴関係や組成の検証も含めた山形盆地における土師器編年が求められる。併せて、より使用実態を解明するための方法として行われているススやコゲなどの使用痕の観察と今回提示したデータを分析することによって、調理方法等の具体的な使用実態の解明にも活かせる（註3）。そして川前2遺跡の土器群の検討も踏まえ、山形盆地の集落がどのような個性・特徴を持ち当時の社会の中で位置づけられるのか、その一端を明らかにしたい。

註1）東北芸術工科大学北野博司先生からアジア諸国における土器の製作や使用実態について様々な教示を 得た。

註2）田嶋 1995 によれば、漆12群成立期は、それまでの弥生時代的土器様式に変わり、律令的土器様式が確立した段階とされる。このことを踏まえ、古墳時代の中でも土器様式が大きく変化する時期の土器を比較した。

註3）すでに山形盆地においても使用痕分析の研究は行われているが、土器の編年的な位置づけをより明確にすることが求められる。山形盆地の資料は増加しており、編年研究はさらに進めていかなければならない。

参考文献

藤村東男　1981　「土器容量の測定」『考古学研究』第28号 第3巻　考古学研究会

都出比呂志　1982　「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集　平凡社

寺沢薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所

田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター

小田木治太郎　1994　「甕型土器の容量に関する基礎研究」 天理参考館報第7号 天理大学出版部

小林正史　1995　「縄文から弥生への煮沸用土器の容量組成の変化」 北陸古代土器研究第5号 北陸古代土器研究会

田嶋明人　1995　「土器と『古墳時代』」 北陸古代土器研究第5号　北陸古代土器研究会

小林正史　1997　「弥生時代から古墳初期の甕の作り分け」 北陸古代土器研究第6号　北陸古代土器研究会

滝沢規朗　2005　「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号

植松暁彦　2005 「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会

稲葉菜穂　2007　「スス・コゲからみた古墳時代の土器調理　―煮るから蒸すへ―」　山形考古第8巻第3号　山形考古学会

発掘調査報告書　一覧

山形県教育委員会　1979　「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第17集

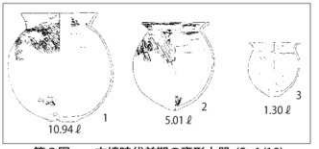
山形県教育委員会　1980　「熊野台遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第31集

山形県教育委員会　1981　「下槻遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第39集

山形県教育委員会　1987　「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書（2）」　山形県埋蔵文化財調査報告書第107集

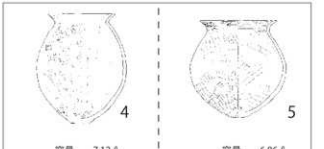
山形県埋蔵文化財センター　1994　「今塚遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集

山形県埋蔵文化財センター　1996　「下柳 A 遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 38 集
山形県埋蔵文化財センター　2001　「長表遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 87 集
山形県埋蔵文化財センター　2002　「菖蒲江 1 遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 105 集
山形県埋蔵文化財センター　2002　「沖江遺跡第 4 次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 106 集
山形県埋蔵文化財センター　2002　「山形元屋敷遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 109 集
山形県埋蔵文化財センター　2003　「向河原遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 111 集
山形県埋蔵文化財センター　2003　「蔵増押切遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 112 集
山形県埋蔵文化財センター　2004　「服部遺跡・藤治第 2 次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 119 集
山形県埋蔵文化財センター　2004　「萩原遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 120 集
山形県埋蔵文化財センター　2004　「馬洗場 B 遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 123 集
山形県埋蔵文化財センター　2004　「沖江遺跡第 2・3 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 124 集
山形県埋蔵文化財センター　2004　「板橋 1 遺跡・板橋 2 遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 125 集
山形県埋蔵文化財センター　2004　「的場遺跡第 2・3 次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 126 集
山形県埋蔵文化財センター　2004　「高畑南遺跡・菖蒲江 1 遺跡・菖蒲江 2 遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 132 集
山形市教育委員会　2004　「双葉町遺跡（山形城三の丸跡）発掘調査報告書　縄文時代～中世編」　山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第 24 集
山形県埋蔵文化財センター　2005　「高瀬山遺跡 (HO 地区) 発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 145 集
山形県埋蔵文化財センター　2007　「梅野木前 1 遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 160 集



第 8 図　古墳時代前期の甕形土器 (S=1/10)

1. 表 2-No.115　2. 表 2-No.127
3. 表 1-No.33　4. 表 3-No.89　5. 表 3-No.33



第 9 図　5 世紀代の甕形土器 7 ℓ前後 (S=1/10)

表 1　古墳時代前期 甕形土器　計測値 (1)

No.	遺跡名	報告書番号	相対的深さ	くびれ度	容量
1	高畑南遺跡	88	92.0	77.2	4.91
2	高畑南遺跡	124	103.1	85.9	1.06
3	高畑南遺跡	125	106.1	79.1	1.58
4	高畑南遺跡	127	92.4	78.3	2.76
5	高畑南遺跡	128	114.2	72.5	5.43
6	高畑南遺跡	132	95.6	79.2	2.61
7	高畑南遺跡	140	116.1	78.6	6.32
8	高畑南遺跡	143	96.8	60.1	9.96
9	高畑南遺跡	153	106.3	76.6	2.71
10	高畑南遺跡	157	107.0	96.2	1.77
11	高畑南遺跡	209	104.0	63.4	13.30
12	高畑南遺跡	213	88.4	82.3	1.34
13	高畑南遺跡	214	97.4	72.2	1.48
14	高畑南遺跡	215	91.9	90.7	1.86
15	高畑南遺跡	218	103.9	61.1	10.31
16	高畑南遺跡	219	104.5	68.2	7.04
17	高畑南遺跡	220	103.3	69.4	4.44
18	高畑南遺跡	221	112.9	67.2	6.90
19	高畑南遺跡	222	125.2	68.1	5.36
20	高畑南遺跡	231	108.1	71.9	4.44
21	高畑南遺跡	233	109.4	64.6	3.32
22	高畑南遺跡	251	78.2	85.0	0.88
23	高畑南遺跡	257	107.6	68.9	5.57
24	高畑南遺跡	258	96.2	66.2	4.08
25	高畑南遺跡	382	103.6	61.5	7.53

No.	遺跡名	報告書番号	相対的深さ	くびれ度	容量
26	高畑南遺跡	569	86.2	81.4	2.61
27	高畑南遺跡	571	98.9	81.5	2.77
28	高畑南遺跡	572	101.3	64.8	5.26
29	高畑南遺跡	573	91.8	87.0	1.42
30	高畑南遺跡	574	90.2	63.0	5.15
31	高畑南遺跡	575	111.0	78.6	3.18
32	高畑南遺跡	708	111.8	80.4	1.88
33	高畑南遺跡	709	105.9	82.4	1.30
34	菖蒲江 1 遺跡	1020	115.3	70.7	5.05
35	菖蒲江 1 遺跡	1021	100.9	68.2	5.77
36	菖蒲江 1 遺跡	1023	99.6	67.6	5.27
37	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	8	94.2	63.7	2.43
38	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	9	104.9	81.8	1.47
39	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	14	109.0	64.8	8.69
40	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	21	101.8	68.7	5.46
41	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	22	102.9	67.6	3.89
42	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	23	90.0	70.7	8.39
43	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	26	83.2	71.8	0.93
44	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	52	96.3	58.9	6.29
45	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	55	109.0	77.0	4.32
46	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	113	107.7	66.5	6.38
47	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	114	91.9	74.0	5.00
48	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	115	108.9	60.1	4.87
49	菖蒲江 1 遺跡 (2 次)	136	97.4	61.5	3.17
50	長表遺跡	23-4	93.6	65.2	7.08

表 2　古墳時代前期 甕形土器　計測値 (2)

No.	遺跡名	報告書番号	相対的深さ	くびれ度	容量
51	長表遺跡	25-9	87.5	80.1	1.08
52	長表遺跡	25-10	97.5	69.4	1.85
53	長表遺跡	26-8	98.1	71.4	1.96
54	長表遺跡	27-10	92.0	58.7	7.86
55	今塚遺跡	10	94.7	70.2	2.04
56	今塚遺跡	13	105.5	59.7	6.60
57	今塚遺跡	17	115.4	66.0	8.11
58	今塚遺跡	19	102.5	62.4	3.79
59	今塚遺跡	39	86.3	75.6	0.98
60	今塚遺跡	44	114.8	57.1	4.88
61	今塚遺跡	45	113.2	59.3	13.58
62	今塚遺跡	72	89.2	74.1	1.67
63	下林遺跡	7-7	95.1	83.1	2.92
64	下林遺跡	7-8	91.9	82.3	2.64
65	下林遺跡	7-11	94.6	73.6	7.11
66	燃野台遺跡	6-RP42	92.8	66.5	3.32
67	燃野台遺跡	10-RP211	96.6	57.5	2.52
68	燃野台遺跡	10-RP212	94.2	70.3	1.15
69	燃野台遺跡	10-RP214	90.3	61.7	2.98
70	塩部藤治屋敷遺跡	85-7	112.3	76.9	5.09
71	塩部藤治屋敷遺跡	86-5	93.7	66.7	7.15
72	塩部藤治屋敷遺跡	87-1	98.1	60.7	7.21
73	塩部藤治屋敷遺跡	87-2	102.5	65.3	6.76
74	塩部藤治屋敷遺跡	87-3	96.0	70.9	3.60
75	塩部藤治屋敷遺跡	88-1	101.9	67.1	4.45
76	塩部藤治屋敷遺跡	88-2	101.2	63.3	6.67
77	塩部藤治屋敷遺跡	88-3	100.8	59.7	6.33
78	塩部藤治屋敷遺跡	89-1	107.6	74.4	7.07
79	塩部藤治屋敷遺跡	89-3	94.1	65.7	5.91
80	塩部藤治屋敷遺跡	89-4	106.2	54.5	7.72
81	塩部藤治屋敷遺跡	90-1	104.9	65.4	8.89
82	塩部藤治屋敷遺跡	90-2	89.3	68.3	18.47
83	塩部藤治屋敷遺跡	91-1	99.3	61.4	10.76
84	塩部藤治屋敷遺跡	91-2	110.9	72.3	0.85
85	塩部藤治屋敷遺跡	91-3	103.4	63.6	9.07
86	塩部藤治屋敷遺跡	92-1	102.2	66.2	5.83
87	塩部藤治屋敷遺跡	92-2	98.2	66.8	5.14
88	塩部藤治屋敷遺跡	92-3	99.6	57.8	6.97
89	塩部藤治屋敷遺跡	93-1	94.5	72.6	3.70
90	塩部藤治屋敷遺跡	94-2	96.8	80.6	2.49
91	塩部藤治屋敷遺跡	94-4	104.3	58.4	10.33
92	塩部藤治屋敷遺跡	95-1	103.5	63.3	8.53
93	塩部藤治屋敷遺跡	95-2	105.9	57.6	9.77
94	塩部藤治屋敷遺跡	96-1	105.6	62.5	10.04
95	塩部藤治屋敷遺跡	96-2	110.0	70.5	8.82
96	塩部藤治屋敷遺跡	97-1	102.6	63.0	7.01
97	塩部藤治屋敷遺跡	97-2	115.3	64.5	4.43
98	塩部藤治屋敷遺跡	97-3	132.1	60.3	5.19
99	塩部藤治屋敷遺跡	98-1	113.2	59.5	6.90
100	塩部藤治屋敷遺跡	98-3	110.4	86.5	4.30
101	塩部藤治屋敷遺跡	99-1	96.9	59.5	8.14
102	塩部藤治屋敷遺跡	100-1	102.0	48.8	12.26
103	塩部藤治屋敷遺跡	100-2	93.7	71.3	1.18
104	塩部藤治屋敷遺跡	100-3	92.5	80.9	2.51
105	塩部藤治屋敷遺跡	101-1	99.5	68.2	3.25
106	塩部藤治屋敷遺跡	101-2	101.2	64.7	2.56
107	塩部藤治屋敷遺跡	101-3	91.3	65.3	2.31
108	塩部藤治屋敷遺跡	101-4	93.8	76.0	3.36
109	塩部藤治屋敷遺跡	102-3	85.8	76.9	1.02
110	塩部藤治屋敷遺跡	102-4	89.1	77.5	0.92
111	塩部藤治屋敷遺跡	102-5	97.8	84.7	1.24
112	塩部藤治屋敷遺跡	102-6	110.8	91.0	0.84
113	馬洗場 B 遺跡	1	92.8	75.9	2.04
114	馬洗場 B 遺跡	3	102.5	72.2	1.84
115	馬洗場 B 遺跡	8	102.9	61.3	10.95
116	馬洗場 B 遺跡	9	91.6	51.3	8.56
117	馬洗場 B 遺跡	30	99.5	63.1	3.14
118	馬洗場 B 遺跡	34	92.2	68.5	7.36
119	馬洗場 B 遺跡	59	89.2	76.7	2.15
120	馬洗場 B 遺跡	61	94.7	74.2	1.00
121	馬洗場 B 遺跡	71	99.1	74.3	0.62
122	馬洗場 B 遺跡	77	100.4	60.1	8.24
123	馬洗場 B 遺跡	79	100.0	76.1	1.41

No.	遺跡名	報告書番号	相対的深さ	くびれ度	容量
124	馬洗場 B 遺跡	96	89.9	76.2	2.16
125	馬洗場 B 遺跡	110	81.3	74.4	1.70
126	馬洗場 B 遺跡	120	114.4	75.0	5.82
127	馬洗場 B 遺跡	121	108.4	66.4	5.01
128	馬洗場 B 遺跡	122	108.9	69.5	4.99
129	馬洗場 B 遺跡	123	107.3	74.5	3.55
130	馬洗場 B 遺跡	125	100.9	67.6	4.87
131	馬洗場 B 遺跡	128	106.1	56.4	2.72
132	馬洗場 B 遺跡	130	98.3	65.8	5.77
133	馬洗場 B 遺跡	131	107.7	69.0	2.18
134	馬洗場 B 遺跡	132	83.9	74.8	1.11
135	馬洗場 B 遺跡	133	102.8	72.5	4.95
136	馬洗場 B 遺跡	149	100.0	71.6	3.54
137	馬洗場 B 遺跡	150	107.2	67.5	3.67
138	馬洗場 B 遺跡	151	110.7	63.6	1.36
139	馬洗場 B 遺跡	160	107.6	57.1	4.49
140	馬洗場 B 遺跡	180	100.0	68.0	1.64
141	馬洗場 B 遺跡	181	102.6	70.2	1.54
142	馬洗場 B 遺跡	182	95.7	81.4	1.23
143	馬洗場 B 遺跡	183	96.5	76.8	1.35
144	馬洗場 B 遺跡	253	103.5	75.4	4.13
145	双葉町遺跡	9	98.4	64.3	6.65
146	双葉町遺跡	12	102.0	64.1	7.27
147	双葉町遺跡	13	104.9	65.8	9.09
148	梅野木前 1 遺跡	446	94.5	72.3	4.86
149	梅野木前 1 遺跡	448	106.3	67.3	5.43
150	梅野木前 1 遺跡	473	95.8	67.4	6.06
151	梅野木前 1 遺跡	485	102.2	63.6	9.29
152	梅野木前 1 遺跡	508	99.6	57.1	5.04
153	梅野木前 1 遺跡	541	100.0	62.9	8.64
154	梅野木前 1 遺跡	562	100.4	55.8	5.34
155	梅野木前 1 遺跡	563	108.3	59.6	6.67
156	梅野木前 1 遺跡	680	102.7	75.8	1.69
157	梅野木前 1 遺跡	681	96.1	73.9	2.63
158	梅野木前 1 遺跡	684	105.1	52.7	7.47
159	梅野木前 1 遺跡	685	94.9	58.1	13.42
160	梅野木前 1 遺跡	687	95.6	64.6	5.37
161	梅野木前 1 遺跡	688	105.3	61.5	3.03
162	梅野木前 1 遺跡	690	105.7	68.9	7.24
163	梅野木前 1 遺跡	691	93.0	87.9	4.69
164	梅野木前 1 遺跡	692	100.4	70.8	8.00
165	梅野木前 1 遺跡	694	94.3	73.6	5.14
166	梅野木前 1 遺跡	695	94.9	59.9	4.43
167	梅野木前 1 遺跡	701	72.2	78.6	0.66
168	梅野木前 1 遺跡	702	82.4	82.4	0.66
169	梅野木前 1 遺跡	703	78.8	80.8	2.99
170	梅野木前 1 遺跡	704	118.1	62.4	7.27
171	梅野木前 1 遺跡	706	91.6	87.0	0.97
172	物見台遺跡	41-4	106.9	53.6	11.38
173	山形内高遺跡	33-4	96.8	62.3	4.84
174	高瀬山遺跡 (HO)	79-6	101.2	74.6	8.83
175	高瀬山遺跡 (HO)	80-1	95.9	63.3	4.53
176	高瀬山遺跡 (HO)	80-2	92.5	69.2	5.97
177	高瀬山遺跡 (HO)	94-8	89.5	68.6	4.57
178	高瀬山遺跡 (HO)	94-9	107.5	75.2	15.85
179	高瀬山遺跡 (HO)	94-10	96.8	61.0	6.98
180	萩原遺跡	102	92.5	79.6	1.36
181	萩原遺跡	117	94.7	73.7	2.18
182	萩原遺跡	130	91.7	60.6	6.75
183	萩原遺跡	131	85.6	57.9	3.99
184	萩原遺跡	158	92.0	64.4	2.74
185	板橋 2 遺跡	15-1	100.0	65.1	9.33
186	板橋 2 遺跡	22-1	86.9	73.8	5.25
187	板橋 2 遺跡	22-2	100.5	68.0	3.83
188	板橋 2 遺跡	22-5	92.1	64.2	5.14
189	板橋 2 遺跡	24-7	81.0	79.3	0.69
190	板橋 2 遺跡	39-4	76.5	74.7	1.74
191	板橋 2 遺跡	44-5	100.5	69.4	5.30
192	板橋 2 遺跡	58-2	82.5	83.3	0.68
193	板橋 2 遺跡	84-1	86.0	70.2	1.88
194	板橋 2 遺跡	87-1	98.8	57.0	7.68
195	板橋 2 遺跡	94-1	86.4	78.8	0.68

表 3　5 世紀代 甕形土器　計測値

No.	遺跡名	報告書番号	相対的深さ	くびれ度	容量
1	板橋 2 遺跡	47-1	99.2	61.6	6.77
2	板橋 2 遺跡	30-1	122.0	77.2	6.85
3	板橋 2 遺跡	30-2	121.9	82.6	4.74
4	板橋 2 遺跡	30-4	118.6	84.7	8.35
5	萩原遺跡	200	139.6	62.1	8.47
6	萩原遺跡	201	123.6	60.7	6.36
7	板橋 2 遺跡	65-1	115.6	71.9	8.79
8	板橋 2 遺跡	65-2	116.8	74.6	10.65
9	板橋 2 遺跡	66-1	109.2	69.9	8.00
10	板橋 2 遺跡	69-15	146.7	68.7	2.15
11	板橋 2 遺跡	81-1	118.5	63.9	6.51
12	板橋 2 遺跡	81-2	126.4	70.6	7.31
13	板橋 2 遺跡	81-4	116.0	69.2	2.00
14	板橋 2 遺跡	82-6	111.9	72.1	8.18
15	板橋 2 遺跡	83-1	114.2	52.8	7.41
16	板橋 2 遺跡	86-3	99.2	63.9	6.68
17	板橋 2 遺跡	86-4	100.0	77.9	1.27
18	板橋 2 遺跡	86-9	125.8	89.4	1.54
19	板橋 2 遺跡	86-10	94.3	84.4	0.78
20	的場遺跡	11	124.1	52.9	9.40
21	的場遺跡	14	101.2	80.4	8.52
22	的場遺跡	16	115.8	64.8	8.42
23	的場遺跡	45	128.8	66.5	5.36
24	的場遺跡	51	83.8	95.7	0.72
25	的場遺跡	55	115.1	63.7	8.21
26	的場遺跡	62	93.2	66.5	6.67
27	的場遺跡	69	108.9	56.1	6.97
28	的場遺跡	70	115.5	71.7	10.54
29	的場遺跡	97	125.8	65.6	6.06
30	的場遺跡	98	122.8	62.5	6.95
31	的場遺跡	130	109.4	66.8	6.61
32	的場遺跡	138	106.2	61.3	6.58
33	的場遺跡	150	103.2	65.5	6.87
34	的場遺跡	152	124.7	65.3	9.55
35	的場遺跡	216	108.8	68.9	3.37
36	的場遺跡	220	111.4	88.6	3.58
37	的場遺跡	273	71.8	89.8	1.97
38	的場遺跡	277	109.1	65.3	6.93
39	的場遺跡	280	107.1	60.1	10.44
40	的場遺跡	304	94.7	89.4	1.02
41	的場遺跡	333	83.2	84.6	1.24
42	的場遺跡	364	125.8	57.2	6.20
43	的場遺跡	370	105.3	70.2	4.18
44	的場遺跡	374	90.2	86.7	1.22
45	的場遺跡	375	94.8	75.0	2.40
46	的場遺跡	420	85.6	79.9	1.07
47	的場遺跡	450	100.9	63.9	5.57
48	的場遺跡	457	83.0	87.9	1.14
49	的場遺跡	460	104.4	72.7	7.46
50	的場遺跡	467	117.4	61.5	7.77
51	的場遺跡	468	117.0	65.1	6.37
52	的場遺跡	476	105.3	68.1	4.05
53	的場遺跡	480	107.6	62.2	5.92
54	的場遺跡	483	118.3	71.7	7.00
55	的場遺跡	484	120.9	65.3	6.72
56	的場遺跡	485	86.1	86.7	1.82
57	下柳 A 遺跡	48	80.0	79.4	1.48
58	下柳 A 遺跡	55	128.8	63.1	7.40
59	下柳 A 遺跡	57	110.4	59.9	9.76
60	下柳 A 遺跡	88	92.6	92.6	2.61
61	下柳 A 遺跡	89	107.8	65.4	6.25
62	下柳 A 遺跡	90	109.7	72.9	1.86
63	下柳 A 遺跡	117	123.1	79.7	1.82
64	下柳 A 遺跡	119	109.2	60.8	6.54
65	下柳 A 遺跡	120	114.8	64.8	7.52
66	下柳 A 遺跡	121	104.9	66.7	6.88
67	下柳 A 遺跡	134	120.9	72.3	6.22
68	下柳 A 遺跡	144	107.4	65.1	9.08
69	蔵増押切遺跡	75-16	102.0	69.5	4.14
70	蔵増押切遺跡	76-3	89.1	85.3	1.20
71	蔵増押切遺跡	82-7	100.0	77.0	2.09
72	蔵増押切遺跡	82-11	85.5	72.9	3.50
73	渋江遺跡 (2・3 次)	61	75.3	89.8	1.59
74	渋江遺跡 (2・3 次)	65	106.6	59.4	6.98
75	渋江遺跡 (2・3 次)	67	112.4	60.2	8.50
76	渋江遺跡 (2・3 次)	72	126.6	54.4	7.45
77	渋江遺跡 (2・3 次)	80	106.3	71.9	7.99
78	渋江遺跡 (2・3 次)	81	119.0	77.1	5.21
79	渋江遺跡 (2・3 次)	90	98.8	75.6	7.35
80	渋江遺跡 (2・3 次)	91	124.9	60.2	8.58
81	渋江遺跡 (2・3 次)	92	123.1	60.7	8.66
82	渋江遺跡 (2・3 次)	94	116.9	54.9	12.91
83	渋江遺跡 (2・3 次)	109	115.6	53.2	6.58
84	渋江遺跡 (2・3 次)	110	123.1	63.6	6.39
85	渋江遺跡 (2・3 次)	111	113.8	64.4	7.82
86	渋江遺跡 (2・3 次)	113	94.9	77.6	1.58
87	渋江遺跡 (2・3 次)	134	111.9	68.3	10.10
88	渋江遺跡 (2・3 次)	147	123.5	60.3	8.06
89	渋江遺跡 (2・3 次)	148	121.3	59.6	7.12
90	渋江遺跡 (2・3 次)	183	122.9	67.4	7.54
91	渋江遺跡 (2・3 次)	184	125.0	66.2	4.69
92	渋江遺跡 (2・3 次)	197	139.4	69.0	8.88
93	渋江遺跡 (2・3 次)	217	120.2	65.0	9.81
94	渋江遺跡 (2・3 次)	228	101.2	75.7	2.47
95	渋江遺跡 (2・3 次)	240	110.7	64.0	4.71
96	渋江遺跡 (2・3 次)	241	116.5	71.3	6.97
97	渋江遺跡 (2・3 次)	261	89.5	83.0	1.47
98	渋江遺跡 (2・3 次)	268	120.9	60.2	4.45
99	渋江遺跡 (2・3 次)	284	120.2	61.4	5.79
100	渋江遺跡 (4 次)	84	73.3	75.3	5.20
101	渋江遺跡 (4 次)	86	93.1	69.1	8.06
102	渋江遺跡 (4 次)	90	109.1	60.3	6.15
103	渋江遺跡 (4 次)	91	104.9	64.9	7.05
104	渋江遺跡 (4 次)	92	107.8	69.6	6.27
105	渋江遺跡 (4 次)	93	116.1	67.0	5.62
106	渋江遺跡 (4 次)	94	109.0	67.3	7.05
107	渋江遺跡 (4 次)	95	114.2	56.7	6.24
108	渋江遺跡 (4 次)	97	116.3	70.8	4.95
109	渋江遺跡 (4 次)	101	119.2	65.1	9.19
110	渋江遺跡 (4 次)	106	117.4	66.8	6.78
111	向河原遺跡	546	100.0	71.9	1.75
112	向河原遺跡	559	113.0	76.0	1.56
113	向河原遺跡	563	124.8	70.6	5.55
114	向河原遺跡	564	101.6	76.0	3.32
115	向河原遺跡	565	120.4	58.8	6.85
116	向河原遺跡	567	110.6	59.3	7.00
117	向河原遺跡	569	132.9	65.4	7.24
118	向河原遺跡	570	122.5	61.9	7.17
119	山形元屋敷遺跡	24	124.1	65.1	6.85
120	山形元屋敷遺跡	26	122.7	63.9	7.33

古代の平面正方形区画施設の内部構造

植松暁彦

1　はじめに

近年本県では、大規模な面的調査に伴い、奈良～平安時代の区画施設を有する遺跡が徐々に確認されている。最近でも日本海沿岸東北自動車道工事に伴い、庄内地方の岩崎遺跡で、同様の施設が検出され注目される(水戸部2007)。

一般に区画施設を有する遺跡は、国府や郡衙の官庁、東北地方では蝦夷対策の城柵跡やその付属施設などの官衙関連遺跡で多く採用される。これらはコの字型など規格性のある建物配置や、官衙特有の墨書土器や石帯などの出土遺物が特徴としてあげられている（山中1994)。

しかし、本県では、上記形態を有する出羽国府（城輪柵跡・八森遺跡）は確認されるが、下位の地方行政機関の明確な郡衙政庁や同正倉は未検出である。また、本県の一部遺跡では、区画施設を有するも、小規模で建物形態や配置に多様性があり、従来からその性格について様々な報告がされてきた（渋谷1989・川崎1998)。

筆者も以前『山形県における古代の区画施設を有する遺跡群（1)・(2)』で、これら遺跡群を整理・検討し、特に内陸地方の小規模で平面正方形基調の６遺跡の変遷案を示し、性格などを検討した（植松2007・2009)。

本稿では、前述６遺跡で、特に内部構造が分かる３遺跡や主な建物群を整理し、性格や成因を検討する。[註1)]

2　内陸の平面正方形の区画施設のある遺跡の特徴

本項では、前拙稿の成果を基に、内陸地方の上記３遺跡の特徴を再度整理し、出羽南半（本県）や陸奥側（宮城・福島県）との相違点をおさえておく（第３図)。

最初に、内陸地方の正方形基調の区画施設６遺跡は、村山地方の山形市吉原Ⅰ遺跡・同石田遺跡・同境田Ｂ遺跡、置賜地方の南陽市中落合遺跡、長井市地ノ上遺跡、米沢市大浦Ｂ遺跡である。このうち内部構造が分かる遺跡は、大浦Ｂ遺跡・中落合遺跡・石田遺跡（以下、括弧内は遺跡省略）の３遺跡となる（第１・２図)。

①　立地（第１・10図）　上記３遺跡は荒木志伸氏が指摘した河川周辺や合流点の交通の要所に位置し（荒木2003)、概ねその自然堤防（微高地）上に立地する。

第１図
平面正方形基調の区画施設を有する遺跡位置図

さて３遺跡の区画内部には、小規模な総柱建物が複数あり、倉庫的機能を一部内包するのは明らかである。

一般に地方の主な倉庫施設の郡衙正倉は、『倉庫令』で「高燥」地への設置規定があり、調査例のある陸奥国の各郡正倉も概ね規定通り台地や低段丘上に立地する。

この点は、内陸部３遺跡と陸奥国の郡衙正倉とは異なり、区画内の倉庫群の形態や性格に起因するのだろう。

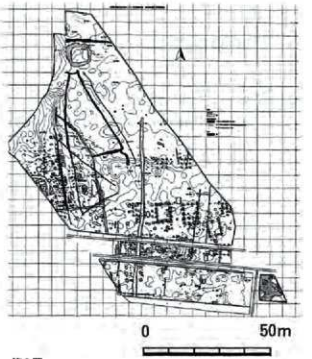
②　時期（第４・５・10図）　区画施設の時期は、主体的な遺構（掘立柱建物跡）の性格上から判断が難しい。

しかし、区画内部の建物の重複関係や建物主軸、遺物の下限時期などから遺構変遷は推測できる(植松2009)。

当初の区画施設成立以前は、８世紀中～後半に主軸を北西にとる竪穴住居群（大浦)、単独の大型掘立柱建物群（石田）などで構成される。区画成立は、８世紀後半～９世紀初頭に集中し、区画や建物が主軸を北にそろえる。以後９世紀中頃以降には、区画施設の廃絶と共に建物群が減少・主軸方向が変化し、移転・廃絶などが窺える。

③　区画形態（第３・６図）　３遺跡とも区画施設の平面形態が正方形基調で、主軸がほぼ南北軸に合う。

出入口は、門などが南辺中央部に認められる。さらに出入口のある南辺には、目隠し塀（大浦遺跡・石田遺跡。以下、遺跡省略する）や間仕切り塀（中落合）を有するものもある。他に、全体に区画施設内部の南辺中央部付



第２図
小規模区画施設の遺跡平面図（全て S＝1/1,500）

近は、遺構が希薄で広場的な空間が設けられる。

これら区画施設の南北主軸や南辺出入口、区画施設内部の空間は、出羽・陸奥国の国府や城柵跡、郡衙の政庁などに共通した一般的な官衙関連遺跡の特徴である。

④ **区画規模（第３図）** 全体に一辺 50 m前後のもの（石田 [50 × 50 m]・大浦 B [40 × 40 m]）が見られ、中落合遺跡も検出された区画施設長（44 × 45 m）から同等規模が考えられる。全体に東北の国府や城柵跡の政庁（一辺 100 m以上）より規模が小さく、郡衙政庁（一辺 50 m前後）と同等か、やや小さい一群もある。

⑤ **区画施設の形態** 全体に柱列が主体を占める。柱が残存した石田遺跡例からは、径 10cm 内外の柱がほぼ等間隔やランダムに密集して配置され区画施設を構成する。

これは、庄内地方の国府を除く区画施設が一般に板材列で、区画施設の地域性による差異と考えられる。

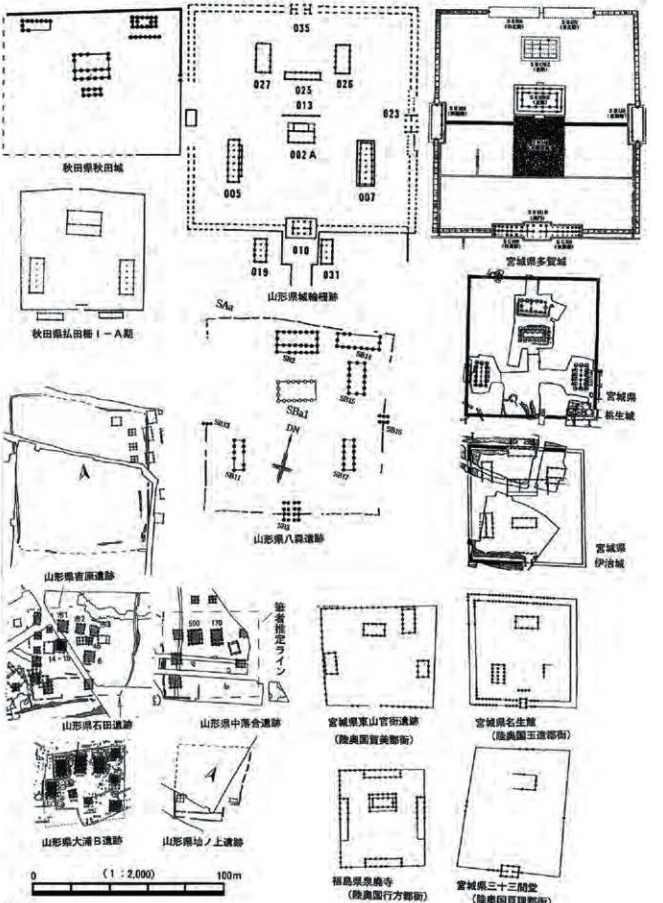
⑥ **区画施設の内部構造（第６図）** 遺構変遷（第４・５図）では、時期毎の区画施設内・外の建物の建替が窺え、全体に最も整備が進む８世紀末～９世紀前葉の時期を抽出した。結果、建物群は、配置場所や形態により、概ね３遺跡共通の大別Ａ～Ｄ類の建物に分類された。

Ａ類建物 区画内の東西辺に沿って立ち並ぶ傾向がある２×２間の総柱建物（倉庫）や同間同規模の平面正方形基調の小型側柱建物群である。これらは、区画施設と同時期に複数構築される事が多く（第４・５図）、区画施設の成立時の主な建物群の一つと考えられる。

Ｂ類建物 区画内北辺に南北棟で、ほぼ等間隔（10 m前後）に南面を合わせて並列配置される、２×２～３間建物（石田）、３×４間（大浦Ｂ・中落合）などの中～大型建物である。区画内では、大型の建物群の部類に入り、区画内の主要建物群と推測される。時期は、区画施設と同じか少し遅れる場合（石田）もある。

Ｃ類建物 東西辺の一部に単独で配置され、２×３間（中落合）・３×３間（大浦Ｂ・石田）で、一般集落では数少ない正方形基調の中型建物である。これは、同じ東西辺に主体的な正方形基調のＡ類小型建物とは規模や柱間に差異があり、異質な感をうける。

陸奥国では、同形態として郡衙正倉に特有の正方形基調の３×３間・４×４間の大型総柱建物（倉庫：第９図）が一般に知られる。Ｃ類建物は、本県一般集落での希少性や、規模や総柱は異なるが前述陸奥国郡倉の状況を勘案すれば、区画施設に特徴的な建物とも考えられる。



第3図
東北地方の主な正方形区画施設の建物模式図 （全て S＝1/2,000）

D類建物　南辺両角の入口付近に１×３間か（中落合）、２×３間（石田）の中～大型の南北棟建物である。

一部南辺両門で２棟が対になる場合（石田）があり、国府や郡衙政庁と同様の脇殿的な配置をとる。

⑦　区画施設の外部構造（第４・５図）　区画施設の外部には、区画内と同規模の総柱建物（２×２間：Ａ類建物）や側柱建物（２×３～４間：Ｂ類建物か）が、区画と軸を同じく並列や直交（石田）し複数分布する。

出羽国府（城輪柵・八森遺跡）政庁外でも同様な分布をしているものがあり、事務棟（曹司か）などが考えられる。

建物跡が単発配置（中落合）は、調査区の制約があるが、概ね区画内建物で機能が完結した可能性もある。

⑧　出土遺物　「山形県の官衙関連遺跡」（植松他 1999）で試みた官衙的遺物の墨書土器、硯、帯金具、施釉陶器、木簡（漆紙文書）の５種類の組成・数量で分類した。

結果、上記４種類以上の官的遺物を一定保持するが、数量が乏しいもの（大浦Ｂ）や、組成的に２種類以下で安定せず数量も少ないもの（石田・中落合）がある。

全体に調査区の制約による粗密も考えられが、遺物から積極的に郡衙など官衙遺跡と判断できるものは少ない。

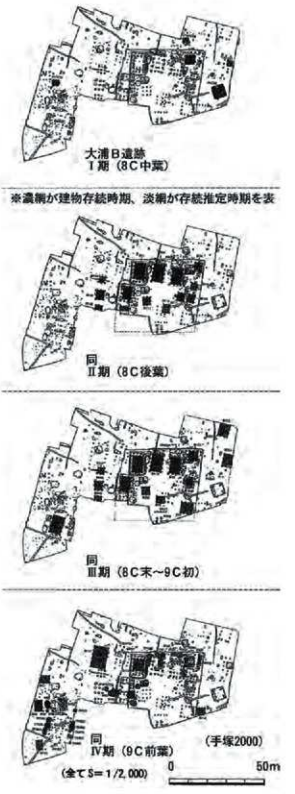
3　区画施設の主要建物群について

本項は、前項「⑥区画内部の建物構造」の主要なＡ・Ｂ類建物を再検討し、建物群としての性格を整理する。

Ａ類建物群　Ａ類建物の２×２間総柱建物は、一般に高床式と考えられ、区画東西辺に建物面をそろえて並ぶ配置からも倉庫群としての機能が考えられる。また、同間同規模の正方形を基調とする側柱建物群も、総柱建物との同等の柱間や規模、総柱建物と主軸を合わせて隣接するあり方から、同様の性格を有すると推測される。

Ｂ類建物群　Ｂ類建物が位置する区画北辺は、同規模の陸奥国の郡衙政庁で中心的建物である正殿が配置される場所にあたる。しかし、陸奥国郡衙政庁での正殿は、一般に東西棟の２×４間以上の長舎建物である。また、東西辺に南北棟の同形態の長舎建物の脇殿が付属し、合わせて所謂コの字型配置をとるものが多い（第３図）。

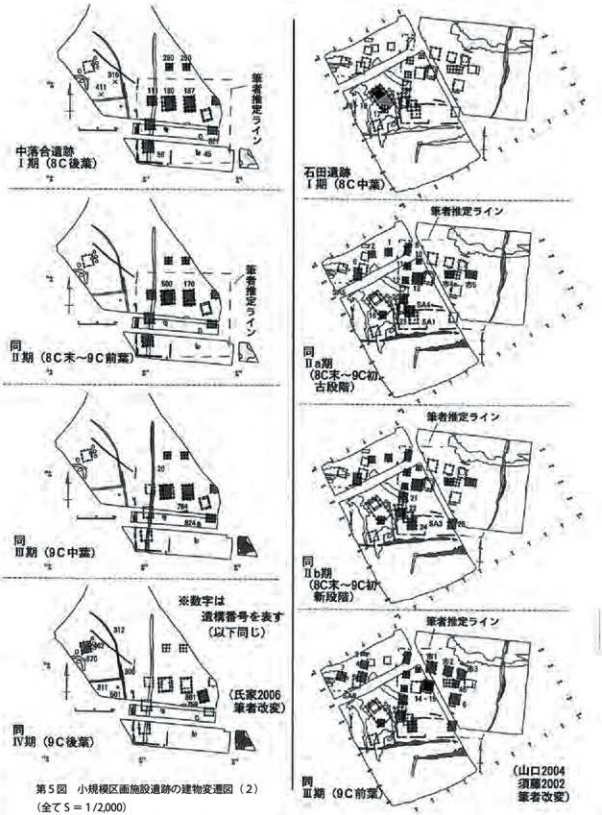
一方、Ｂ類建物は、北辺に２×２～３間・３×４間の同等規模・形態の南北棟が２～３棟が複数並列して近接配置され、建物群として機能が窺える。また、東西辺には小規模なＡ類建物群などが複数直線的に配置され、



第４図　小規模区画施設遺跡の建物変遷図（１）

結果として広義のコの字型状の配置を呈する（第６図）。

これらから本県の小規模区画施設は、陸奥国の同規模の郡衙政庁などの様相とは明らかに異なる。Ｂ類建物群は、描稿で「同等規模の建物が、建物の一辺（南面）をそろえ、等間隔で配置される特徴が、Ａ群建物に類似し、



第５図　小規模区画施設遺跡の建物変遷図（２）
（全てＳ＝１/2,000）

同様の倉庫的な役割」を考えた。

今回作成した形態図（第８図）でも、石田遺跡Ｂ類建物群（SB市１・２・３）は、他２遺跡と同じく南面を合わせ同主軸で３棟が並列するが、SB市２・３は柱間が大きく２×２間の正方形基調の建物である。この建物群は、Ａ類建物群との柱間など類似性が指摘でき、Ａ類建物群の拡張した建物群（倉庫）とみることもでき、Ｂ群建物全体の性格の一端を表すものかもしれない。

他に、Ｂ類建物群では、各遺跡や各郡域の類似性や差異も看取れるようである（第６・８図）。具体的にはＢ

類建物群は、各遺跡で規模や形態、柱間など類似点が多い。また、置賜地方（置賜郡）の中落合遺跡（SB500・517）、大浦B遺跡（SI 3・9・19）は、梁・桁長、柱間が同等で、各遺跡を超えた同一郡内での一定規格が窺えた。

村山地方（最上郡）でも、石田遺跡B類建物群の一部（SB市2・3）は、前述正方形基調だが、区画内では大型の主要建物群で、A類建物群より規模大きく、梁長や桁間は上記置賜郡と同等で類似性も窺える（第8図）。

しかし、区画北辺付近には、前述平面正方形基調の建物（SB市2・3。他にSB14・15）が多く、南北棟を主とする置賜地方とはやや様相が異なる。これは、最上郡が置賜郡より、郡衙正倉に普遍的な正方形基調の建物を志向した表れではないだろうか（第8図）。

なお、B類建物群の機能として、詳細は拙稿に譲るが、近年の文献史学による正税帳と全国の郡衙正倉遺跡との研究（松村 1983・山中 1994）から、各群建物の収納物の違いも推測される。規模や形態から総柱で一定期間荷重に耐えうるA群建物が穀稲（倉）、低床で出納作業に効果的なB群建物が籾稲（屋）の可能性を付しておく。

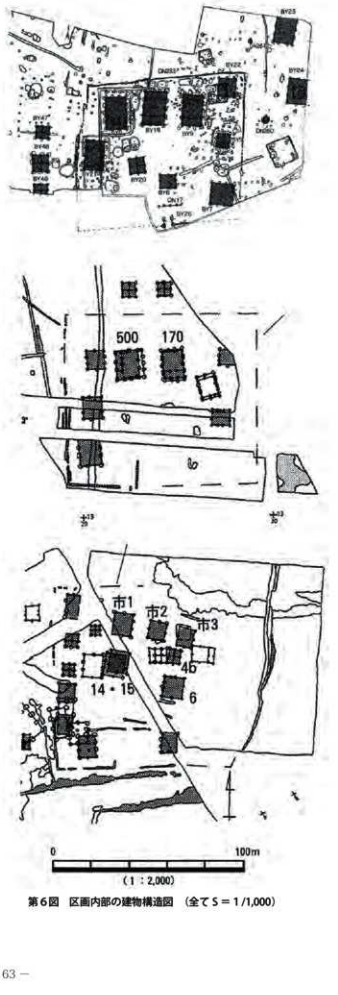
4　まとめ

最後に、前項までの区画施設や建物群の様相や検討から、その性格や成因、背景などを整理しまとめとする。

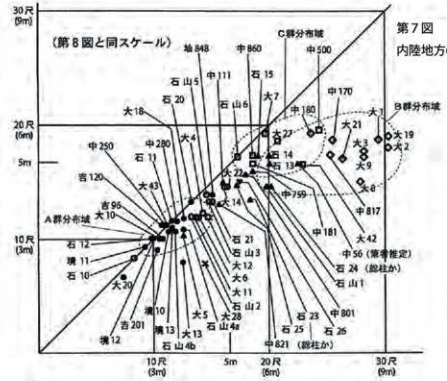
区画施設内部の建物群の性格　内陸地方上記3遺跡の様相からは、①同等規模の陸奥国郡衙政庁と建物形態が異なりその機能も違うと推定、②区画施設内の主体的なA類建物群の形態や規模と機能（倉庫群）、③石田遺跡例などから主要なB類建物群もA類建物群に類似機能の可能性、④本県一般集落で希少な陸奥国郡衙正倉に類似の正方形基調の建物群（B類建物群一部やC類建物群）の存在、⑤B類建物群の同一郡内での類似性などから、全体では区画内の主要建物のA・B類建物群とも倉庫的な性格が強いと考えられる。なお、⑥官衙的遺物が全体に少ないのも、この建物群の性格に起因するのであろう。

なお、正方形基調の区画形状や規模、同基調の建物形態や配置は、出羽や陸奥国の郡衙政庁や正倉の形態を、意識・志向した結果とも考えられる。[註2)]

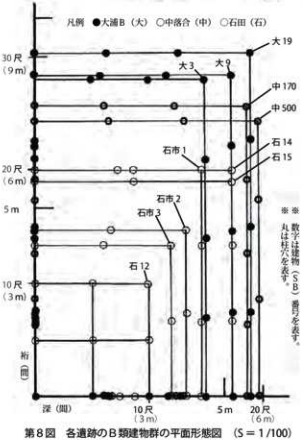
区画施設の成立（役割）と社会背景　さて、隣国陸奥国には類例が少ない、本県のこれら倉庫的機能が強く小規模な区画施設はどのような経緯で成立したのであろうか。



第6図　区画内部の建物構造図　（全て S＝1/1,000）



第7図
内陸地方の区画施設内部の建物形態図



第8図　各遺跡のB類建物群の平面形態図　(S＝1/100)

第9図　陸奥国郡衙正倉の平面図
(S＝1/2,000)

文献では、出羽国で8世紀後葉から遠国などの理由から陸奥国と並び租税の一つ「調」三種（米［白米・玄米］・穀［籾穀］・狭布）を自国利用できる規定が設けられる。

他に、8世紀末～9世紀前半に蝦夷との争乱や自然災害に伴い、在地住民に田租や調の免除、倉稟（穎・穀）開き貸振などの「復」が度々実施された記事が知られる。

また、全国的実効性は不明ながら9世紀前後に太政官符で各国に通達された「郡衙正倉を郷毎または相接した数郷毎への設置」（795年）、「収穫稲を近辺の小院への収納・設置」（823年）の郡衙正倉の分散規定もある。

第１０図　方形区画施設のある遺跡の変遷

遺跡位置		里端郡			最上郡			備考・文献事項 ＊6
		大浦B	中落合	地ノ上	石田	吉原Ⅰ	境田B	
		米沢市	南陽市	長井市	山形市南端	山形市隣郡	山形市北部	
近河川＊1		最上川＊3 (他川)200m	上無川100m	野川500m	本沢川400m	須川200m	馬見ヶ崎川 20m	
合流点＊2		羽黒川0.6km	最上川3.5km	最上川3 km	須川 2 km	本沢川0.5km	高瀬川0.6km	
8	1/4							712年：出羽国創建
	2/4							
		Ⅰ期　＊4･5				Ⅰ期		
	3/4	ST群	Ⅰ期		Ⅰ期	SB		778年：宝亀の乱
		Ⅱ期	区画・SB群	Ⅰ期	特殊SB	Ⅱ期		＊世紀後半：東日本で正倉放火「神火」多発
	4/4	区画・SB群		ST群	Ⅱａ期	SB増	Ⅰａ期	781～823年：出羽国府、秋田城から県内に移転
		Ⅱ期	Ⅱ期	Ⅱ期	区画・SB群	Ⅱ期	区画・SB群	●792年：最上郡の田租免除。811年：調査免除
9	1/4	区画・SB群	区画・SB群	区画・SB群	Ⅱｂ期	区画・SB群	Ⅰｂ期	◎795年：都市正倉の倉庫を郡毎に分散
		Ⅳ期			Ⅱ期	Ⅳ期	Ⅱ期	◎822年：収穫した近辺に小戦設置
	2/4	SB減・SK群			区画・SB群	SB減	区画・SB群	△830年：地震
			Ⅱ期		Ⅳ期		Ⅳ期	△841年：飢饉→●843年：倉庫の調査欠
	3/4		ＳＤ・SB群	Ⅱ期	SB減		SB減	△850年：地震→●850年：租免除。倉庫開き貸振
			Ⅳ期	ＳＸ				863年：最上郡が村山郡と分郡
	4/4		SB減・SK群					△871年：県境の鳥海山噴火
								878年：元慶の乱

＊１：「近河川」は、遺跡の最も近接する河川名と遺跡との距離を表す。
＊２：「合流点」は、近河川と最も近くで合流する他河川名と、その合流点から遺跡までの距離を表す。
＊３：河川のゴシック文字は郡内での主要河川（最上川・須川・馬見ヶ崎川など）を表す。
＊４：遺構は区画施設の存続時期。中遺構は区画施設は不明だが、区画機能の存続時期。遺構は遺跡の存続時期を表す。ST：竪穴住居、SB：掘立柱建物を表す。
＊５：各遺跡の各期下は主体的な遺構群を表す。各期の地界が不明瞭なものは破線、太線は火災（大浦Ｂ・吉原Ⅰ・中落合）を表す。
＊６：文献事項の●は出羽国の租税などの対応(免除など)、◎は倉庫に関する事項、△は出羽国の自然災害など、太政官符や六国史記事。

これらの時期は、概ね３遺跡の区画施設が成立時期とほぼ符合（第１０図）して注目される。

一方、出羽国は、陸奥国と比して郡・郷数が少なく、郡域及び郷域が広大とされる。筆者は、出羽国内陸部の官的要素が強い在地首長層が、上記社会背景や本県特有の地理的要因に効率的に対応するため、小規模な区画施設（倉庫的機能）を、郡内の河川を主とした交通の要所や各在地勢力の本貫地などに細かく設置したと推測する。

具体的には、一般的な地元郡衙正倉へ搬入する前の、郡以下（郷含む）の集積場（区画内の倉庫群）の機能を有しながら、前述租税の一部を自前利用できる規定や、倉稟の貸振など「復」に対処するための在地の備蓄庫（区画外の倉庫群か）の役割を担っていたと考えたい。

註１）研究史、遺構の年代基準である土器編年は、頁数の都合上、前述拙稿に譲り割愛した。

註２）出羽国各郡衙は、上記遺跡群をその一部とする考えもあるが、今後、他国と同様な高燥地に同形態が発見される可能性もあり、現状では特定を留保したい。

引用・参考文献

伊藤邦弘・植松暁彦　1999　「山形県の官衙関連遺跡」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会』

植松暁彦　2007　「山形県における古代の区画施設を有する遺跡群について」『さあべい第 23 号』

植松暁彦　2009　「山形県における古代の区画施設を有する遺跡群について（２）」『山形考古第９巻１号』

山形県埋蔵文化財センター　1997　『永源寺跡遺跡発掘調査報告書』　調査報告書第 86 集

川崎利夫　1998　「置賜郡衙はどこにあったか－その変遷について試論－」『うきたむ考古３』

進藤秋輝　2004　「城柵」『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡跡編』奈良文化財研究所

松村恵司　1998　「正倉の存在形態と機能」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

山形県埋蔵文化財センター　2000　『岩崎遺跡現地調査説明資料』

村木志伸　2003　「出羽南半における官衙関連遺跡」『歴史遺産研究創刊号』東北芸術工科大学

山中敏史　1994　『古代地方官衙遺跡の研究』株式会社塙書房

米沢市教育委員会　2000　『大浦Ｂ遺跡発掘調査報告書』　第 67 集

山形県埋蔵文化財センター　2004　『石田遺跡発掘調査報告書』　調査報告書第 122 集

山形市教育委員会　2002　『石田遺跡発掘調査報告書』　第 14 集

山形県埋蔵文化財センター　2005　『圸ノ上遺跡発掘調査報告書』　調査報告書第 140 集

山形県埋蔵文化財センター　2006　『中落合遺跡発掘調査報告書』　調査報告書第 168 集

山形県における江戸時代後期の陶磁器の流通

－米沢市堤屋敷遺跡出土遺物を中心として－

菅原哲文

1　はじめに

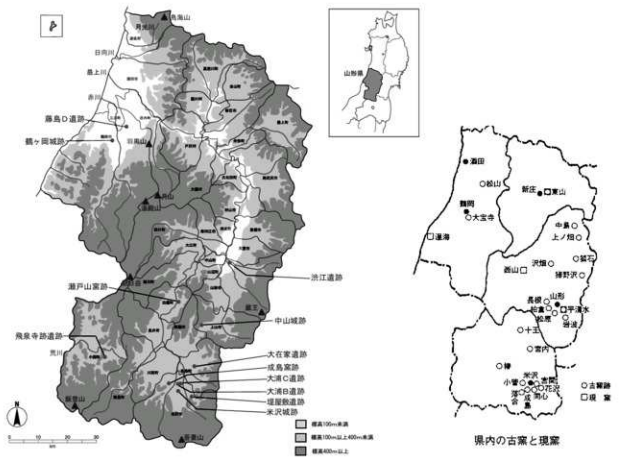
江戸時代後期になると、山形県内各地で、陶器や磁器を生産する在地の窯が盛んに操業するようになり、福島産の陶磁器の流入も拡大することで、九州の肥前陶磁器のシェアにとって代わるようになる。

県内の当期の概要について触れておく。主な江戸時代後期の遺跡と、窯跡の位置（板垣2002）を第1図に示した。県南内陸部の米沢を中心とした置賜地方は、主に上杉氏の米沢藩領であり、陶磁器の流通や在地の窯の成立に、福島産の影響が強く見られる。当地方では天明元年（1781）に成島窯が開窯するが、その成立には相馬焼の職人を呼んで試し焼を行った、などの記述がある（註1）。周辺地域には、南陽市宮内や白鷹町十王などの成島焼の系統を引く窯が存在する。

村山地方は、江戸時代当初、最上氏の山形藩であり、山形は城下町として整備された。当地方では、山形市の平清水が中心的な窯で、現在も操業している。当窯は文化年間頃から陶器の焼成を行っていた。弘化4年（1847）に磁器焼成に成功し、幕末から明治期以降の庶民層向けの陶磁器は、平清水が中心であったと考えられる。また、天保4年に県内で最初に磁器を焼いた窯として尾花沢の上の畑がある。こちらは献上品や贈答品の生産が中心と考えられている。

県北の新庄を中心とした最上地方は、戸沢氏の新庄藩領であった。当地方では、新庄東山焼が、陶器を主に生産する窯として、天保13年（1842）に開かれた。製品は海鼠釉が特徴的で、庄内の大宝寺焼と類似する。

日本海側の庄内地方は、主に酒井氏の庄内藩領であり、最上川河口に位置する酒田は、日本海沿岸の物流の玄関



第1図　山形県内の江戸後期遺跡分布図（左）・古窯分布図（右・板垣2002より引用）

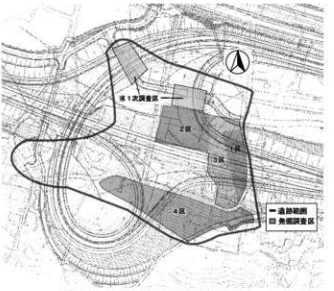
口としての役割を担う港町であった。庄内地方には、鶴岡に大宝寺焼がある。開窯の年代は不明であるが、記年銘資料として安永元年（1771）の記銘がある筆立てがあり、18 世紀末には操業していたと考えられる。

ここでは、江戸時代後期を中心とする陶磁器が出土した米沢市堤屋敷の出土遺物を分析し、当遺跡の近世陶磁器の流通の様相と、同時代の県内の陶磁器流通の様相について調査・研究したものである。

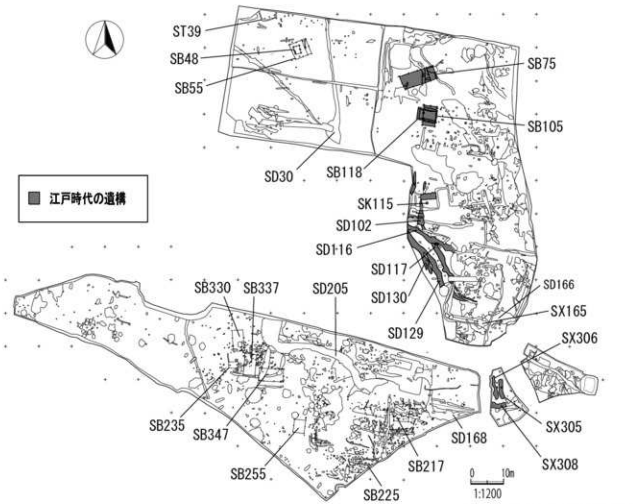
2　堤屋敷遺跡の概要

堤屋敷遺跡は米沢市万世町字桑山に所在する。米沢市街地から南東約 5km に位置し、南側には標高 502m の早坂山、東側には天王川（梓川）が北流する。立地は、早坂山の山腹の傾斜地と天王川による扇状地である。福島へ通じる街道沿いに位置する。

当遺跡は、東北中央自動車道（福島～米沢）新設事業により、平成 17 年に第 1 次調査が実施され、 中世の掘立柱建物跡 1 棟、土坑・柱穴が確認された（山形埋文 2006）。平成 19 年度の第 2 次調査は、調査面積延べ 10,000 ㎡について、調査区を 1 ～ 4 区に分けて実施し



第２図　堤屋敷遺跡調査区概要図（S = 1 : 3,500）



第３図　堤屋敷遺跡遺構配置図

た（第２図）（山形埋文 2008）。今回報告するのは、現在整理中の第２次調査出土遺物である。検出された遺構と遺物の概要を述べる。１区では、江戸時代の建物の柱穴や土坑、溝跡が検出され、近世陶磁器や寛永通宝などの銭貨が出土した。家屋の基礎により掘乱を受け、近代以降の遺物が多い。２区は、主な遺構として平安時代の竪穴住居跡１棟、中世の掘立柱建物跡が２棟と溝跡SD30が検出された。３区は、江戸時代の集落域で３棟の掘立柱建物跡や溝跡が検出された。SB105・118掘立柱建物跡は重複し、礎石や石の礎盤をもつ。SD116・117・129・130などの溝跡からは、江戸時代の遺物が出土した。中世のSD166溝跡から内耳土鍋が大量に出土した。焼土遺構SX165は、土器の焼成遺構の可能性も考えられる。４区は、中世の集落域である。外側に幅２mの溝が廻り、内側に掘立柱建物跡が繰り返し建てられている。建物群は４地点確認され、掘立柱建物跡が６棟、竪穴建物跡が１棟検出された。集落の外側を囲む溝跡（SD168・205）には、内耳土鍋を中心とした遺物が大量に廃棄されている。江戸時代末の遺構は、墓壙が10基確認されている。

3　出土した近世陶磁器

江戸時代の３区SK115土坑・SD102・116・117・129・130溝跡・４区SX305・306・308溝状遺構出土遺物を中心にとりあげる。SK115、SD102・116・117出土遺物は、18世紀後半～19世紀中葉頃が中心である。SD129・130の出土遺物は、18世紀代を中心に19世紀前半のものも含み、やや年代幅がある。４区のSX305・306は覆土の状態からほぼ同時期と考えられる。SX305・308からは、18世紀後半から19世紀中葉の遺物が出土している。いずれの遺構も、近代以降の掘乱などで遺物取り上げの際に掘乱の遺物が混入してしまう事があった。出土した陶磁器の特色は、以下の点が指摘できる（註２）。

磁器については、18世紀代は、くらわんか手の碗・皿類が中心的に認められ、この時期は肥前産（２・７・15・27・40・46・55～57）で占められる。19世紀代は、県内や東北産の可能性がある産地不明品の方が多い。肥前以外の染付磁器として、会津若松市の蚕養（こがい）焼が認められた。蚕養では、19世紀中葉の天保年間から磁器生産が盛んに行われていたと考えられている（柳田 1990）。確認された器種は碗のみである。

陶器について述べたい。肥前陶器は、呉器手の碗がSD129から比較的見られる（29～34）。SD117からは、京焼風陶器（25）が出土しているが稀である。碗以外の器種は乏しく、18世紀後半以降はほとんど確認されない。

福島市の岸窯製品が認められる。当窯は17世紀前半から18世紀前半～中葉頃まで操業していたと考えられる（福島市振興公社 1998）。擂鉢（35～37）が中心と思われるが、甕（38）・皿（23）、また、香炉・小皿・ヒダ皿などの小物類などの器種のバリエーションが認められる。18世紀代の遺物を伴う遺構から出土する傾向がうかがわれ、主に碗以外の器種が流通していると考えられる。

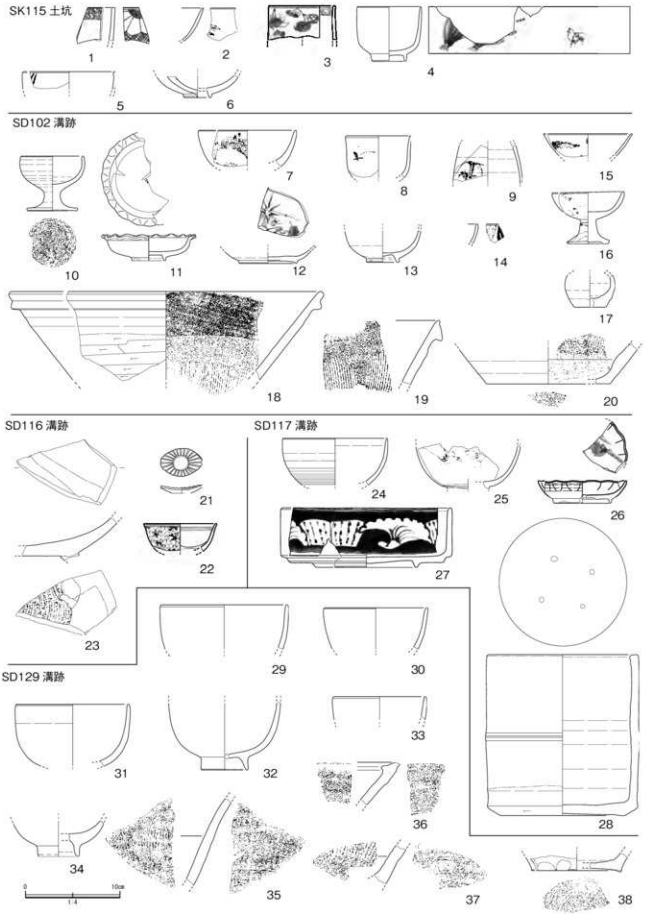
福島県浪江町で生産された大堀相馬焼は、18世紀後半から19世紀代にかけての流入が多い。陶器の碗が大半で、灰釉腰折碗（61）・腰錆碗（61）・糠白釉碗（13・50）が認められる。鉄絵の皿、土瓶、徳利（60）、仏飯器（16・43）などの器種も出土している。

福島県会津美里町本郷地区で生産されていた会津本郷焼と考えられる陶器の擂鉢・鉢が確認される。18世紀代の擂鉢（19・20）が比較的認められる。遺構外出土であるが、古新製の碗・皿が各１点出土している。

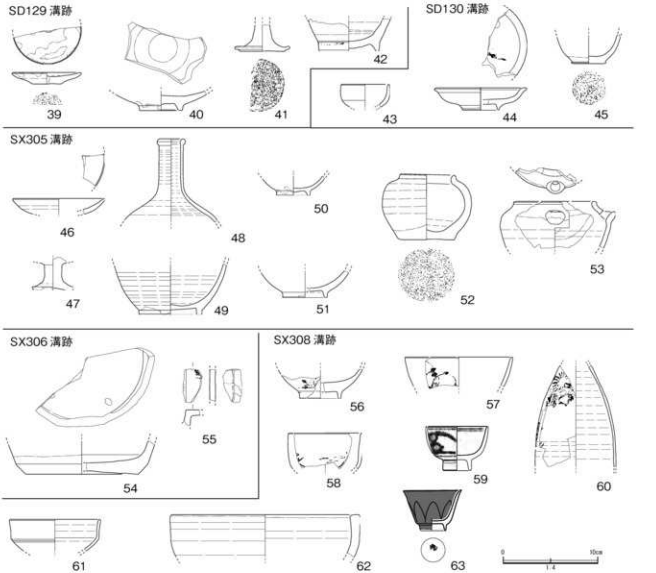
在地の成島系陶器は（註３）、擂鉢（18）・切立（28）・甕・鉢・火入・餌猪口などが確認された。擂鉢が特に多く、切立・甕がそれに次ぐ。18の擂鉢は、卸目の上端にナデ調整が施される19世紀第２四半期以降のもので、28の切立は口縁部が無釉で、内面の目跡が円形を呈するものでやや古手の様相を示す（註４）。

4　置賜地方の他遺跡の様相

江戸時代後期を中心とする置賜地方の他遺跡の事例を検討する。城館跡として、米沢城跡（山形埋文 1999）の調査があげられる。米沢城は慶長３年（1598）に上杉景勝が会津に移封された後は上杉氏の所領となった。明治３年に堀・土塁・二の丸寺院が破却された。山形県埋蔵文化財センターにより平成10年に実施された二の丸堀跡の調査では、5,000㎡が調査され、底面に格子状の障壁をもつ「障子堀」であることが明らかになった。



第４図　堤屋敷遺跡出土近世陶磁器



第５図　堤屋敷遺跡出土近世陶磁器

表１－１　堤屋敷遺跡出土陶磁器観察表

番号	地区	出土遺構	種別	器種	産地	年代・文様・釉・備考
1	3 区	SK115	磁器染付	筒形碗	肥前系の可能性	1770 ～ 1810 年代・（外面）菊花文・（内面）四方曝文
2	3 区	SK115	磁器染付	碗	肥前	18C 前～中・（外面）松文
3	3 区	SK115	磁器	筒形碗	肥前系あるいは在地	（外面）草花文・（内面）四方曝文
4	3 区	SK115	磁器	碗	蚤畳	19C 中葉・（外面）稲束に雀文
5	3 区	SK115	陶器	碗	関西系	18C 後半・（外面）色絵（赤・緑）
6	3 区	SK115	陶器	碗	関西系	18C 後半
7	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	碗	肥前（波佐見）	18C 後～19C 初・（外面）雪輪草花文
8	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	深小丸碗	蚤畳	19C 中葉・（外面）蝶文
9	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	徳利	不明	19C 前～幕末・（外面）笹文
10	3 区	SD102 撹乱	陶器	仏飯器	不明	19C
11	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	ヒダ皿	不明	19C
12	3 区	SD102	磁器染付	輪花皿	肥前系（在地の可能性も）	19C 前半～幕末・（内面）草花文・内面に目跡一カ所
13	3 区	SD102	陶器	碗	大堀相馬	（内外面）糠白釉
14	3 区	SD102	陶器	碗	関西系	18C・（外面）色絵（赤・緑）
15	3 区	SD102	磁器染付	碗	肥前	（外面）草花文
16	3 区	SD102	陶器	仏飯器	大堀相馬	19C・（外面）鉄絵・白色釉？
17	3 区	SD102	陶器	小瓶	不明	18C 末～19C 初・（外面）鉄釉
18	3 区	SD102	陶器	擂鉢	成島系	19C 第２四半期以降・（口縁内外）灰釉・（体部内外）鉄釉
19	3 区	SD102	陶器	擂鉢	会津本郷	18C・（内外面）鉄釉
20	3 区	SD102	陶器	擂鉢	会津本郷？	18C・（内外面）鉄釉・内面底部磨滅
21	3 区	SD116	白磁	紅皿	不明	明治以降・型押し成形
22	3 区	SD116-F1	磁器染付	小坏	不明	1820 ～ 60 年代・（外面）唐草文？
23	3 区	SD116-F1	陶器	大皿	岸	（外面）鉄釉・（内面）鉄釉に灰釉
24	3 区	SD117	陶器	碗	大堀相馬	18C・（口縁外面・内面）灰釉・（外面体部下半）鉄釉・貫入
25	3 区	SD117-F1	陶器	碗	肥前	18C 後半～・京焼風・貫入・SX165 からも出土

表１－２　堤屋敷遺跡出土陶磁器観察表

番号	地区	出土遺構・層位	種別	器種	産地	年代・文様・釉・備考
26	3 区	SD117-F2	磁器染付	輪花皿	不明	18C 末～幕末・（外面）山水文・口紅
27	3 区	SD117-F2	磁器染付	段重	肥前	1770 ～ 19C 代・焼き継ぎ・（外面）団杏文・書物？
28	3 区	SD117	陶器	切立	成島	（内外面）鉄釉・円形の目跡４ヶ所
29	3 区	SD129-F1	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手・貫入
30	3 区	SD129-F1	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手・貫入
31	3 区	SD129-F1	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手
32	3 区	SD129-F2	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手・貫入
33	3 区	SD129	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手
34	3 区	SD129	陶器	碗	肥前	17C 第四半期～ 18C 第１四半期・呉器手
35	3 区	SD129-F1	陶器	擂鉢	岸	SD134 からも出土・（内外面）鉄釉
36	3 区	SD129-F1, 2, 3	陶器	擂鉢	岸	（内外面口縁）灰釉
37	3 区	SD129-F1, 2, 3	陶器	擂鉢	岸	
38	3 区	SD129・130	陶器	甕	岸	源接・鉄釉
39	3 区	SD129・130	陶器	甕	不明	（内外面）鉄釉＋灰釉・ツマミの痕あり
40	3 区	SD129-F1	青磁	青磁皿	肥前（波佐見）	18C 後半・蛇ノ目釉剥ぎ
41	3 区	SD129-F1	磁器	仏飯器	不明	
42	3 区	SD129-F1	磁器染付	壺	肥前系か在地	18C 末～ 19C 前・（外面）圏線
43	3 区	SD130-Y	陶器	仏飯器	大堀相馬	19C・（内外面）糠白釉
44	3 区	SD130-F2	陶器	皿	大堀相馬？	19C・（内面）鉄絵あり
45	3 区	SD130	陶器	小壺	不明	（外面）鉄釉
46	4 区	SX305	磁器	皿	肥前	17C 後半～ 18C 前半・（内面）釉剥ぎ状の痕跡
47	4 区	SX305-F1	磁器	仏飯器	肥前系	18C 後半～ 19C 前
48	4 区	SX305-F	磁器	徳利	不明	（内外面）灰釉
49	4 区	SX305-F1	陶器	徳利	不明	（内外面）灰釉・48 と同一の可能性
50	4 区	SX305-F3	陶器	碗	大堀相馬	19C 前半・（外面）鉄釉・（内面）糠白釉
51	4 区	SX305	陶器	碗	大堀相馬	18C・（内外面）灰釉
52	4 区	SX305	陶器	小壺	岸	（外面）灰釉
53	4 区	SX305-F1	陶器	土瓶	不明	（内外面）白色釉・（内外面口縁）灰釉
54	4 区	SX306-F1	陶器	鉢	会津本郷	（内外面）白色釉
55	4 区	SX306	磁器染付	花入	肥前	17C 後～ 18C 前
56	4 区	SX308	磁器染付	碗	肥前	18C 前半・（外面）草花文
57	4 区	SX308	磁器染付	碗	肥前	18C 前半・（外面）草花文
58	4 区	SX308	磁器染付	深小丸碗	在地	1820 ～ 1860 年代・源接
59	4 区	SX308	磁器染付	小碗	東北	（外面）山水文？
60	4 区	SX308	陶器	徳利	大堀相馬	19C・（外面）花文（染付）
61	4 区	SX308	陶器	碗	大堀相馬	18C・（内外面）灰釉
62	4 区	SX308	陶器	鉢？	会津本郷？	（内外面）鉄釉
63	4 区	SX308	磁器	小坏	不明	明治以降・瑠璃釉（人工コバルト）・高台内銘

堀の覆土は、上層・中層・下層に分層され、上層は近代、中層は 18 世紀後半～ 19 世紀前半の遺物、下層は 17 世紀初頭～ 19 世紀前半の遺物が出土している（山形埋文 1999）。やや時間幅のある資料であるが、当地方の陶磁器の流通を反映するものと考えられる。肥前産磁器については、碗では、雪輪草花文や二重網目文が施される丸碗・コンニャク印判が施される碗・腰張碗・筒丸碗がみられる。肥前産陶器は、碗・皿が確認されるが、碗が主であり、呉器手・緑釉流し掛け・京焼風がある。擂鉢・甕・鉢はみられない。岸窯製品は、下層からの出土が多く認められるが、上層からも、擂鉢・鉢・皿などが出土している。大堀相馬焼は、碗類が主で、灰釉碗・腰錆碗・糠白釉碗がある。会津本郷焼は、碗・皿もあるが、鉢・火入・瓶・花瓶・擂鉢などの器種が出土している。在地の成島焼は、切立が出土している。米沢城跡の肥前磁器には、型打成形による陽刻の文様が施された輪花皿・鉢や、有田産と考えられる装飾性に富む皿類が見られるが、これらは堤屋敷遺跡では確認されておらず、城館という遺跡のランクによるものと見られる。

陶磁器の産地組成（表３）であるが（註５）、中層で肥前産磁器が全体の 42.4％、磁器類の８割を占める。次いで多いのが大堀相馬焼で 12％、肥前産陶器が 7.6％、会津本郷 6.3％と、福島産陶器が陶器類の多くの割合を占める。瀬戸・美濃系陶器は少なく１％に満たない。器種との関係であるが、碗・皿類は、肥前産の磁器・陶器が主体で、それに大堀相馬が一部を補完し、鉢・擂鉢やその他の器種は、福島産や在地の陶器類が主体を占める関係にあるといえる。表２に、堤屋敷遺跡の陶磁器組成を示した（註６）。各遺構の個体数が少ないため、３区 SD129・130、４区 SX305・306・308 がそれぞれ同時期に機能していた溝跡と考えられるので合計して集計し、３区 SK115・SD102・116・117 も概ね同時期と考えて集計した。SD129・130 は主として 18 世紀代から 19 世紀前半の遺物を含み、その他は、18 世紀後半から 19 世紀中葉にかけての資料と捉えられる。米沢城跡（表３）と比較すると、米沢城の磁器類は肥前磁器が

中心であるが、堤屋敷遺跡は産地不明の磁器の比率が高い。米沢城跡よりも時期的に後出する様相が反映されているものと考えられる。陶器は、肥前陶器が碗類などの限られた器種の流通に限定されるが、19世紀代になると消滅し、その他の産地は福島の岸・会津本郷・大堀相馬などで占められる様相は両遺跡共通である。成島系陶器の比率が堤屋敷遺跡がより高いことも時期的な傾向と考えられる。

次に、高畠町大在家遺跡を検討したい。当遺跡では、米沢城跡出土資料より新しい19世紀後半の資料が報告されており（山形埋文2006）、堤屋敷遺跡出土遺物の時期に近いと考えられる。遺跡は、高畠町市街地中心部に位置し、江戸時代には幕府の代官所が置かれた高畠城の城下町である。発掘調査区は城下町の横町通りに相当し、町屋が形成されていた。文献では、文化7年（1810）・文政6年（1827）の高畠城火災、明治3年（1870）・6年（1873）の高畠村大火の記録がある。調査区の焼土層は、これらの火災に関連すると考えられる。中でもSX2205土坑は一括性が高く、幕末頃の大火後の整地層と考えられている（註6）。肥前の染付磁器には、くらわんか手の丸碗・筒形碗・端反碗・小碗・蛇の目凹形高台の皿・徳利などが認められる。瀬戸・美濃系磁器は、筒丸碗のみが認められる。産地不明の磁器は、内面に4ヶ所の目跡の端反皿・目跡がある皿・小広東碗・型打ち成形の角皿がある。陶器は、肥前の鉢・在地の成島系陶器の切立・秉燭・甕・擂鉢、京焼の急須、大堀相馬の飛び鉋の蓋があり、産地不明のものもある。

この19世紀後半のSX2205出土陶磁器（報告書掲載および未掲載遺物）の産地組成は、肥前磁器が8％未満、蚕養が2％未満、産地不明磁器が約50％、成島系陶器約9％、大堀相馬が6％未満、瀬戸美濃が約3％、肥前陶器、京焼が1％未満、産地不明陶器が約20％である。やはり米沢城よりも産地不明の磁器がかなり多い。しかし福島産陶器の比率は多くはなく、代わって成島系陶器や産地不明陶器が多いようである。

表2　堤屋敷遺跡出土陶磁器の産地組成

3区SD129・130出土陶磁器の産地組成

	肥前磁器	蚕養	不明磁器	肥前陶器	京・信楽	岸	大堀相馬	会津本郷	成島	不明陶器	
SD129	1		3	9		3	1		1	2	
SD129・130				1		1	1			2	
SD130	2			2			2			4	
計	3	0	3	12	0	4	4	0	1	8	35
	8.57%	0.00%	8.57%	34.29%	0.00%	11.43%	11.43%	0.00%	2.86%	22.86%	

3区SK115・SD102・116・117出土陶磁器の産地組成

	肥前磁器	蚕養	不明磁器	肥前陶器	京・信楽	岸	大堀相馬	会津本郷	成島	不明陶器	
SK115	2	2	3		2						
SD102攪乱	2	1	5				2	1	2	6	
SD102	4		5		1		7	2	2	8	
SD116	1		4			2	5		1	4	
SD117	2		2				1		2		
計	11	3	19	0	3	2	15	3	7	18	81
	13.58%	3.70%	23.46%	0.00%	3.70%	2.47%	18.52%	3.70%	8.64%	22.22%	

4区SX305・306・308出土陶磁器の産地組成

	肥前磁器	蚕養	不明磁器	肥前陶器	京・信楽	岸	大堀相馬	会津本郷	成島	不明陶器	
SX305	2		1			1	2			4	
SX306	3		1				2	1		1	
SX308	2		8			2	8	1	5	3	
計	7	0	10	0	0	3	12	2	5	8	47
	14.89%	0.00%	21.28%	0.00%	0.00%	6.38%	25.53%	4.26%	10.64%	17.02%	

表3　米沢城二の丸堀跡出土陶磁器の産地組成（高桑2002より引用）

	中国	肥前磁器	平清水	不明磁器	肥前陶器	瀬戸美濃陶器	京・信楽
下層	5 (7.0%)	17 (23.9%)	1 (1.4%)	0 (0.0%)	7 (9.9%)	6 (8.5%)	3 (4.2%)
中層	6 (3.8%)	67 (42.4%)	(0.0%)	10 (6.3%)	12 (7.6%)	1 (0.6%)	0 (0.0%)

	岸	大堀相馬	小野相馬	会津本郷	成島	蚕器系陶器	不明陶器	合計
下層	12 (16.9%)	3 (4.2%)	0 (0.0%)	5 (7.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	12 (16.9%)	71
中層	4 (2.5%)	19 (12.0%)	1 (0.6%)	10 (6.3%)	2 (1.3%)	1 (0.6%)	25 (15.8%)	158

5　まとめ

山形県の江戸後期を中心とした陶磁器の様相であるが、堤屋敷遺跡を中心とする陶磁器の検討を行った結果、以下の内容が指摘される。

内陸の置賜地方では、城館跡や集落跡を含めて、18世紀後半以降に、福島の大堀相馬・会津本郷が肥前陶器と入れ替わるようにして、陶器の流通の主体を占めるようになる。18世紀末には福島の窯の影響を受けて成島窯が成立するが、その後の19世紀代にかけて擂鉢・甕・切立・壺・鉢等で陶器の消費をまかなうようになる。特に、擂鉢や甕・鉢類は、19世紀に入ると会津本郷と成島のシェアが入れ替わる事が確認される。成島であまり生産されないと考えられる碗・皿類については、福島産陶器が引き続き消費される。磁器は、地元で生産できない18世紀は肥前で占められるが、19世紀以降は、会津若松市の蚕養焼などの福島産の磁器が伴う。19世紀中葉以降では、堤屋敷遺跡や高畠町大在家遺跡の様相などから、東北地方で生産された可能性がある産地不明の製品が肥前を凌ぐようになるなど消費に占める割合が増加する。一方、瀬戸・美濃系磁器の流通は希薄であり、流通が盛んになるのは明治期に入ってからである。

村山地方や庄内地方の様相と比較すると、村山地方の場合、集落出土資料ではないが、江戸後期の墓壙出土資料である渋江遺跡（山形埋文2002b）の様相から判断すると、福島産陶磁器の流通が活発であったと考えられる。山形市には、文化年間に開窯した平清水焼があり、今後、在地陶磁器の消費の様相が明らかとなる良好な資料の報告が望まれる。

庄内地方は、日本海沿岸の物流の窓口であり、肥前陶磁器の流通は優位であるといえる。鶴ヶ岡城跡の様相では、18世紀代は、肥前磁器を主体として、肥前陶器も幅広い器種が認められる（山形埋文2002a）。

19世紀代は、肥前磁器が依然磁器の中心を占めるが、肥前陶器は減少する。代わりに、在地の大宝寺焼が甕・鉢・徳利類などを中心にその補完となる。また、産地不明の陶器も多い。瀬戸・美濃系陶器は、19世紀に入ると散発的に出土が認められる。19世紀後半になると、磁器染付碗類の流入が目立つ。

以上のように、山形県における内陸部では、18世紀後半から肥前の陶器にかわって福島県産陶器の流入が盛んになる段階、19世紀前半頃から、在地の成島系陶器の製品が福島産陶器と器種ごとに使い分けが行われてゆく段階、19世紀後半以降は在地や東北地方産の可能性がある磁器消費が活発化する段階と捉えられる。このことは、肥前製品が流通しやすい日本海側とは対照的な在り方を示している。日本海側では、舟運による陶磁器の輸送が主であるが、内陸部では陸路もしくは最上川の舟運が主と考えられる。碗・皿以外の甕・擂鉢・鉢などの大型品は、肥前などの遠隔の生産地では内陸までの輸送コストがかさむことから、近接する福島などの生産地が選択されていると考えられる。

最後に、堤屋敷遺跡出土陶磁器の生産地の比較検討では、多くの方々に御教示いただいた。感謝申し上げたい。

註1）上杉文書『官曝』天保3年（1832）7月の書に記載がある。
註2）陶磁器の産地同定については、以下の方々に遺物を実見していただき、御教示いただいた。大橋康二氏・関根達人氏・飯村均氏・吉田博行氏・近藤真佐夫氏・堀江格氏・山下峰司氏・藤澤敦氏・高橋拓氏・園井修氏。
註3）置賜地方には、成島焼とその系統を引く小管焼・蟇蒲沢焼・十王焼などの窯があり、現時点ではこれらの窯跡製品の判別は困難である。このため、板垣英夫氏にならって、これらの成島焼やその系統を引く陶器を、「成島系陶器」と呼称しておく。
註4）高橋拓氏の御教示による。
註5）高桑登2002による米沢城跡出土陶磁器の産地組成である。
註6）個体数の算定は、接合後の破片数をカウントした。
註7）明治初期と考えられる遺物も含まれている。
註8）報告書未掲載遺物を含めて、接合後の293破片を検討した。比熱して黒変し産地が特定不可能な遺物もあるため、産地不明の磁器・陶器の割合がやや多くなっている。

参考・引用文献

板垣英夫 2002「山形県の近世の焼き物の特集にあたって」『羽陽文化』147　pp. 2-7
財団法人福島市振興公社 1998『岸窯跡』福島市埋蔵文化財報告書第111集
財団法人山形県埋蔵文化財センター1999『米沢城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第66集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2002a『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2002b『渋江遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2006『大在家遺跡第1次・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第153集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2006『稲荷山館跡・堤屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第156集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2008「堤屋敷遺跡」『年報平成19年度』
高桑登2002「山形県米沢城跡における食器組成」『東洋陶磁』31　pp. 29-42
柳田俊雄1990『妻養窯跡発掘調査報告書』会津若松市文化財報告書第15号

ISSN　1341－397X

年　　報

平成21年度

2010年５月31日　発行

発　行　　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161
山形県上山市弁天二丁目15番１号
☎023－672－5301㈹
印　刷　　㈱大　風　印　刷